ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書

XIV－6

1987

滋賀県教育委員会
財団法人 滋賀県文化財保護協会

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書

XⅣ－6

1987

滋賀県教育委員会
財団法人 滋賀県文化財保護協会

序

滋賀県教育委員会では、活力のある県民社会、生きがいのある生活を築くための一つとして、文化環境づくりにとりくんでいます。特に、文化財保護行政にたずさわるものとして、近年の社会変化に即応し県下の実情や将来あるべき姿を見定めつつ、文化財の保護と保存に努めております。

先人が残してくれた文化財は、現代を生きる我々のみならず子々孫々に至る貴重な宝でもあります。このような大切な文化遺産を破壊することなく、後世に引き継いでいくためには、広く県民の方々の文化財に対する深いご理解とご協力を得なければなりません。

ここに、昭和61年度に実施しました県営ほ場整備事業に係る発掘調査の結果を6分冊に分けて取りまとめましたので、ご高覧のうえ今後の埋蔵文化財保護のご理解に役立てていただければ幸いです。

最後に、発掘調査の円滑な実施にご理解とご協力を頂きました地元の方々、並びに関係機関に対して厚く感謝の意を表します。

昭和62年3月

滋賀県教育委員会
教育長　飯田志農夫

例　　言

1．本書は、県営ほ場整備事業に伴う、蒲生郡日野町宮ノ前遺跡（昭和60年度、61年度）守山市杉江東遺跡の発掘調査報告書である。

2．本調査は、滋賀県農林部からの依頼により、滋賀県教育委員会を調査主体とし、㈶滋賀県文化財保護協会を調査機関として実施した。

3．本書で使用した方位は、磁針方位に基づき、高さについては、東京湾の平均海面を基準としている。

4．本事業の事務局は次のとおりである。

昭和60年度

滋賀県教育委員会

文化財保護課長	市原　浩
課長補佐	中正輝彦
埋蔵文化財係長	林　博通
技師	葛野泰樹
管理係主事	山本徳樹

㈶滋賀県文化財保護協会

理事長	南　光雄
事務局長	江波弥太郎
埋蔵文化財課長	近藤　滋
調査三係長	大橋信弥
技師	宮崎幹也
総務課長	山下　弘
主事	泉　喜子

昭和61年度

滋賀県教育委員会

文化財保護課長	服部　正
課長補佐	田口宇一郎
埋蔵文化財係長	林　博通
埋蔵文化財係主任技師	葛野泰樹
管理係主任主事	山本徳樹

㈶滋賀県文化財保護協会

理事長	南　光雄
事務局長	中島良一
埋蔵文化財課長	近藤　滋
調査三係長	兼康保明
技師	稲垣正宏
総務課長	山下　弘
主事	西田博之

6．本書の執筆、編集は、第一章、宮ノ前遺跡の第一節（60年度調査区）は宮崎幹也が、第二節（61年度調査区）は稲垣正宏が、第二章、杉江遺跡、第三章、杉江東遺跡は稲垣正宏が行ない、第四章の小御門古墳群については、日野町教育委員会日永伊久男が行なった。

7．出土遺物や、写真、図面については、滋賀県教育委員会で保管している。

目　　次

第１章　宮ノ前遺跡

位置と環境 …… 1

第一節（昭和60年度調査区） …… 2

１．調査の経過 …… 2

２．調査結果 …… 2

３．小結 …… 7

第二節（昭和61年度調査区） …… 8

１．はじめに …… 8

２．調査の経過と結果 …… 8

３．おわりに …… 14

第２章　杉江遺跡

１．はじめに …… 23

２．位置と環境 …… 23

３．調査の経過と結果 …… 23

４．おわりに …… 27

第３章　杉江東遺跡

１．はじめに …… 29

２．位置と環境 …… 29

３．調査の経過と結果 …… 29

４．おわりに …… 35

第４章　小御門古墳群

１．はじめに …… 39

２．位置と環境 …… 40

３．遺構 …… 41

４．遺物 …… 53

５．まとめ …… 54

図　版　目　次

第１章　宮ノ前遺跡

（昭和60年度）

図版１　１．調査前風景（西より）

２．調査前風景（南より）

図版２　第６トレンチ全景（南より）

第４トレンチＳＤ02（南東より）

図版３　第７トレンチ全景（東より）

第７トレンチ全景（西より）

図版４　第７トレンチ全景（南東より）

第７トレンチＳＤ08（西より）

図版５　第８トレンチ全景（西より）

第８トレンチ全景（北より）

（昭和61年度）

図版６　遺構（東より）

遺構（南より）

図版７　ＳＫ001掘削前

ＳＫ001掘削後

図版８　ＳＫ002掘削前

ＳＫ002掘削後

図版９　中国銭出土状況（その１）

中国銭出土状況（その２）

図版10　中国銭拓本図

図版11　出土遺物

第２章　杉江遺跡

図版１　第１トレンチ（西部―西より）

第１トレンチ（東部―西より）

図版２　第２トレンチ（東部―東より）

第２トレンチ（東部―西より）

図版３　第２トレンチ（中央部―西より）

第２トレンチ（西部―東より）

図版４　第２トレンチ（西部―西より）

第２トレンチ（西部―西より）

第３章　杉江東遺跡

図版１　出土遺物

第４章　小御門古墳群

図版１　１．調査前遠景（北東より）

２．調査前遠景（東より）

図版２　１．調査前のＭ区（右）とさつき荘内の古墳（北より）

２．Ｍ区調査完了後（北東より）

図版３　１．Ｍ区ＮＴＳＤ-1（東より）

２．Ｍ区たちわり後（南東より）

図版４　１．46-1調査完了後（西より）

２．47-1調査完了後（南東より）

図版５　１．72-2調査完了後（北西より）

２．72-2Ｃ-Ｃ′断面（西より）

図版６　１．72-2ＳＫ-1（南より）

２．28-2調査完了後（北東より）

図版７　１．71-1調査完了後（南東より）

２．71-2調査完了後（南東より）

図版８　１．71-2遺物出土状況

２．71-2拡調査完了後（南より）

図版９　１．71-3調査完了後（南東より）

２．71-3ＳＤ-1（北より）

図版10　１．71-3ＳＤ-1遺物出土状況

２．71-3ＳＫ-1（南西より）

図版11　１．71-3ＳＫ-1土器出土状況

２．71-3ＳＫ-1漆布出土状況

図版12　１．71-4調査完了後（南東より）

２．71-5調査完了後（北西より）

図版13　出土遺物

図版14　出土遺物

図版15　出土遺物

図版16　出土遺物

図版17　出土遺物実測図

図版18　出土遺物実測図

挿　図　目　次

第１章　宮ノ前遺跡

第１図　周辺遺跡分布図 …… 1

第２図　宮ノ前遺跡（昭和60年度調査）トレンチ配置図 …… 3

第３図　宮ノ前遺跡（昭和60年度調査）土層断面図 …… 4

第４図　宮ノ前遺跡（昭和60年度調査）第７トレンチ遺構図 …… 5

第５図　宮ノ前遺跡（昭和60年度調査）第８トレンチ遺構図 …… 6

第６図　遺跡位置図（昭和61年度調査） …… 8

第７図　遺跡周辺図（昭和61年度調査） …… 9

第８図　土層断面図（昭和61年度調査） …… 10

第９図　遺構全体図（昭和61年度調査） …… 11

第10図　遺物実測図（昭和61年度調査） …… 14

第２章　杉江遺跡

第１図　周辺遺跡分布図 …… 24

第２図　遺跡位置図 …… 25

第３図　遺跡位置図 …… 26

第４図　遺構全体図 …… 27

第３章　杉江東遺跡

第１図　遺跡位置図 …… 30

第２図　土層断面図 …… 31

第３図　遺構全体図（第１トレンチ・第２トレンチ） …… 32

第４図　遺構全体図（第３トレンチ） …… 33

第５図　出土遺物実測図 …… 34

第４章　小御門古墳群

第１図　遺跡周辺図 …… 39

第２図　調査区域図 …… 40

第３図　Ｍ区実測図 …… 43

第４図　72-2実測図 …… 45

第５図　72-2ＳＫ-1実測図 …… 46

第６図　28-2・71-1・71-2実測図 …… 47

第７図　71-2拡実測図 …… 49

第８図　71-3実測図 …… 50

第９図　71-3ＳＫ-1実測図 …… 51

第10図　71-4・71-5実測図 …… 52

表　目　次

第１章　宮ノ前遺跡

（昭和61年度）

第１表　遺物観察表（土器）…… 16

2　遺物観察表（中国銭）…… 18

第３章　杉江東遺跡

第１表　遺物観察表 …… 36

第４章　小御門古墳群

第１表　遺物観察表 …… 58

第１章　宮ノ前遺跡

位置と環境

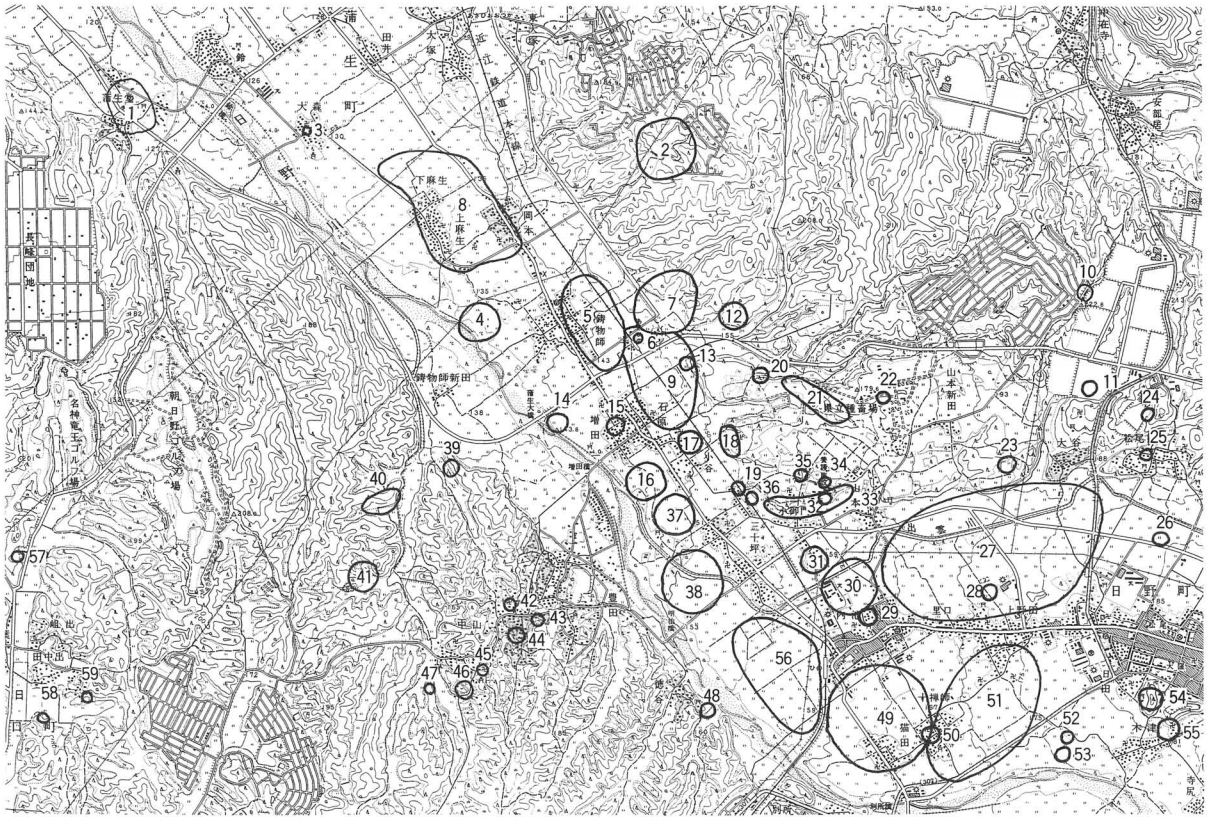
宮ノ前遺跡の所在する日野町の地形を概観すると以下の３つに大別することができる。

第１に新世代第三紀鮮新世（700万年前）から新世代第四紀洪積世（200万年前）にかけて堆積した古琵琶湖層群が、鈴鹿山脈の隆起の影響をうけて成立した八日市丘陵、日野丘陵、水口丘陵などの丘陵部、第２に丘陵縁辺の段丘面、第３に日野川とその支流による丘陵間の沖積層、以上の３つの地形である。

宮ノ前遺跡は、日野川の支流が、日野丘陵を開削した小渓谷の谷口部から、日野川右岸の沖積層にかけて広がっており、行政区分によると日野町石原から蒲生町鋳物師に跨がって所在する。

現在の石原の集落と鋳物師の集落は、氏神（竹田神社）を共有する関係の深い集落である。

宮ノ前遺跡の周辺に所在する主な遺跡をあげてみると、小渓谷の上流最奥部には、平安末から鎌倉中期にかけての大墓地群で、中国製、日本製の蔵骨器が大量に出土した大谷古墓があり、中流部には奈良時代の集落遺跡である焼山遺跡がある。宮ノ前遺跡に隣接し、同じく小渓谷の谷口部に立地する遺跡としては、奈良、平安時代の集落跡である外広遺跡（行政区分は蒲生町）がある。



蒲生町　1 蒲生堂遺跡　2 岡本遺跡　3 大森城跡　4 塔の堂遺跡　5 神開遺跡　6 呉媛塚遺跡　7 外広遺跡　8 麻生遺跡
日野町　9 宮ノ前遺跡　10 大谷古窯遺跡　11 大谷遺跡　12 中ノ平遺跡　13 山畑遺跡　14 里裏遺跡　15 明性寺遺跡　16 田寺遺跡　17 野瀬遺跡　18 小谷城跡　19 小谷古墳　20 野神平遺跡　21 焼山遺跡　22 月ケ岡遺跡　23 正明山遺跡　24 鳥ケ巣遺跡　25 正明寺遺跡　26 浄土寺遺跡　27 北代遺跡　28 上野田館遺跡　29 内池館遺跡　30 内池遺跡　31 小御門（小御門Ｃ）城跡　32 小御門（小御門Ｂ）遺跡　33 小御門（小御門Ａ）古墳群　34 口山東遺跡　35 口山遺跡　36 山之添遺跡　37 下森遺跡　38 番場遺跡　39 中山北遺跡　40 金折山遺跡　41 作谷遺跡　42 隆讃寺遺跡　43 金光院遺跡　44 長楽寺遺跡　45 金剛定寺遺跡　46 大将軍塚遺跡　47 中山北遺跡　48 徳谷遺跡　49 猫田遺跡　50 下周坊遺跡　51 十禅師遺跡　52 狐塚遺跡　53 木津森西城跡　54 日枝社古墳　55 木津岡山城跡　56 播沢遺跡
水口町　57 春日北遺跡　58 春日山の神遺跡　59 春日峰道遺跡

第１図　周辺遺跡分布図

第一節　60年度調査区

1．調査の経過

宮ノ前遺跡は、蒲生郡日野町石原に所在し、集落の東方に伸びる谷地形の耕作地帯に立地する。同地区は蒲生町鋳物師の集落と隣接しており、鋳物師の東方に拡がる外広遺跡と南北に続く位置関係にある。

鋳物師の集落の南東端にある竹田神社の南方を中心として宮ノ前遺跡は拡がっており、これまでの数回にわたる調査から、木製品を多量に出土した弥生時代の溝状遺構、古墳時代の竪穴住居、奈良時代の掘立柱建物をはじめとする、弥生時代から鎌倉時代にかけての複合集落跡と理解される。

また、昭和59年度に実施した遺跡西端部の調査では、土壙状落込みから和同開珎100枚の収められた土師器の甕が出土している。

昭和60年度の調査は、以上の調査区の東側にあたり、宮ノ前遺跡の東部の拡がりを追求することを目的とした。

調査範囲は、南北約150ｍ・東西約100ｍを測り、南北を丘陵に挟まれた谷地形を呈している。

当該地には、土師器・須恵器の散布が認められていたが、その範囲については全く不明であり、排水路箇所と切土箇所を対象に試掘調査を実施し、その結果を基にして、工事の影響を受けると判断された箇所を発掘調査した。

発掘調査は、排水路箇所（第１トレンチ～第６トレンチ）・切土箇所（第７トレンチ・第８トレンチ）の８箇所において実施した。

調査は、表土および堆積土をバックホウで掘削した後、人力により遺構の精査・掘削をおこない、図面実測・写真撮影によって記録化をはかった。

2．調査結果

第１トレンチ～第６トレンチ

Ｌ字形に曲がる排水路箇所を対象に６本のトレンチを設定した。東西方向に伸びる第１トレンチ～第３トレンチでは、表土下60～70㎝で遺構面と想定される淡青灰色粘質土層に至るが、直交して南北方向に伸びる第４トレンチ～第６トレンチでは、表土下80～120㎝で同一面に至り、谷地ほど旧地形上の堆積に厚みが認められる。

このうち最も平均的な土層堆積を示す第４トレンチでは、第Ⅰ層（耕作土層）・第Ⅱ層（淡灰色砂質土層）・第Ⅲ層（淡灰白色粘土層）・第Ⅳ層（灰色粘質土層）・第Ⅴ層（灰褐色粘質土層）・第Ⅵ層（暗灰色粘質土層）の６層の堆積が認められる。

堆積土は、いずれも粘質土及び粘土で構成されており、平地に立地する遺跡の一般的な土層堆積と様相を異にするだけでなく、遺物包含層も存在しない。

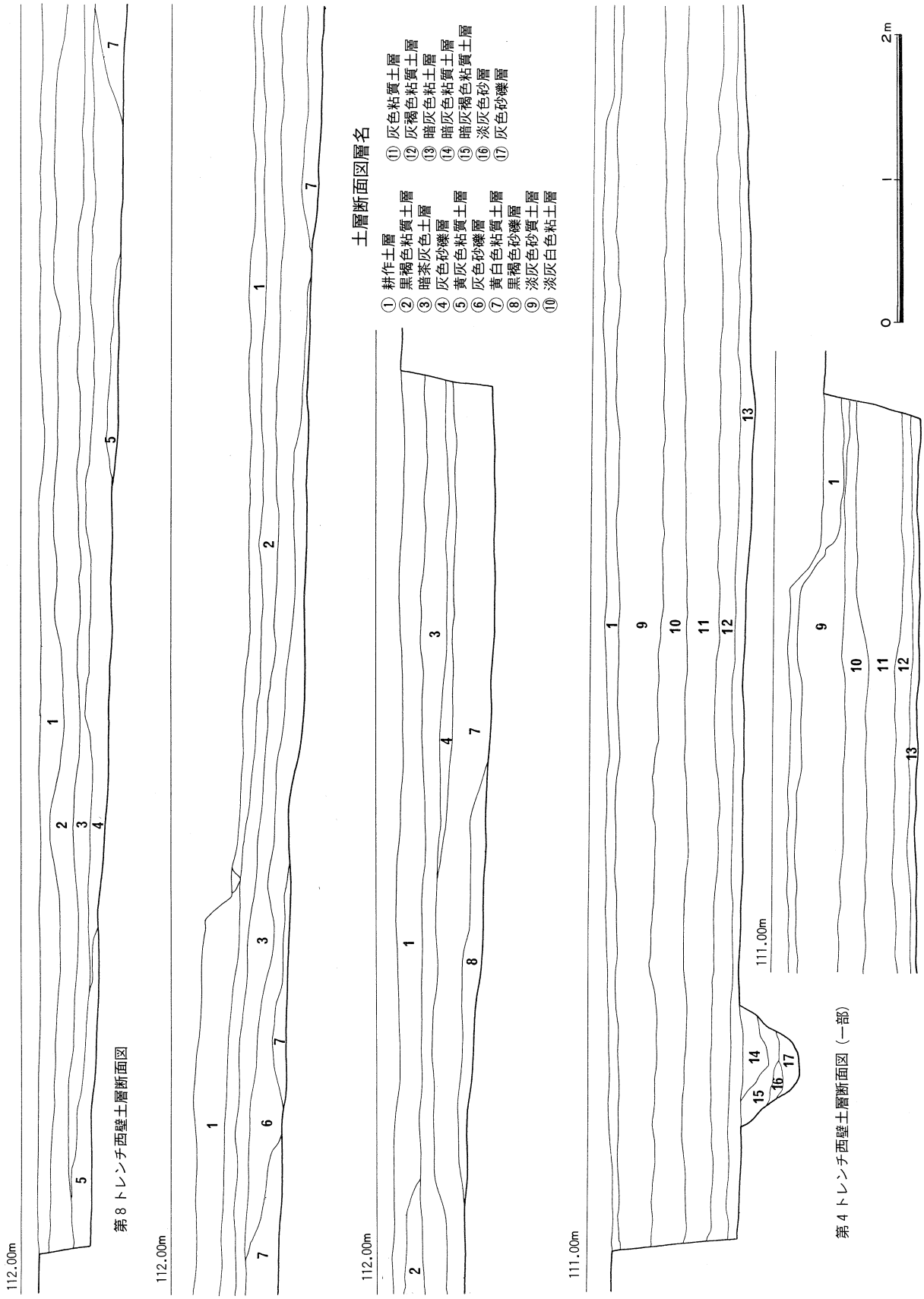
第１トレンチ～第６トレンチで検出した遺構は、溝状遺構２（ＳＤ01・ＳＤ02）と柱穴群である。

溝状遺構は、第３トレンチ東端（ＳＤ01）と第４トレンチ南端（ＳＤ02）で検出しており、いずれも北西から

第２図　宮ノ前遺跡（昭和60年度調査）トレンチ配置図

南東方向に伸びる幅80㎝・深さ60㎝程度のものであり、連続する遺構となる可能性をもつ。

ＳＤ01・ＳＤ02ともに３層～４層の土層堆積を示しており、このうちＳＤ02の最上層（暗灰色粘質土層）からは須恵器と平瓦の出土をみた。遺物は、いずれも少量の小破片であるが、須恵器の中には杯の高台部分が出土し



第3図　宮ノ前遺跡（昭和60年度調査）土層断面図

ており、８世紀以降の遺物と捉えられる。

柱穴群は、第４トレンチと第５トレンチで確認されているが、建物遺構を判別できるものは無い。

第７トレンチ

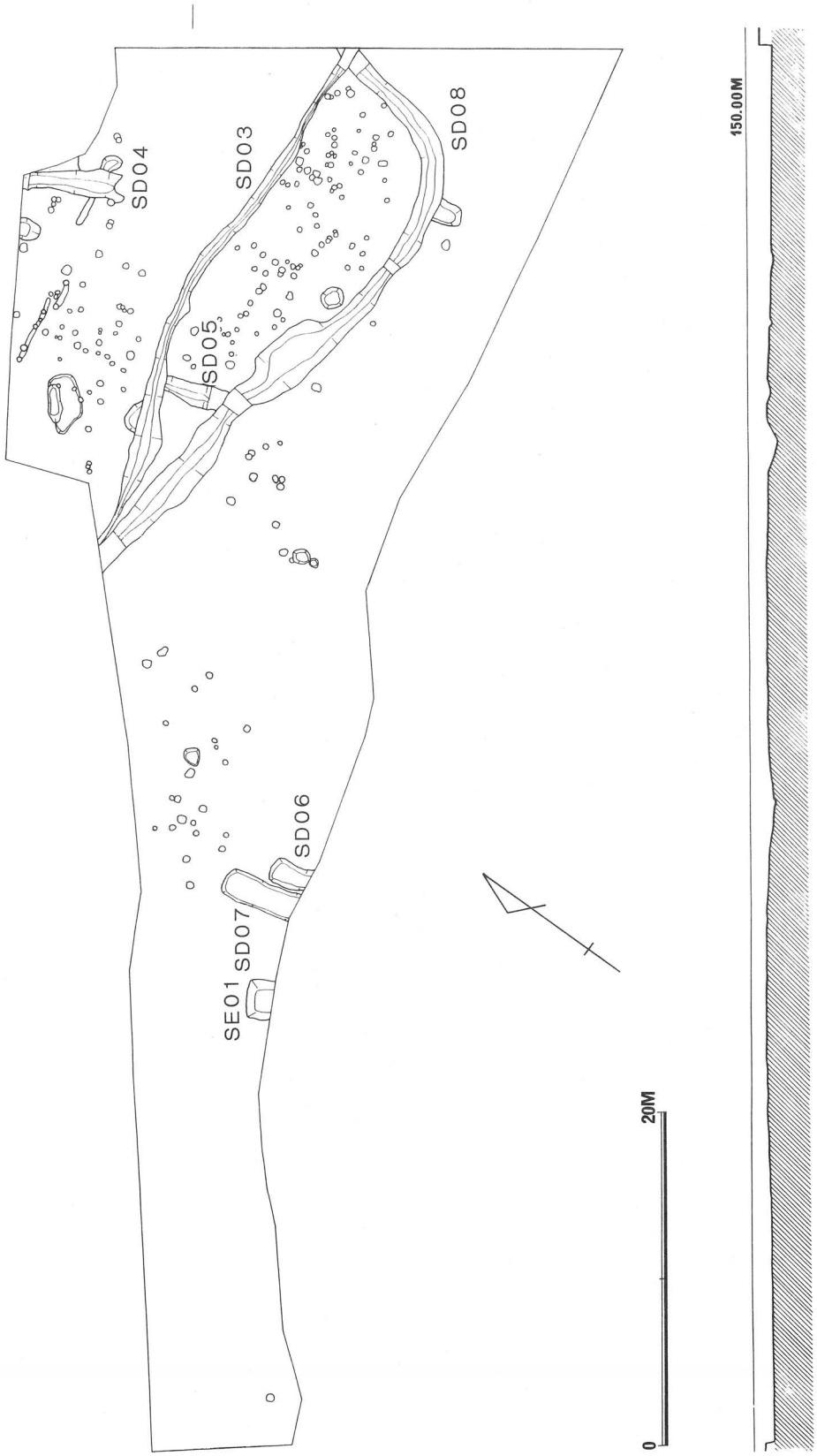
調査区の最南端にあたり、丘陵の北斜面上の棚地に位置する。

第７トレンチの土層堆積は大別して３層で構成され、第Ⅰ層（耕作土）・第Ⅱ層（淡灰色土）・第Ⅲ層（暗褐色粘質土）を示し、表土下約45～55㎝で遺構面（暗黄褐色混礫粘質土）に至る。

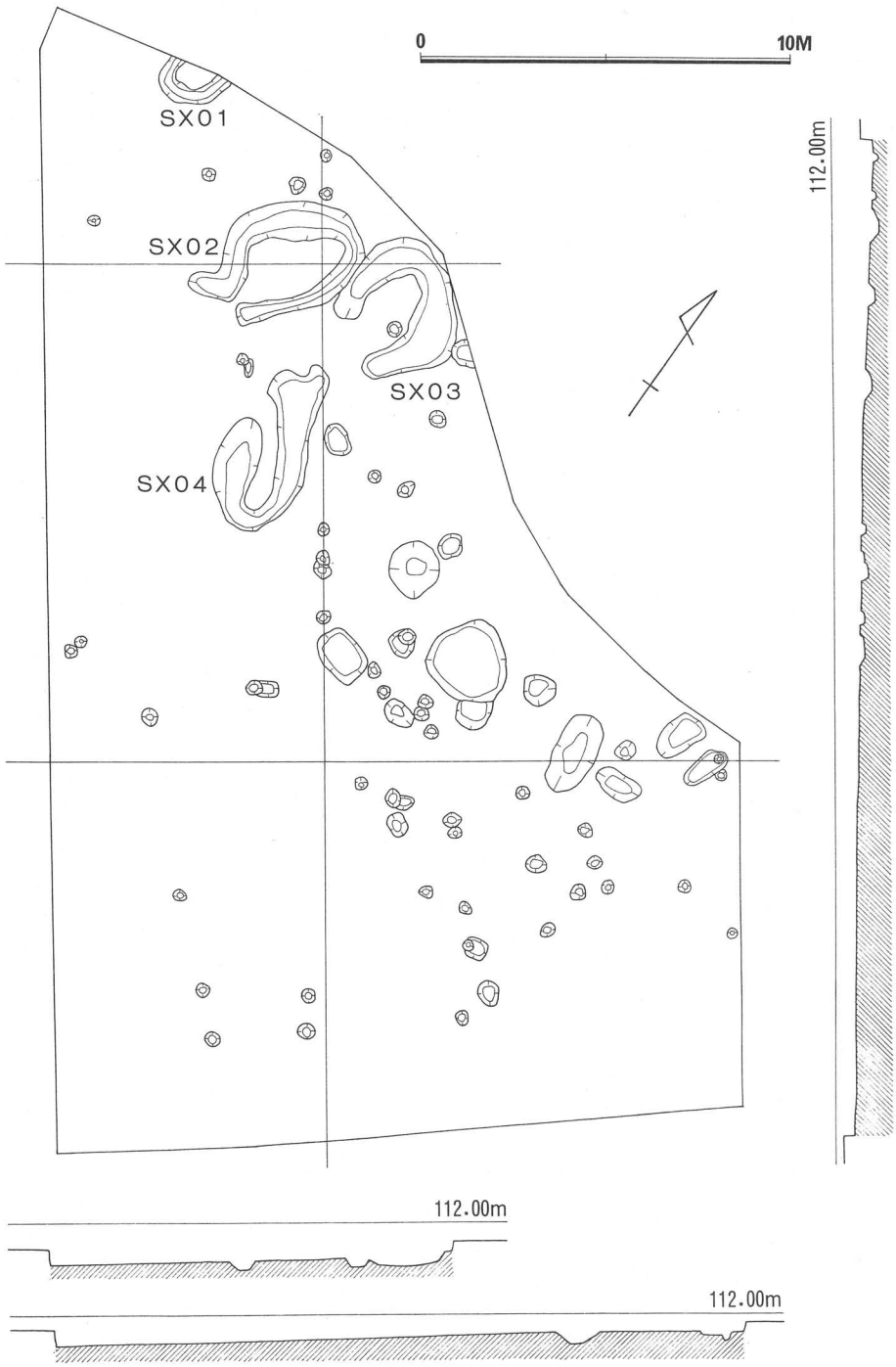
検出した遺構は、溝状遺構６（ＳＤ03～ＳＤ08）・井戸１（ＳＥ01）と柱穴群である。各遺構の状況は次の通りである。

ＳＤ03

幅40～100㎝、長さ33ｍ以上を測る東西方向の溝状遺構。深さ20～30㎝で、断面Ｖ字形を呈する。埋土は暗灰褐色粘質土の単純一層で構成され、遺物を含まない。遺構の基底部は西側へ向い、ゆるやかに傾斜する。



第４図　宮ノ前遺跡（昭和60年度調査）第７トレンチ遺構図



第５図　宮ノ前遺跡（昭和60年度調査）第８トレンチ遺構図

ＳＤ04

幅 90 ～ 160㎝、長さ６ｍ以上を測る溝状遺構で北西方向に傾斜して伸び、現在の県道敷の下に至る。深さ10～20㎝で、基底部は水平を示す。埋土は暗灰褐色混礫粘質土の単純一層で遺物は含まない。

ＳＤ05

ＳＤ03に先行する溝状遺構で、幅95～140㎝、長さ４ｍ以上を測る。深さ55㎝で、断面Ｖ字形を呈する。埋土は灰褐色粘質土（上層）と暗褐色粘質土（下層）で構成され、上層には土師器の細片が含まれる。

ＳＤ06

トレンチの中央西寄で検出した溝状遺構で、幅140㎝、長さ３ｍ以上を測る。深さ10㎝と非常に浅く、基底部は水平である。埋土は暗灰褐色粘質土の単純一層で、遺物は含まない。

ＳＤ07

ＳＤ06の西隣に並行する溝状遺構で、幅140㎝、長さ５ｍ以上を測る。深さ25㎝で、基底部は水平を呈する。埋土はＳＤ06同様の暗灰褐色粘質土で構成される。遺物は含まない。

ＳＤ08

ＳＤ05の埋土を掘り込んで築かれた溝状遺構で、ＳＤ03に先行するものである。幅100～280㎝、長さ45ｍ以上を測る。東西方向に伸びる溝状遺構が、東端部で北折するもので、北と西に傾斜する。遺構は深さ60～80㎝を測り、断面Ｖ字形を呈しており、埋土は、灰褐色土（上層）・暗灰褐色粘質土（中層）・暗褐色粘質土（下層）の

3層で構成されており、中層は須恵器と土師器が若干量含まれる。

ＳＥ01

トレンチの中央西寄りで検出した素掘りの井戸である。東西2ｍ30cm、南北1ｍ60cm以上の平面四辺形と思われる掘形を持ち、深さ1ｍ20cm以上を測るが、湧水が激しく完掘することはできなかった。埋土中に遺物は含まない。

柱穴群

トレンチの北東部を中心に直径20～30cmの柱穴が100以上確認されたが、建物遺構を決定づけるものは無かった。

第８トレンチ

第７トレンチの北西約40ｍに位置する調査区で、トレンチの西隣には信仰対象地「地ノ神」が所在する。

第８トレンチの土層堆積は大別して５層で構成され、第Ⅰ層（耕作土）・第Ⅱ層（黒褐色粘質土）・第Ⅲ層（暗茶灰色土）・第Ⅳ層（灰色砂礫）・第Ⅴ層（黄白色粘質土）を示し、地表下40～60cmで遺構面（褐色混礫粘質土）に至る。

検出した遺構は弧を描く溝状遺構４（ＳＸ01～ＳＸ04）と10基あまりの土壙であり、遺物は全く出土していない。

弧を描く溝状遺構（ＳＸ01～ＳＸ04）は、一辺６～８ｍの規模を持つもので、幅１～２ｍ、深さ30～80cmの溝状遺構が取り巻くもので、遺構埋土中には遺物を含まず、溝に囲まれた中心部分にも特徴的な遺構は存在せず、性格不明の遺構である。

３．小　　結

以上が昭和60年度に実施した宮ノ前遺跡の発掘調査結果である。

調査当初の目的であった宮ノ前遺跡の東側への拡がりは、本調査区全域に認められ、さらに次年度以降に整備される東側の地域に拡がることが明らかにされた。

今回明らかにされた遺構の南北の拡がりは約140ｍを測り、南側の丘陵地で浅く、北側の谷地で深くなる土層堆積が認められた。堆積土の多くは還元した粘土層もしくは粘質土層を示し、集落廃絶後に谷地形が自然の力で埋れたものと理解できる。

今回検出した遺構には明確な建物遺構が無く、同遺跡における居住区の東縁部にあたると考えられる。

また、出土遺物が極めて少ないため遺構の年代を比定することは困難であり、ＳＤ02が８世紀以降のものであると理解されるのみである。

今回の調査については、ごく限られた範囲のものであり、遺構の性格や年代については不明な点が多く、今後実施される東隣地域の調査資料を検討する際に、明らかにされよう。

第二節　61年度調査区

1．はじめに

本報告は、県営ほ場整備事業日野町必佐地区石原第４工区にともなう蒲生郡日野町宮ノ前遺跡の61年度の発掘調査の成果を収めたものである。

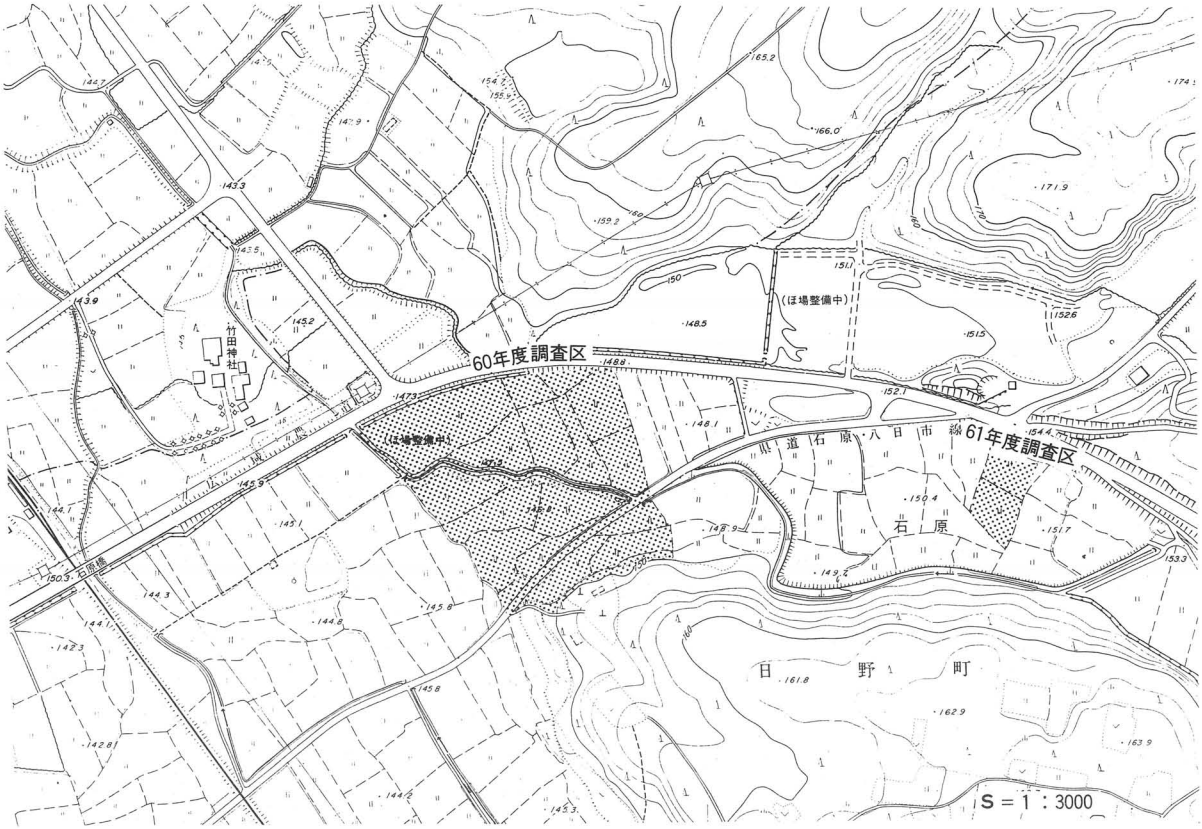
宮ノ前遺跡は日野町石原の集落の東側から蒲生郡蒲生町鋳物師の集落の東側にかけて広がっている。

遺跡範囲内で県営ほ県整備事業の切土工事がおこなわれたため、事前に切土工事対象地区を発掘調査を実施することとした。

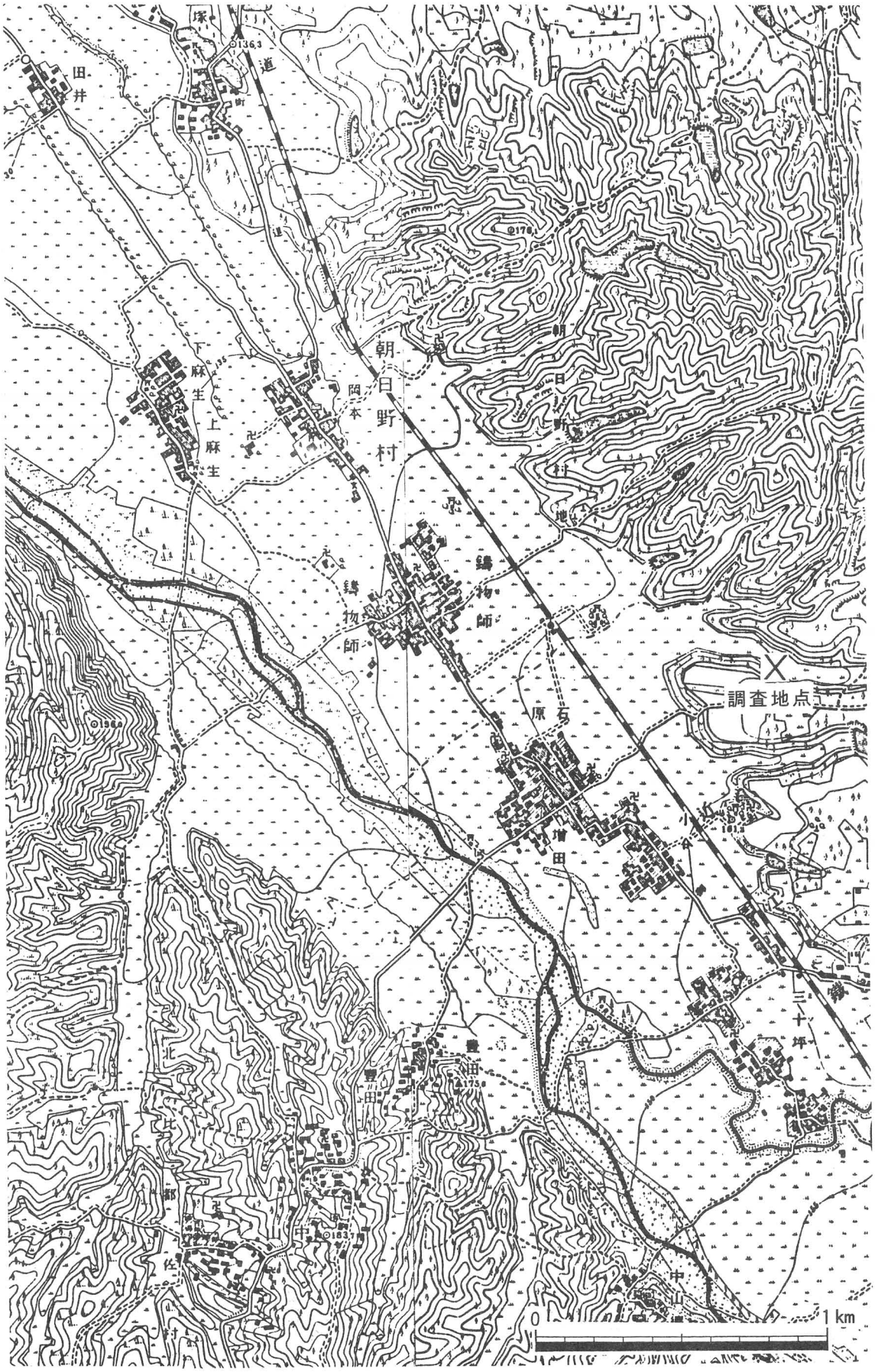
60年度は、財団法人滋賀県文化財保護協会埋蔵文化財調査三係技師宮崎幹也が調査を担当し、昭和61年度は同係技師稲垣正宏が担当した。

2．調査の経過と結果

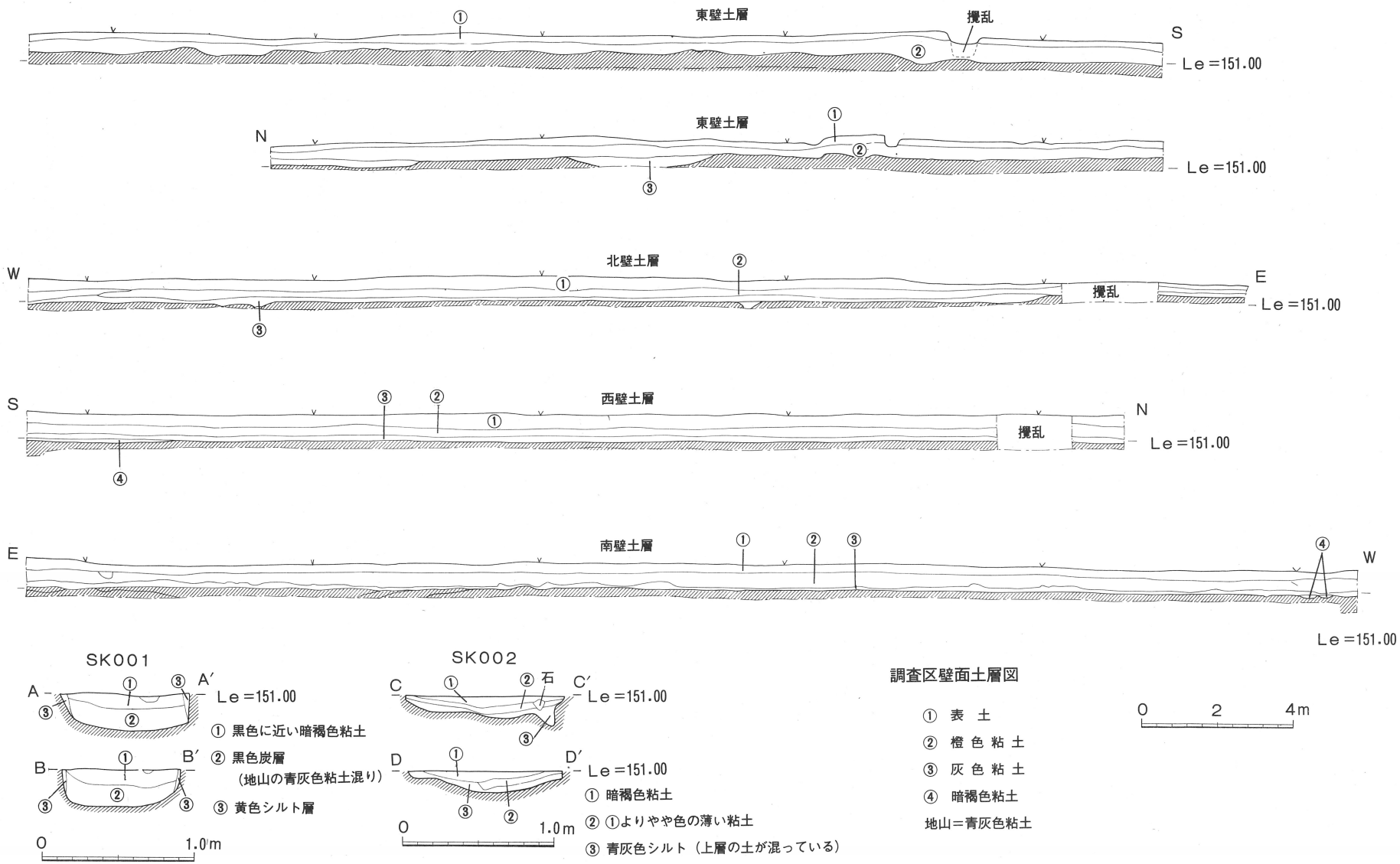
ほ場整備切土工事により影響をうけれる部分1290㎡について発掘調査をおこなった。遺構は地山である青灰色粘土層に掘込まれていたが、工事深度内に下層遺構面が存在する可能性があり、発掘調査終了後、数箇所を工事深度まで掘下げて、遺構面を探したが、下層遺構面は確認されなかった。



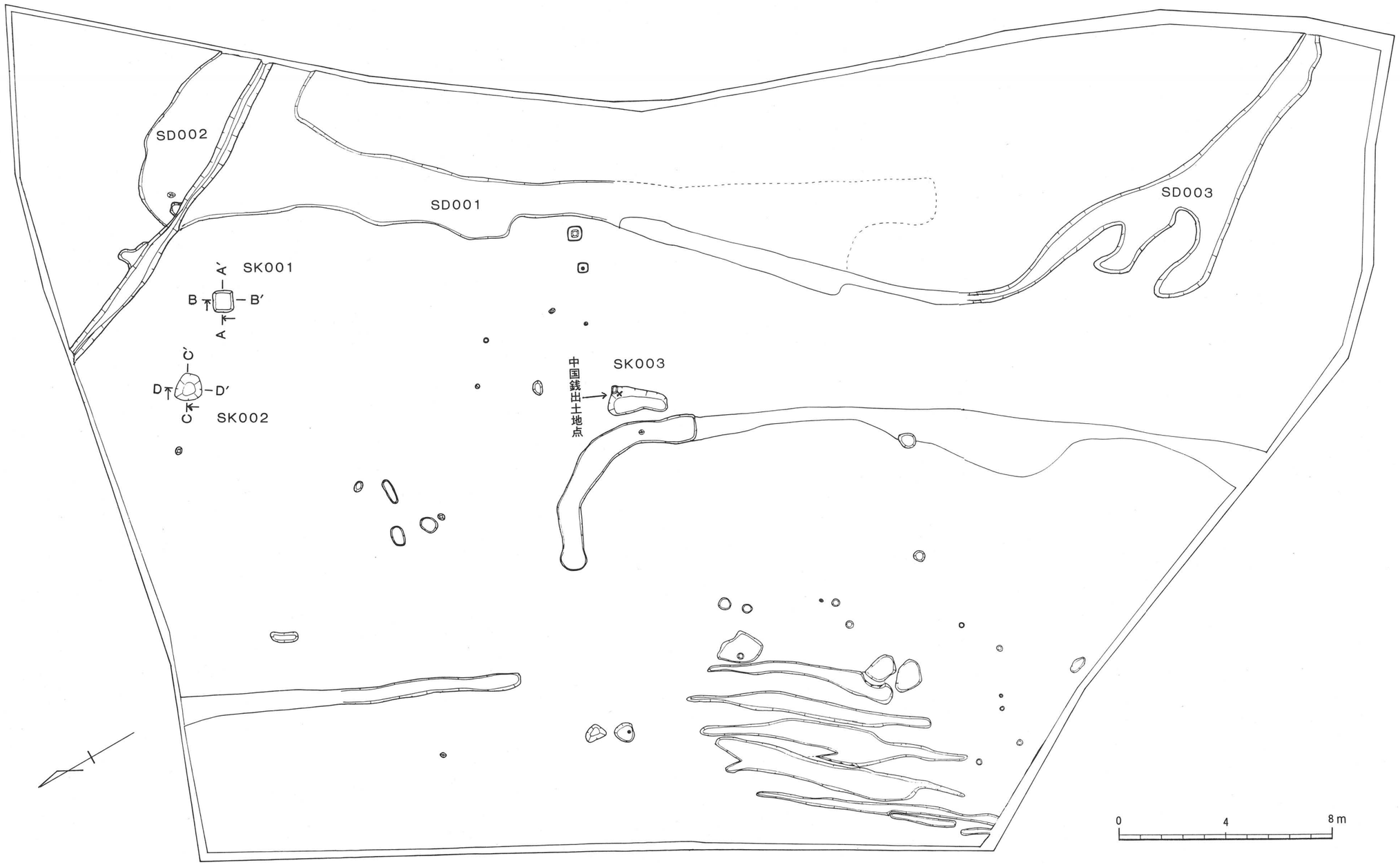
第６図　遺跡位置図



第７図　遺跡周辺図（大日本帝国陸地測量部地図　明治27年）


東壁土層
撹乱
S
Le＝151.00
東壁土層
N
Le＝151.00
北壁土層
W
E
撹乱
Le＝151.00
西壁土層
S
N
撹乱
Le＝151.00
南壁土層
E
W
Le＝151.00
SK001
A
A′
Le＝151.00
① 黒色に近い暗褐色粘土
② 黒色炭層
（地山の青灰色粘土混り）
③ 黄色シルト層
B
B′
0
1.0m
SK002
C
C′
石
Le＝151.00
D
D′
Le＝151.00
① 暗褐色粘土
② ①よりやや色の薄い粘土
③ 青灰色シルト（上層の土が混っている）
0
1.0m
調査区壁面土層図
① 表 土
② 橙 色 粘 土
③ 灰 色 粘 土
④ 暗褐色粘土
地山＝青灰色粘土
0
2
4m

第８図　土層断面図



第９図　遺構全体図

(1) 調査区の位置と地山

調査区は宮ノ前遺跡の東端にあり、狭い渓谷の中央部に位置する。

地山は青灰色粘土層であるが、調査区の一部では、青灰色粘土層の下層に青灰色砂礫層がある。これらの土層は、古琵琶湖層からなる日野丘陵基盤土が雨水に浸食され、小渓谷に流れ込んで堆積したものであり、本来の丘陵基盤面は、この堆積土の下に埋没している。

(2) 壁面土層と遺構面

調査区の四周の壁面全ての土層を観察し、記録した。各壁面とも、遺構面より上層は、第１層（表土）、第２層（橙色粘土）、第３層（灰色粘土）の３層に分かれ、西壁と南壁の一部に第４層（暗褐色粘土層）が確認された。

遺構面は表土下マイナス50cmから70cmに広がっている。遺構面の標高は、東壁においては、西端は151.00ｍで中央部では151.30ｍと、高まっている。

これは、遺構全体図によると、調査区東辺添いに、ＳＤ001とＳＤ003に区画されたテラス状の部分があり、それが壁面の土層に反映されたものである。

北壁においては、渓谷の上流である東端の遺構面の標高は151.20ｍ、西端の遺構面は150.90ｍで、ゆるやかに傾斜している。

南壁においては、渓谷の上流である東端の遺構面が151.00ｍであり、下流である西端は150.90ｍとあまり高低差がない。

渓谷の下流である西壁においては、遺構面の標高は、150.90ｍ程度で、直線的である。

以上のように、遺構面は谷口へ向ってわずかに下り勾配となっている。

(3) 遺　　構

前述したように、調査区の東部は、一段高いテラス状になっており、浅い溝（深さ約５cm）であるＳＤ001とＳＤ003によって区画されている。

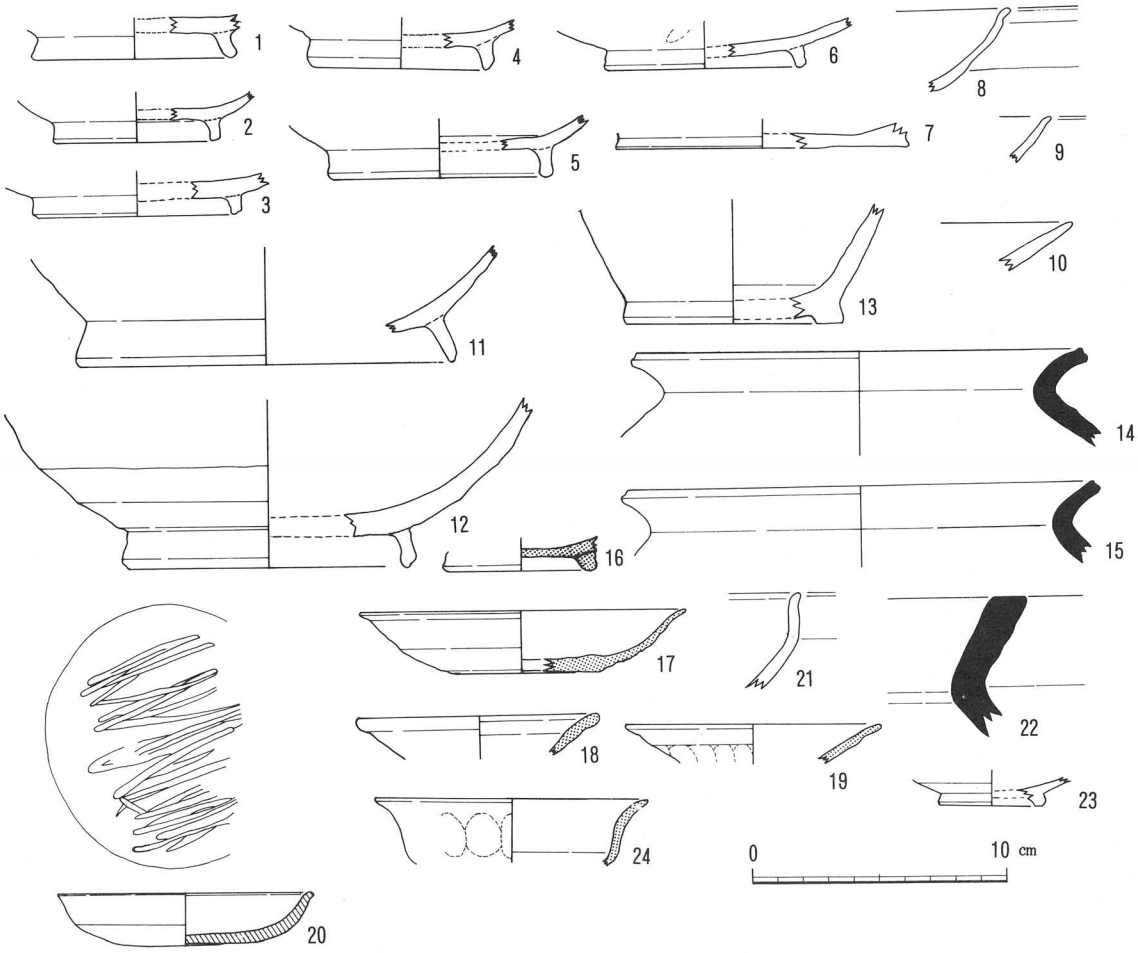
調査区の中央部をみると非常に浅く、ほとんど痕跡化しているが、カギの手に曲るＳＤ004により囲まれる区画がある。区画の西部分には、耕作痕と思われる縞状の溝がみられる。

ＳＤ001、003、004の三本の溝は、往時の田畑等の区画溝である。これらの溝からは、灰釉椀、灰釉鉢、灰釉瓶須恵質甕が出土している。

ＳＤ002は深さ約20cmの溝であり、東辺から北辺に向ってほぼ直線的に流下しているＳＤ002はＳＤ001よりも先行する遺構と考えられる。ＳＤ002からは須恵質壺、瓦器皿などが出土している。

ＳＫ001は土坑基と思われる土坑で、一辺約80cmの方形を呈し、深さは20cm程度で、埋土は、坑壁に添って黄色シルトが廻り、その内側に、上層土（黒色に近い暗褐色粘土）と下層土（黒色炭層→地山の青灰色粘土混り）が水平堆積しており、両層から須恵質甕、黒色土器椀、土師器皿が出土している。

ＳＫ002は、深さ14cm程度の浅い土壙であり、不正な方形を呈する。埋土は第１層土（暗褐色粘土）、第２層土（第一層土よりやや色の薄い粘土）、第３層土（青灰色シルト→第２層の土が混っている）の三層土が水平堆積している。埋土からは、須恵質土器、土師器皿が出土している。



第10図　遺物実測図

(4)　上層の遺構

遺構面の上層の第３層（橙色粘土質）に小坑を穿って宋銭が83枚が納められていた。紐を通した宋銭がやっと入る直径10㎝程度の小坑である。

3．おわりに

調査区は、狭い渓谷内にあるため、土石流等の影響をうけ、遺構面の残りは悪いと思われていたのであるが、比較的しっかりした中世遺構面が見られた。遺構は少ないが、残りはよく、それぞれ土器を伴っていたことは意外であった。

ＳＤ001やＳＤ003、ＳＤ004に区画された小区分は、住時の田畠の跡と思われる。これらの溝からは、10世紀中葉から11世紀中葉に編年される灰釉椀が出土している。

土坑墓と推定されるＳＫ001の埋土の下層は炭である。火葬によるものか、埋葬に際して炭を加えたものは判然としない。ＳＫ001からは、10世紀中葉から11世紀中葉に編年される灰釉椀[①]が出土している。

中国銭については、最も古い初鋳年のものは、開元通寶（966年＝南唐）、最も新しいものは、永楽通寶（1368年＝明）である[②]。

その他遺物については、9世紀代に朔るものは見られないことから、当調査区の遺構の年代は、10世紀から11世紀。上層の中国銭埋納土坑は12世紀以降のものと考えることができる。10世紀から11世紀にかけては、滋賀県下の諸遺跡で大規模な条里の再開発[③]がおこなわれたことが認められており、当調査区においても、10世紀の段階における、耕地拡大の波が、狭い渓谷までも及んで来たことが、実際に分かるのである。

註

① 楢崎彰一・斎藤孝正　『愛知県古窯跡群分布調査報告(Ⅲ)』　愛知県教育委員会　1983

② 陸原忘庵　『改訂版　東洋古銭価格図譜全』　万国貨幣洋行　1969

③ 田中勝弘・吉田秀則　『一般国道8号（長浜バイパス）関連遺跡発掘調査報告書Ⅳ―西火打遺跡、狐塚遺跡―』　滋賀県教育委員会、財団法人滋賀県文化財保護協会　1987

第１表　宮ノ前遺跡遺物観察表（昭和61年度、土器）

器種 挿図 図版	法　量	形態・技法の特徴	色　調	胎土・焼成	備　考
灰釉椀 第10図－１	高台径　8㎝	高台付底部のみ残存。底部はほぼ平坦で断面長方形の高台がふんばってつき、内端で接地する。全体にヨコナデ、内面に溶着痕有り、外面は口縁部から高台の外側にかけてと口縁内面の一部には釉のあとがみられる（見込みは露胎）	灰白色 釉　薄緑色	良 硬質	ＳＤ００１
灰釉椀 10－２	高台径　6㎝	断面長方形の高台が底面外周につく。高台内端で接地する。外面から内面底部はヨコナデ。内面口縁には、釉がかかっている。（見込みは露胎）	灰褐色 釉　暗緑色	良 硬質	表　採
灰釉椀 10－３	高台径 7.6㎝	底部はほぼ平坦。断面長方形の高台が内端で接地して外下方にやや開きぎみにつく。内外面ともヨコナデ。外面の一部に釉のあとがみられる。（見込みは露胎）	灰白色 釉　薄緑色	良 硬質	ＳＫ００１
灰釉椀 10－４	高台径 6.6㎝	底部はほぼ平坦。断面三日月形の高台が底部外周にはりつく。全体にヨコナデ。口縁部内外面には釉のあとがみられる（見込みは露胎）	灰色 釉　薄緑色	良 硬質	ＳＫ００１
灰釉椀 10－５	高台径 8.2㎝	断面長方形の高台が底部外周につく。高台は内下方に少し肥厚させ接地する。口縁内面に施釉。（見込みは露胎）全体にヨコナデ	淡灰色 釉　薄緑色	１㎜前後の黒色砂粒を少し含む 硬質	ＳＤ００１
灰釉椀 10－６	高台径 7.4㎝	底部外周に断面長方形の高台がふんばり気味につく。高台は内端で接地する。全体にヨコナデ、口縁外面の一部、内面に施釉（見込みは露胎）	外面は淡灰色　内面は淡灰褐色 外面一部は釉付着のため暗緑色	良 硬質	表　採
灰釉底部 10－７	底部径 11.4㎝	底部はほぼ平坦、口縁部やや外反ぎみ。全体にヨコナデで内面に施釉	内面　淡緑灰色（釉） 外面及び素地　灰白色	良 硬質	ＳＫ００１
灰釉椀 10－８	口径19.4㎝	口縁は内弯する。端部は外方につまみ出し尖っている。底部内面に溶着痕あり。内外面ともヨコナデ。外面口縁部中位より上方と内面全体に施釉	内面から外面口縁部中位は緑灰色（釉） 外面底部及び素地は灰色	良 硬質	ＳＫ００１
灰釉椀 10－９	口径21.2㎝	口縁部はほぼまっすぐに開き、端部はやや外方につまみ出す。内外面ともヨコナデの上に施釉	にぶい薄緑色 素地　黄灰色	１㎜程度砂粒を少し含む 硬質	ＳＤ００１
緑釉椀 10－10		口縁部はほぼまっすぐに開き端部はまるくおさめる。内外面ともヨコナデの上に釉がかかっている	暗緑色 素地は黄灰白色	良 硬質	トレンチ南東畔群
灰釉鉢 10－11	高台径 14.6㎝	底部は中央が低くなり、断面三日月形の高台が外下方にふんばって付く。内外面ともヨコナデ。高台貼り付け、残存部は全部露胎	黒灰色	0.5～2㎜ほどの砂粒を含む 硬質	ＳＤ００１
灰釉鉢 10－12	高台径 10.84㎝	底部から内弯しながら口縁部へとつづき、底部外周に高台がつく。高台はやや内弯し端部は少し肥厚して内端部で接地する。外面体部にヘラケズリ。他はヨコナデ。外面中位より上施釉。内面には底部をのぞいて施釉のあとがみられる	外面から内面底部は灰色 内面底部より上は緑灰色（釉）	0.5～1㎜の砂粒を少し含む 硬質	試掘トレンチ
古瀬戸瓶 10－13	底部径 8.6㎝	高台削り出し。断面は四角で外方にふんばっている。ろくろ成型、回転ナデ。二次焼成のため外面の釉がちぢれて、ルリ色になっている	暗緑灰色 生地は淡青灰色	密 硬質	ＳＤ００１
須恵質短頸壺 10－14	口径16.5㎝	口縁は「く」の字状に屈曲し、やや外反ぎみに伸びる。端部は外傾する凹面をもつ。全体にヨコナデ	灰色	砂粒を含む 硬質	ＳＤ００２
須恵質短頸壺 10－15	口径18.4㎝	口縁は「く」の字状に屈曲しのびる。端部は外傾する凹面を持つ。全体にヨコナデ	灰白色	0.3～0.5㎜くらいの白色砂粒を含む	

器種 挿図 図版	法　　量	形態・技法の特徴	色　　調	胎土・焼成	備　　考
				硬質	
黒色土器椀 10－16	高台径 5.9㎝	高台付底部のみ残存。底部はほぼ平坦。断面ほぼ正方形の低い高台が少し開きぎみに底部外周に貼付く。内面に炭素が吸着している。底部内面に花弁状暗文あり	内面　暗灰色 外面　淡黄褐色	1㎜程度の砂粒を少し含む やや軟質	
土師器皿 10－17	口径13.4㎝	底部は凸凹がある。口縁部は下半分は内弯ぎみ。上半分は外反ぎみである。端部は外反して丸くおさめる。ロクロ成形底部外面にヘラオコシ痕あり、他は回転ナデ調整	うすい柿色	0.5～1㎜ほどの砂粒を含む 硬質（非常に硬く一部須恵質化している）	SK003
土師器皿 10－18	口径　9.3㎝	口縁は外反ぎみに丸く反る。ヘソ皿の形態を取ると思われる。全面ヨコナデ	暗灰茶色	良 やや軟質	SD002
土師器皿 10－19	口径10.1㎝	口縁は端部近くでやや外反し、端部は丸くおさめる。外面の口縁下部に成形時の指圧痕残る。口縁外面上部から内面はヨコナデ	淡褐色	微細なウンモを含む 精良 淡黄灰色	SD002
瓦器皿 10－20	口径　10㎝ 器高　2.1㎝	底部はほぼ平坦、口縁部はやや外反し、端部は丸くおさめる。外面口縁から内面はヨコナデ、内面底部には直線状暗文あり。底部外面不調整。全体に炭素吸着	黒灰色 素地は灰色	良 やや硬質	SD002
瀬戸天目椀 10－21	口径12.6㎝	口縁部はやや内弯ぎみに開いたあとほぼまっすぐに立ち上がり、端部はやや外反して丸くおさめる。内外面ともヨコナデの上に釉がかけられている	こげ茶色 素地は灰白色	良 硬質	第1層
須恵質甕 10－22	口径35.2㎝	口縁はまっすぐに上外方に開く。端部は水平な面をもつ。内外面ともヨコナデ。頸部内面には円弧文、外面には平行たたきのあとがある	青灰色	0.5㎜前後の白色砂粒を含む 硬質	SD003
白磁坏 10－23	底部径　4㎝	外方にふんばっている。内外面ヨコナデ、内面、外面残存部上位に施釉	白緑色 生地は淡黄灰色	良 硬質	
土師器壷 10－24	口径10.8㎝	口縁部は外反しながら開き、端部は丸くおさめる。口縁部外面に成形時の指圧痕あり他はヨコナデ	淡灰茶色	良 やや軟質	

第２表　宮ノ前遺跡一括出土中国銭観察表（昭和61年度）

器種図版	法量	形態・技法の特徴	初鋳年度	鋳造国	備考
元符通寶 図版 10－1	直径＝2.42㎝ 厚み＝0.13㎝	鋳込み　一　良	元符元年（1098年）	北　宋	
元祐通寶 10－2	直径＝2.40㎝ 厚み＝0.11㎝	鋳込み　一　不良	元祐元年（1086年）	北　宋	
元豊通寶 10－3	直径＝2.38㎝ 厚み＝0.11㎝	鋳込み　一　不良	元豊元年（1078年）	北　宋	
元祐通寶 10－4	直径＝2.40㎝ 厚み＝0.11㎝	鋳込み　一　不良	元祐元年（1086年）	北　宋	
元祐通寶 10－5	直径＝2.38㎝ 厚み＝0.15㎝	鋳込み　－　良	元祐元年（1086年）	北　宋	
元豊通寶 10－6	直径＝2.42㎝ 厚み＝0.10㎝	鋳込み　一　良	元豊元年（1078年）	北　宋	
元豊通寶 10－7	直径＝2.40㎝ 厚み＝0.11㎝	鋳込み　一　良	元豊元年（1078年）	北　宋	
元豊通寶 10－8	直径＝2.33㎝ 厚み＝0.12㎝	鋳込み　一　良	元豊元年（1078年）	北　宋	
元豊通寶 10－9	直径＝2.40㎝ 厚み＝0.13㎝	鋳込み　一　良	元豊元年（1078年）	北　宋	
元豊通寶 10－10	直径＝2.45㎝ 厚み＝0.10㎝	鋳込み　一　不良	元豊元年（1078年）	北　宋	
元豊通寶 10－11	直径＝2.40㎝ 厚み＝0.13㎝	鋳込み　一　不良	元豊元年（1078年）	北　宋	
元豊通寶 10－12	直径＝2.45㎝ 厚み＝0.12㎝	鋳込み　一　良	元豊元年（1078年）	北　宋	
元祐通寶 10－13	直径＝2.49㎝ 厚み＝0.12㎝	鋳込み　一　良	元祐八年（1086年）	北　宋	
元豊通寶 10－14	直径＝2.36㎝ 厚み＝0.13㎝	鋳込み　一　良	元豊元年（1078年）	北　宋	
天聖元寶 10－15	直径＝2.46㎝ 厚み＝0.10㎝	鋳込み　一　不良	元聖元年（1023年）	北　宋	
元豊通寶 10－16	直径＝2.50㎝ 厚み＝0.12㎝	鋳込み　一　良	元豊元年（1078年）	北　宋	
元祐通寶 10－17	直径＝2.38㎝ 厚み＝0.18㎝	鋳込み　一　良	元祐元年（1086年）	北　宋	
熙寧元寶 10－18	直径＝2.35㎝ 厚み＝0.19㎝	鋳込み　一　良	熙寧元年（1068年）	北　宋	
元豊通寶 10－19	直径＝2.39㎝ 厚み＝0.15㎝	鋳込み　一　不良	元豊元年（1078年）	北　宋	
元祐通寶 10－20	直径＝2.45㎝ 厚み＝0.15㎝	鋳込み　一　不良	元祐元年（1086年）	北　宋	
元豊通寶 10－21	直径＝2.40㎝ 厚み＝0.10㎝	鋳込み　一　不良	元豊元年（1078年）	北　宋	
元豊通寶 10－22	直径＝2.40㎝ 厚み＝0.10㎝	鋳込み　一　不良	元豊元年（1078年）	北　宋	
元豊通寶 10－23	直径＝2.35㎝ 厚み＝0.15㎝	鋳込み　一　不良	元豊元年（1078年）	北　宋	

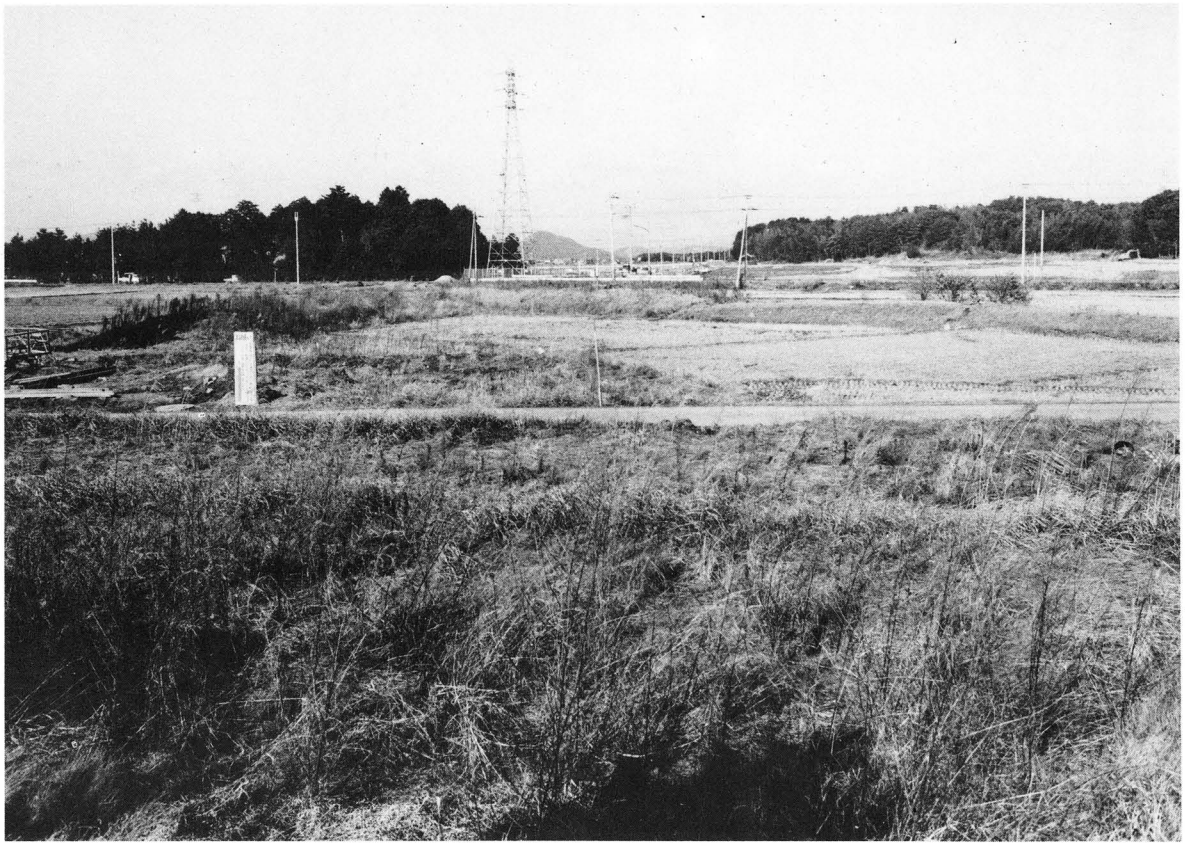
器種図版	法量	形態・技法の特徴	初鋳年度	鋳造国	備考
元豊通寶 10－24	直径＝2.40cm 厚み＝0.10cm	鋳込み　一　不良	元豊元年（1078年）	北宋	
元祐通寶 10－25	直径＝2.40cm 厚み＝0.10cm	鋳込み　一　不良	元祐元年（1086年）	北宋	
元祐通寶 10－26	直径＝2.35cm 厚み＝0.12cm	鋳込み　一　不良	元祐元年（1086年）	北宋	
元豊通寶 10－27	直径＝2.35cm 厚み＝0.10cm	鋳込み　一　良	元豊元年（1078年）	北宋	
元祐通寶 10－28	直径＝2.40cm 厚み＝0.10cm	鋳込み　一　不良	元祐元年（1086年）	北宋	
元豊通寶 10－29	直径＝2.35cm 厚み＝0.10cm	鋳込み　一　不良	元豊元年（1078年）	北宋	
元符通寶 10－30	直径＝2.35cm 厚み＝0.12cm	鋳込み　一　不良	元符元年（1098年）	北宋	
元豊通寶 10－31	直径＝2.41cm 厚み＝0.10cm	鋳込み　一　不良	元豊元年（1078年）	北宋	
元豊通寶 10－32	直径＝2.30cm 厚み＝0.15cm	鋳込み　一　良	元豊元年（1078年）	北宋	
元豊通寶 10－33	直径＝2.35cm 厚み＝0.10cm	鋳込み　一　不良	元豊元年（1078年）	北宋	
元豊通寶 10－34	直径＝2.35cm 厚み＝0.10cm	鋳込み　一　不良	元豊元年（1078年）	北宋	
元祐通寶 10－35	直径＝2.40cm 厚み＝0.10cm	鋳込み　一　不良	元祐元年（1086年）	北宋	
元祐通寶 10－36	直径＝2.40cm 厚み＝0.10cm	鋳込み　一　不良	元祐元年（1086年）	北宋	
元豊通寶 10－37	直径＝2.35cm 厚み＝0.10cm	鋳込み　一　不良	元豊元年（1078年）	北宋	
元豊通寶 10－38	直径＝2.40cm 厚み＝0.10cm	鋳込み　一　不良	元豊元年（1078年）	北宋	
紹聖元寶 10－39	直径＝2.41cm 厚み＝0.10cm	鋳込み　一　不良	紹聖元年（1094年）	北宋	
紹聖元寶 10－40	直径＝2.35cm 厚み＝0.11cm	鋳込み　一　不良	紹聖元年（1094年）	北宋	
紹聖元寶 10－41	直径＝2.38cm 厚み＝0.13cm	鋳込み　一　不良	紹聖元年（1094年）	北宋	
紹聖元寶 10－42	直径＝2.35cm 厚み＝0.12cm	鋳込み　一　不良	紹聖元年（1094年）	北宋	
紹聖元寶 10－43	直径＝2.38cm 厚み＝0.15cm	鋳込み　一　不良	紹聖元年（1094年）	北宋	
紹聖元寶 10－44	直径＝2.41cm 厚み＝0.11cm	鋳込み　一　不良	紹聖元年（1094年）	北宋	
紹聖元寶 10－45	直径＝2.35cm 厚み＝0.15cm	鋳込み　一　不良	紹聖元年（1094年）	北宋	
元祐通寶 10－46	直径＝2.41cm 厚み＝0.12cm	鋳込み　一　不良	元祐元年（1086年）	北宋	
元祐通寶 10－47	直径＝2.39cm 厚み＝0.15cm	鋳込み　一　不良	元祐元年（1086年）	北宋	
天禧通寶 10－48	直径＝2.47cm 厚み＝0.11cm	鋳込み　一　不良	天禧二年（1018年）	北宋	

器種図版	法量	形態・技法の特徴	初鋳年度	鋳造国	備考
天禧通寶 10－49	直径＝2.47㎝ 厚み＝0.10㎝	鋳込み　一　不良	天禧二年（1018年）	北宋	
皇宋通寶 10－50	直径＝2.45㎝ 厚み＝0.11㎝	鋳込み　一　不良	寶元二年（1039年）	北宋	
皇宋通寶 10－51	直径＝2.40㎝ 厚み＝0.10㎝	鋳込み　一　不良	寶元二年（1039年）	北宋	
皇宋通寶 10－52	直径＝2.41㎝ 厚み＝0.10㎝	鋳込み　一　不良	寶元二年（1039年）	北宋	
皇宋通寶 10－53	直径＝2.35㎝ 厚み＝0.10㎝	鋳込み　一　不良	寶元二年（1039年）	北宋	
皇宋通寶 10－54	直径＝2.38㎝ 厚み＝0.10㎝	鋳込み　一　不良	寶元二年（1039年）	北宋	
皇宋通寶 10－55	直径＝2.42㎝ 厚み＝0.10㎝	鋳込み　一　不良	寶元二年（1039年）	北宋	
皇宋通寶 10－56	直径＝2.41㎝ 厚み＝0.10㎝	鋳込み　一　良	寶元二年（1039年）	北宋	
治平元寶 10－57	直径＝2.38㎝ 厚み＝0.10㎝	鋳込み　一　不良	治平元年（1064年）	北宋	
治平元寶 10－58	直径＝2.38㎝ 厚み＝0.12㎝	鋳込み　一　不良	治平元年（1064年）	北宋	
熙寧元寶 10－59	直径＝2.30㎝ 厚み＝0.10㎝	鋳込み　一　不良	熙寧元年（1068年）	北宋	
治平元寶 10－60	直径＝2.35㎝ 厚み＝0.10㎝	鋳込み　一　不良	治平元年（1064年）	北宋	
治平元寶 10－61	直径＝2.35㎝ 厚み＝0.10㎝	鋳込み　一　不良	治平元年（1064年）	北宋	
熙寧元寶 10－62	直径＝2.47㎝ 厚み＝0.11㎝	鋳込み　一　不良	熙寧元年（1068年）	北宋	
熙寧元寶 10－63	直径＝2.36㎝ 厚み＝0.16㎝	鋳込み　一　不良	熙寧元年（1068年）	北宋	
熙寧元寶 10－64	直径＝2.35㎝ 厚み＝0.15㎝	鋳込み　一　不良	熙寧元年（1068年）	北宋	
熙寧元寶 10－65	直径＝2.40㎝ 厚み＝0.10㎝	鋳込み　一　良	熙寧元年（1068年）	北宋	
咸平元寶 10－66	直径＝2.42㎝ 厚み＝0.10㎝	鋳込み　一　不良	咸平元年（　998年）	北宋	
咸平元寶 10－67	直径＝2.49㎝ 厚み＝0.13㎝	鋳込み　一　良	咸平元年（　998年）	北宋	
天聖元寶 10－68	直径＝2.41㎝ 厚み＝0.13㎝	鋳込み　一　不良	天聖元年（1023年）	北宋	
天聖元寶 10－69	直径＝2.40㎝ 厚み＝0.11㎝	鋳込み　一　不良	天聖元年（1023年）	北宋	
政和通寶 10－70	直径＝2.41㎝ 厚み＝0.10㎝	鋳込み　一　良	政和元年（1111年）	北宋	
政和通寶 10－71	直径＝2.35㎝ 厚み＝0.11㎝	鋳込み　一　不良	政和元年（1111年）	北宋	
聖宋元寶 10－72	直径＝2.30㎝ 厚み＝0.10㎝	鋳込み　一　不良	建中靖国（1101年） 元年	北宋	
聖宋元寶 10－73	直径＝2.32㎝ 厚み＝0.10㎝	鋳込み　一　良	建中靖国（1101年） 元年	北宋	

器種図版	法量	形態・技法の特徴	初鋳年度	鋳造国	備考
熙寧元寶 10－74	直径＝2.40㎝ 厚み＝0.11㎝	鋳込み　一　良	熙寧元年（1068年）	北　宋	
永楽通寶 10－75	直径＝2.40㎝ 厚み＝0.11㎝	鋳込み　一　不良	永楽六年（1368年）	明	表採
淳化元寶 10－76	直径＝2.40㎝ 厚み＝0.10㎝	鋳込み　一　不良	淳化元年（　990年）	北　宋	
淳化元寶 10－77	直径＝2.35㎝ 厚み＝0.10㎝	鋳込み　一　不良	淳化元年（　990年）	北　宋	
開元通寶 10－78	直径＝2.41㎝ 厚み＝0.10㎝	鋳込み　一　不良	武徳四年（　621年） 既位四年（　966年）	唐 南　唐	
嘉祐通寶 10－79	直径＝2.31㎝ 厚み＝0.10㎝	鋳込み　一　不良	嘉祐元年（1056年）	北　宋	
嘉祐通寶 10－80	直径＝2.42㎝ 厚み＝0.10㎝	鋳込み　一　不良	嘉祐元年（1056年）	北　宋	
至道元寶 10－81	直径＝2.45㎝ 厚み＝0.10㎝	鋳込み　一　不良	至道元年（　995年）	北　宋	
至道元寶 10－82	直径＝2.40㎝ 厚み＝0.15㎝	鋳込み　一　不良	至道元年（　995年）	北　宋	
嘉祐通寶 10－83	直径＝2.50㎝ 厚み＝0.11㎝	鋳込み　一　良	嘉祐元年（1056年）	北　宋	
祥符元寶 10－84	直径＝2.36㎝ 厚み＝0.10㎝	鋳込み　一　不良	大中祥符元年（1008年）	北　宋	

図版一　宮ノ前遺跡（昭和60年度）

調査前風景（西より）



調査前風景（南より）

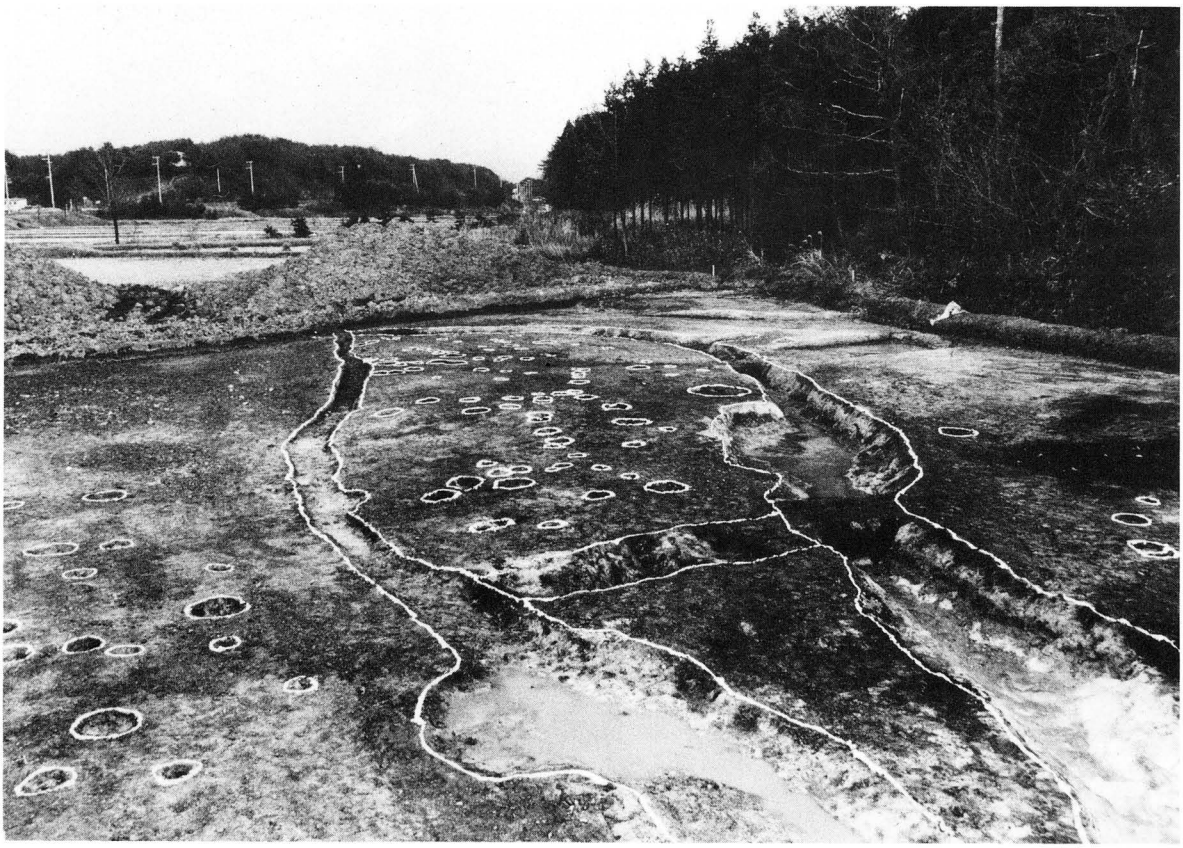
図版二　宮ノ前遺跡（昭和60年度）

第６トレンチ全景（南より）

第４トレンチ ＳＤ０２（南東より）

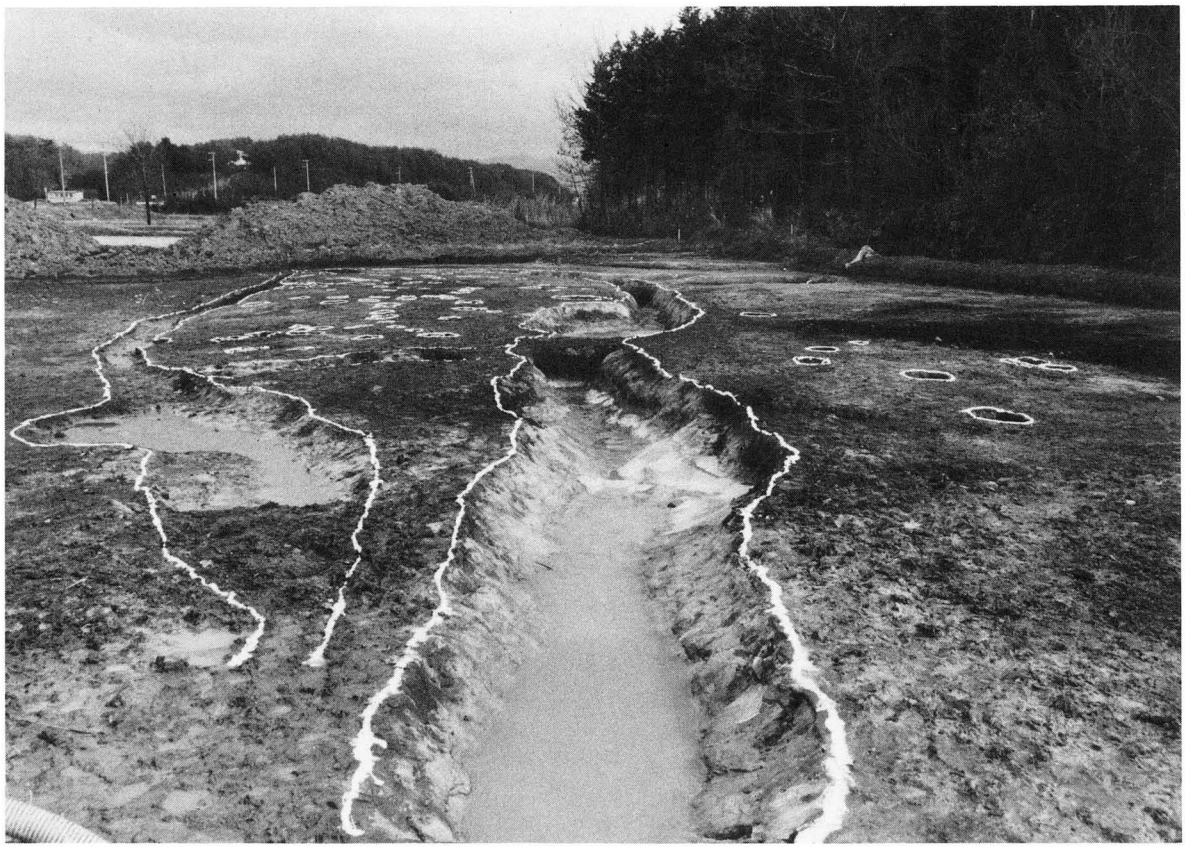
図版三　宮ノ前遺跡（昭和60年度）

第７トレンチ全景（東より）



第７トレンチ全景（西より）

第７トレンチ全景（南東より）



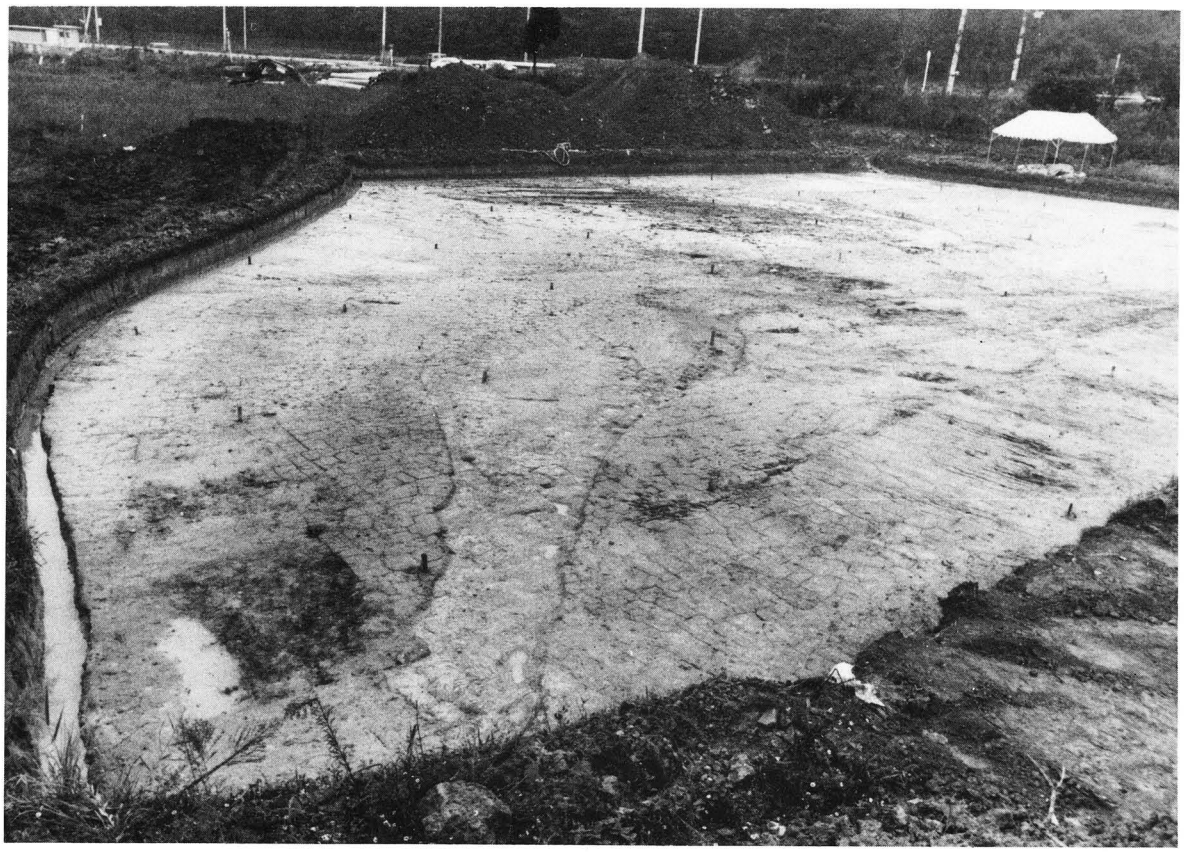
第７トレンチ ＳＤ０８（西より）

図版五　宮ノ前遺跡（昭和60年度）

第８トレンチ全景（西より）

第８トレンチ全景（北より）

図版六　宮ノ前遺跡（昭和61年度）

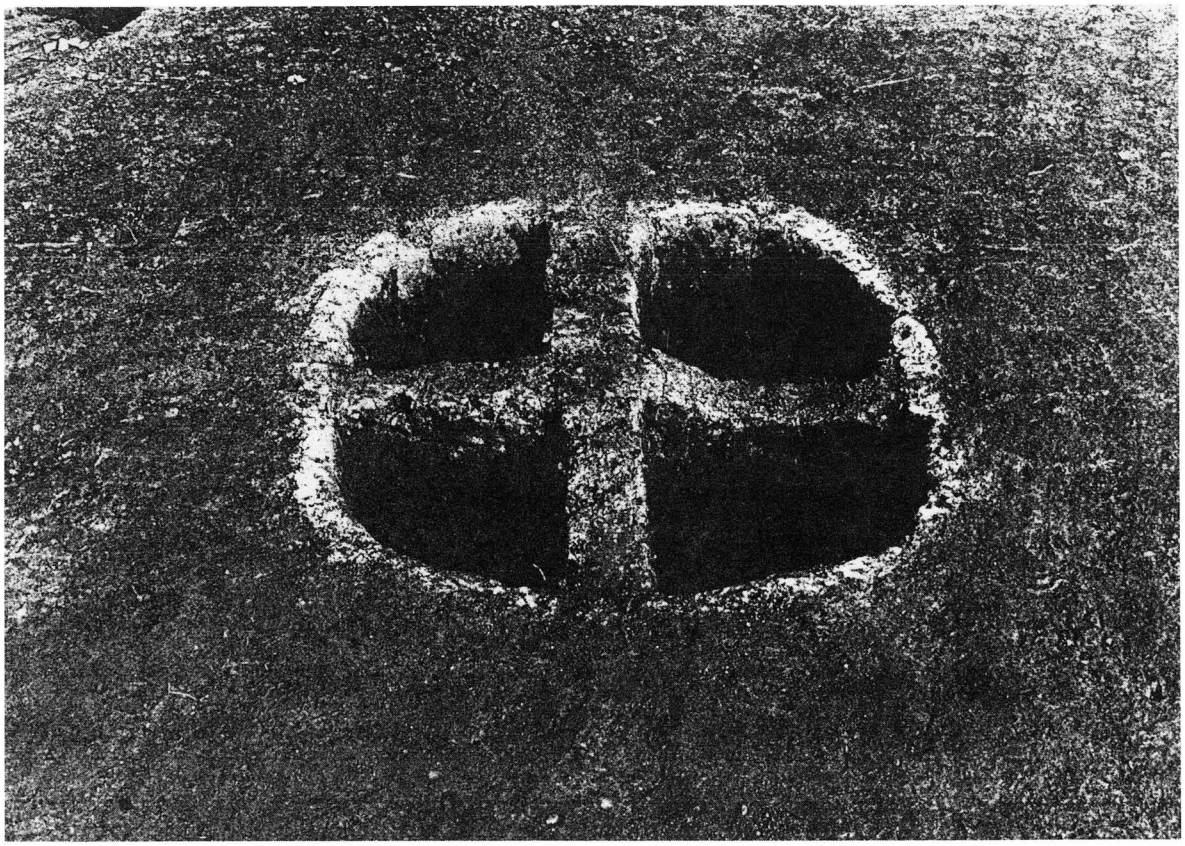


遺　構（東より）

遺　構（南より）

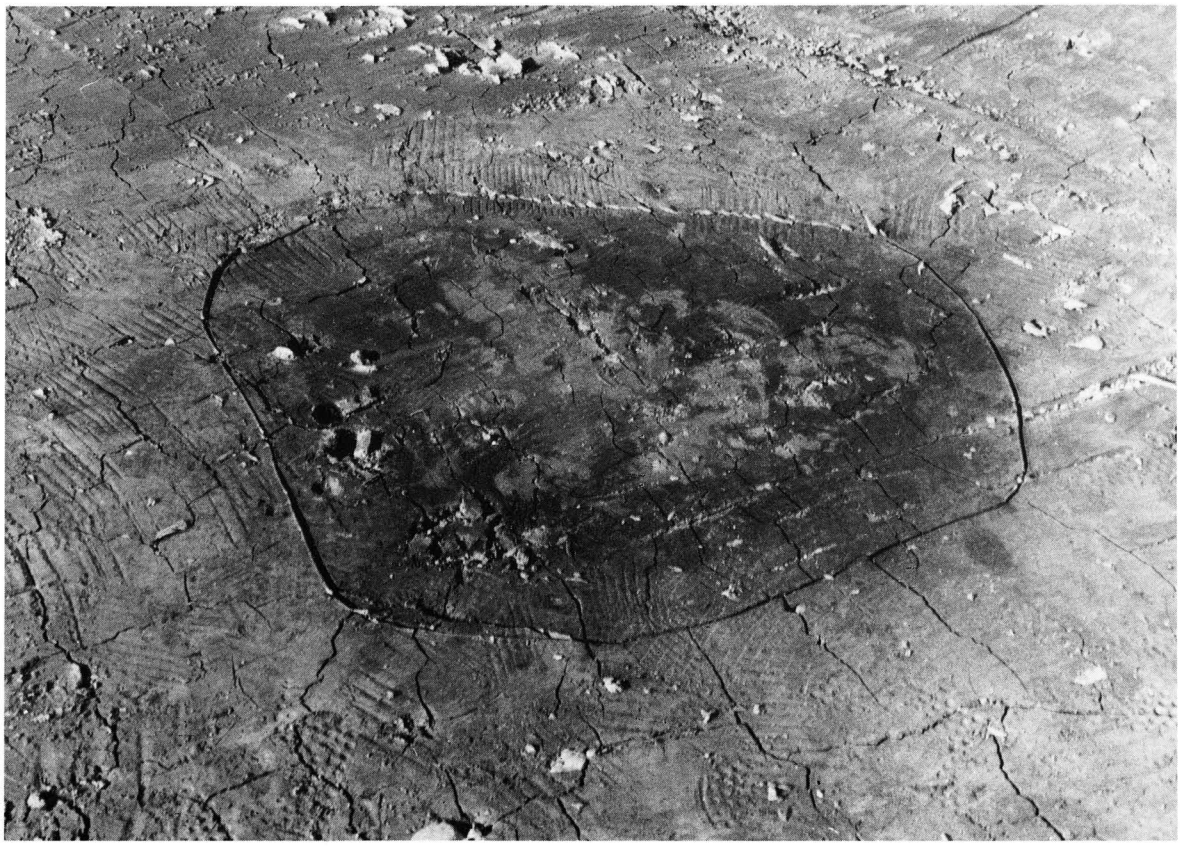
図版七　宮ノ前遺跡（昭和61年度）

ＳＫ００１掘削前

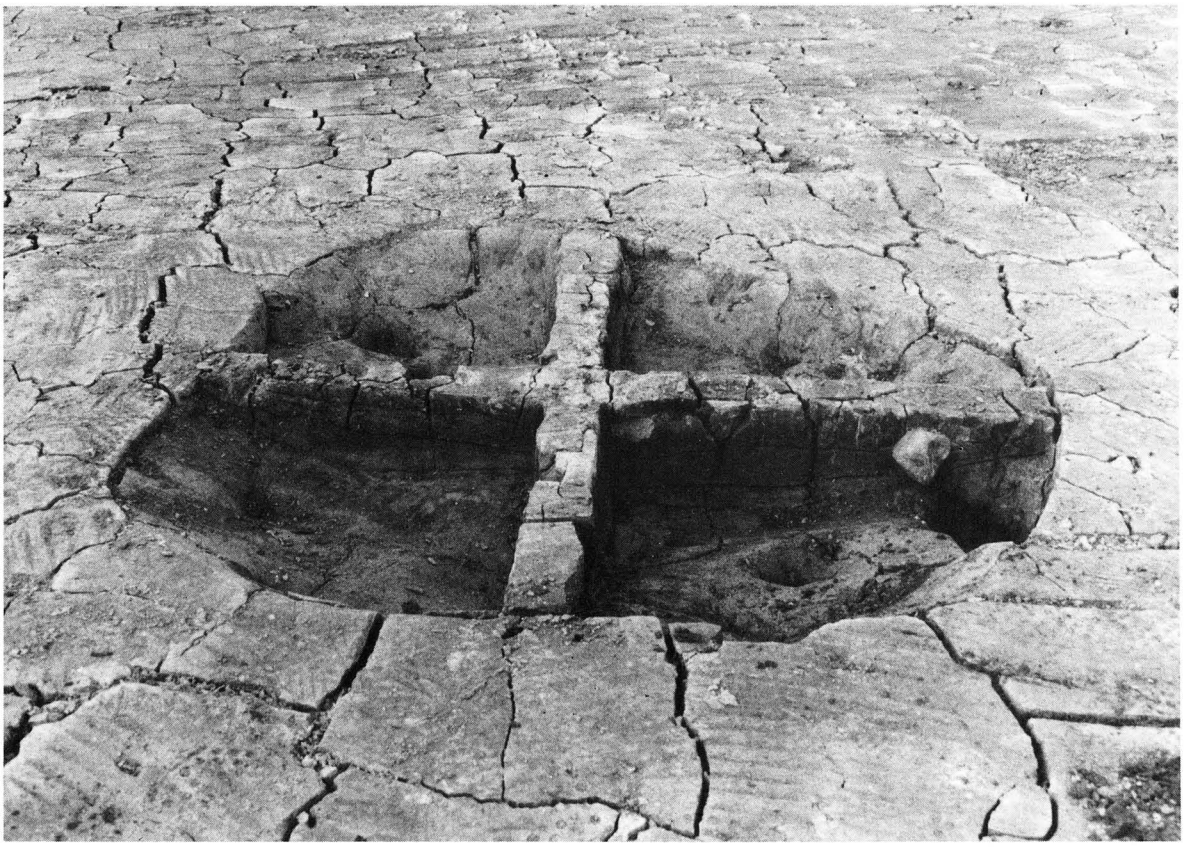


ＳＫ００１掘削後

図版八　宮ノ前遺跡（昭和61年度）

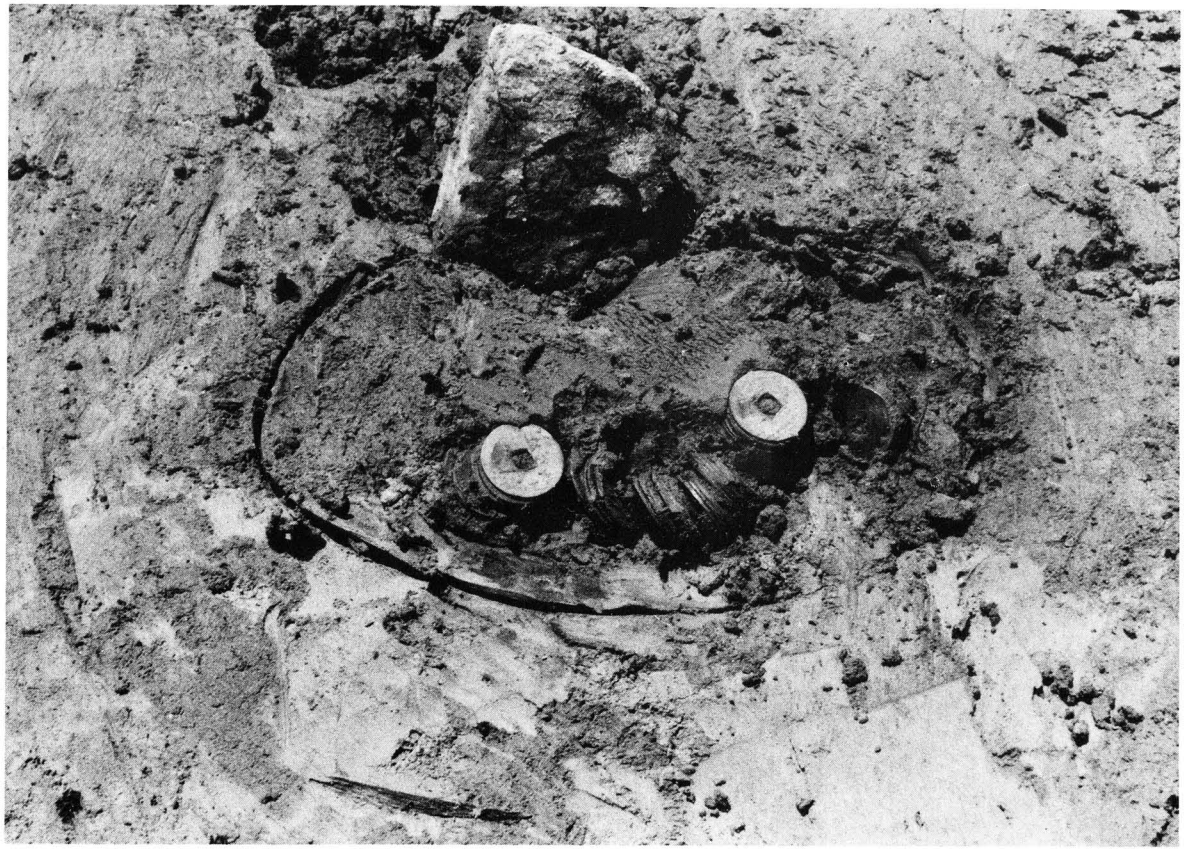


ＳＫ００２掘削前

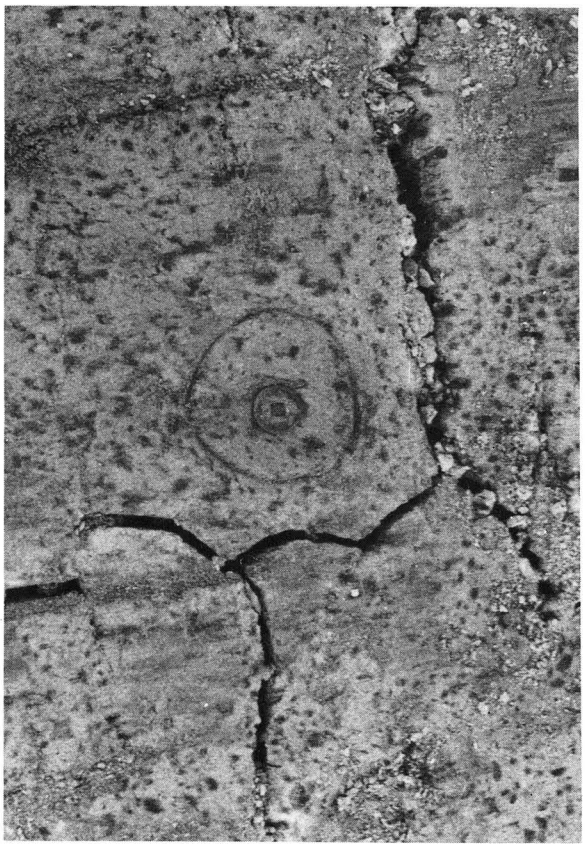


ＳＫ００２掘削後

図版九　宮ノ前遺跡（昭和61年度）

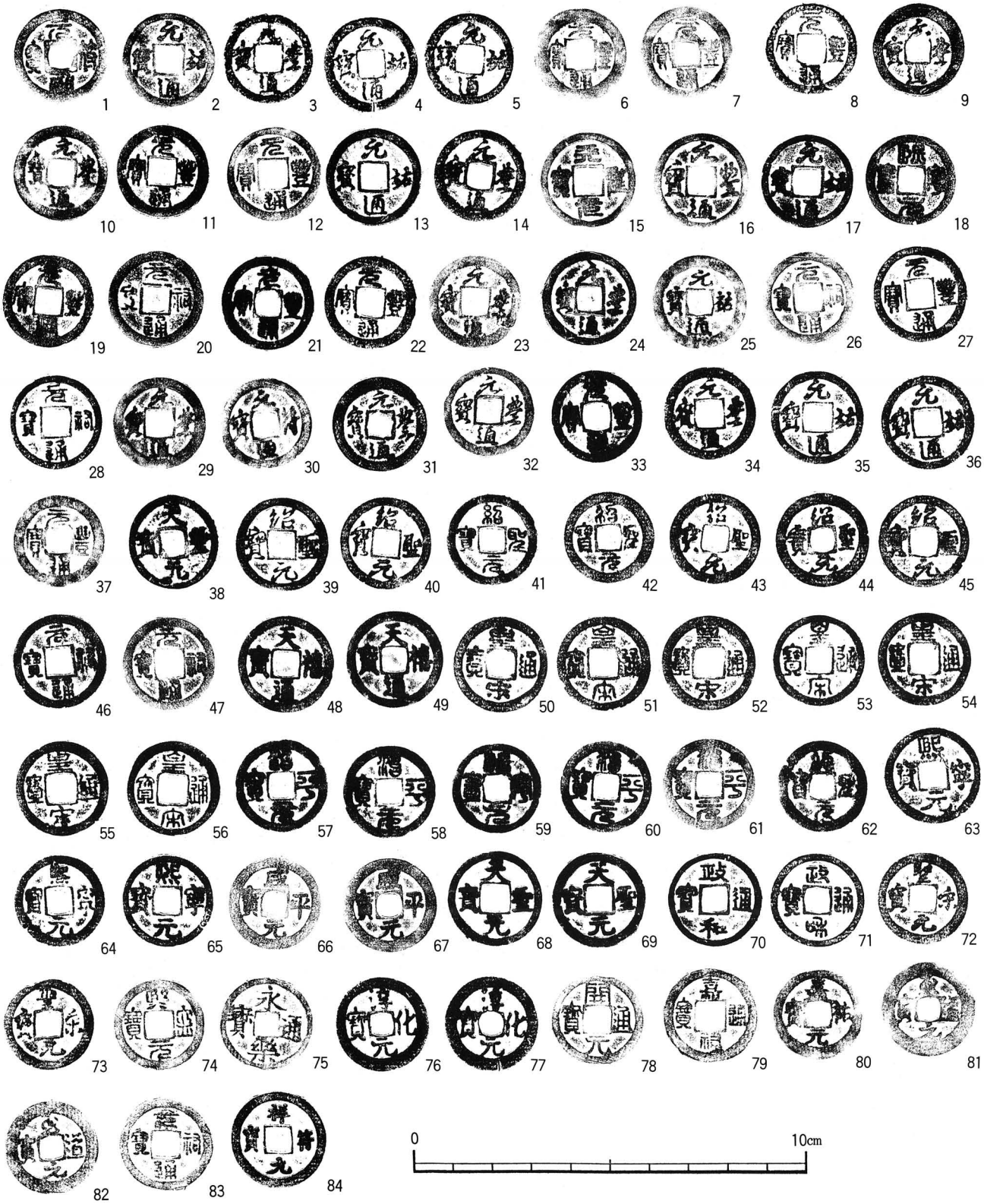


中国銭出土状況（その１）



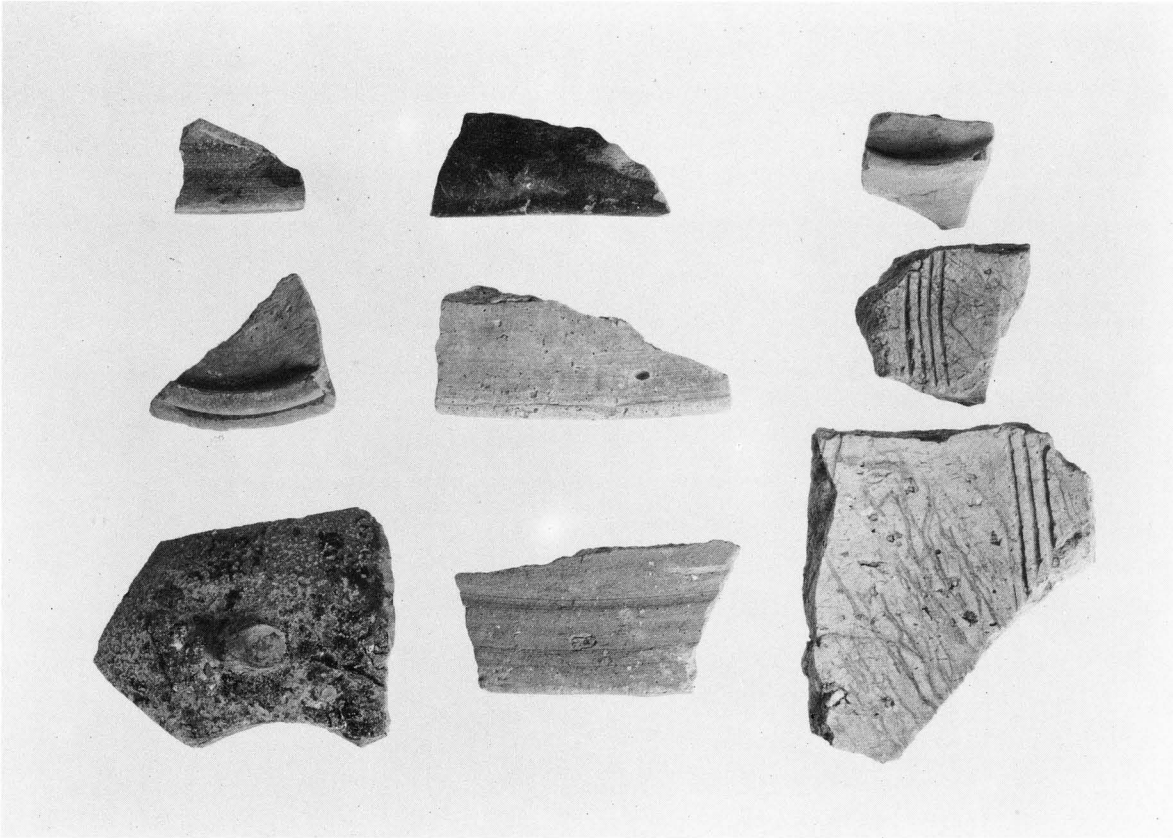
中国銭出土状況（その２）

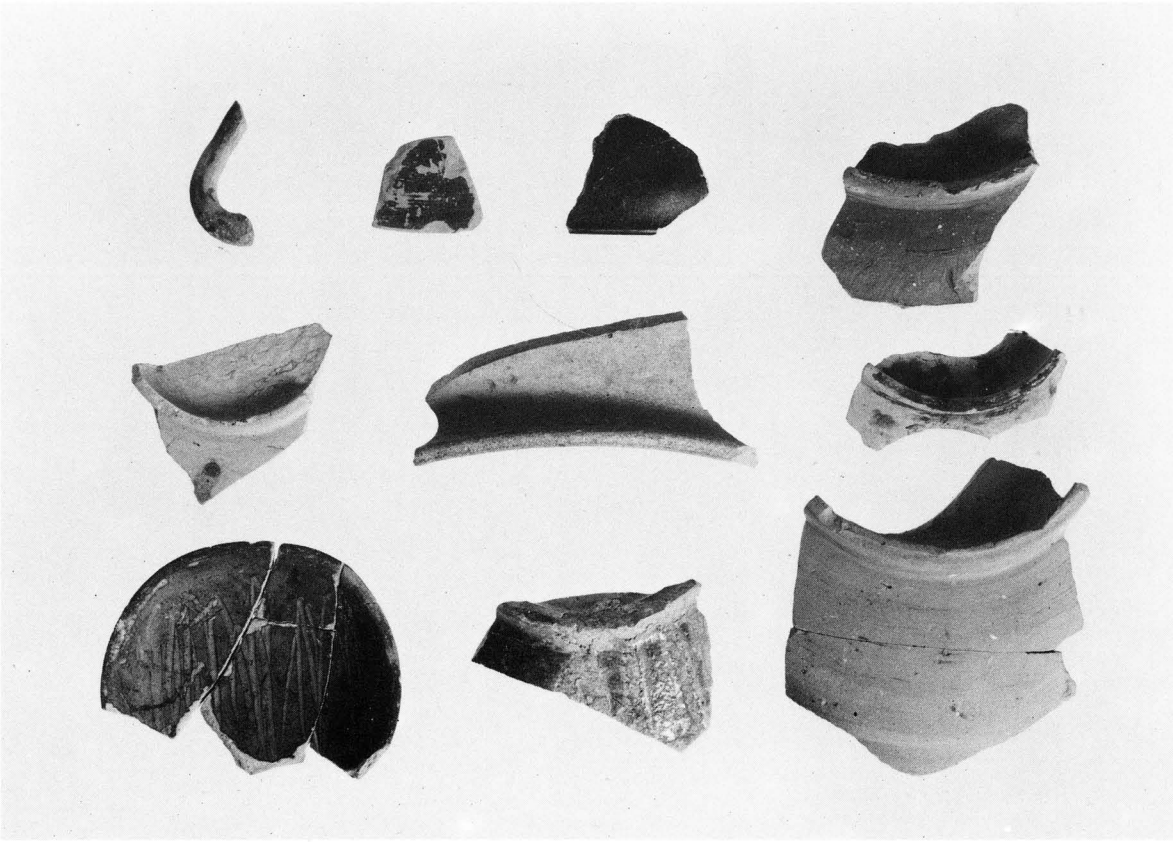
図版一〇　宮ノ前遺跡（昭和61年度）



中国銭拓本図

図版一一　宮ノ前遺跡出土遺物（昭和61年度）





第２章　杉江遺跡

1．はじめに

本報告は、県営ほ場整備事業守山南部地区にともなう杉江遺跡の昭和61年度における発掘調査の成果を収めたものである。

杉江遺跡は、守山市杉江町から南の山賀町にまで範囲が及んでおり、今回のほ場整備事業にともなう排水路敷設予定線は山賀町内の杉江遺跡を通っているため事前に発掘調査を実施することとした。

調査は、財団法人滋賀県文化財保護協会埋蔵文化財課調査三係技師稲垣正宏を担当者として、昭和61年10月15日から10月31日まで現地調査をおこない、ひきつづき昭和62年３月31日まで整理調査を実施した。

2．位置と環境

杉江遺跡は、守山市杉江町から山賀町にわたって所在し、今回調査した地点は、杉江遺跡の範囲の南東の端にあたる。

守山市域は、野洲川の本流と、分流によって運ばれた堆積土により形成されているが本遺跡の周辺には、野洲川の分流である山賀川により運ばれた土砂によりでき上った自然提防状の高まりもみられる。

本遺跡内においては61年度県営かんがい排水事業にともなう調査①もおこなわれたが、そのさい、山賀川の旧河川敷が、現山賀川の南西約40ｍの地点まで広がっていたことが確認された。

40ｍ地点より南西部分は、山賀川左岸の小規模な河岸段丘（沖積段丘）をなしており、本報告に載せた３本のトレンチもこの段丘上に所在している。

山賀川の流域には、弥生時代から中世までの遺跡が存在するが、中世の遺跡は自然提防上に多く立地し、弥生～古代の遺跡は自然提防の後背地である低湿地に立地している。

3．調査の経過と結果

排水路敷設ラインについて、工事により影響をうける幅1.0ｍ、長さ137ｍについて、発掘調査をおこなった。なお、工程の関係から、調査区を３ブロックに分け、各々１、２、３トレンチと命名した。

遺構は、地山である黄灰色粘土層上面に掘込まれていたが、工事深度ＧＬ-100㎝までに下層遺構面が存在する可能性もあることから、一部ＧＬ-100㎝まで掘下げて遺構を確認したが、下層遺構面はなかった。

(1) 第１トレンチ

第１トレンチは、調査区南東端にあるトレンチで、長さは55ｍである。

遺構面は耕土下の床土の直下に所在する。

遺構面のレベルは、トレンチ南東端で86.00ｍ、トレンチ北西端では85.90ｍで琵琶湖に向ってやや傾斜している。

遺構はトレンチ北西端において近世以降の溝がトレンチを直行している。溝は、幅２ｍ86㎝で２段に掘込まれ

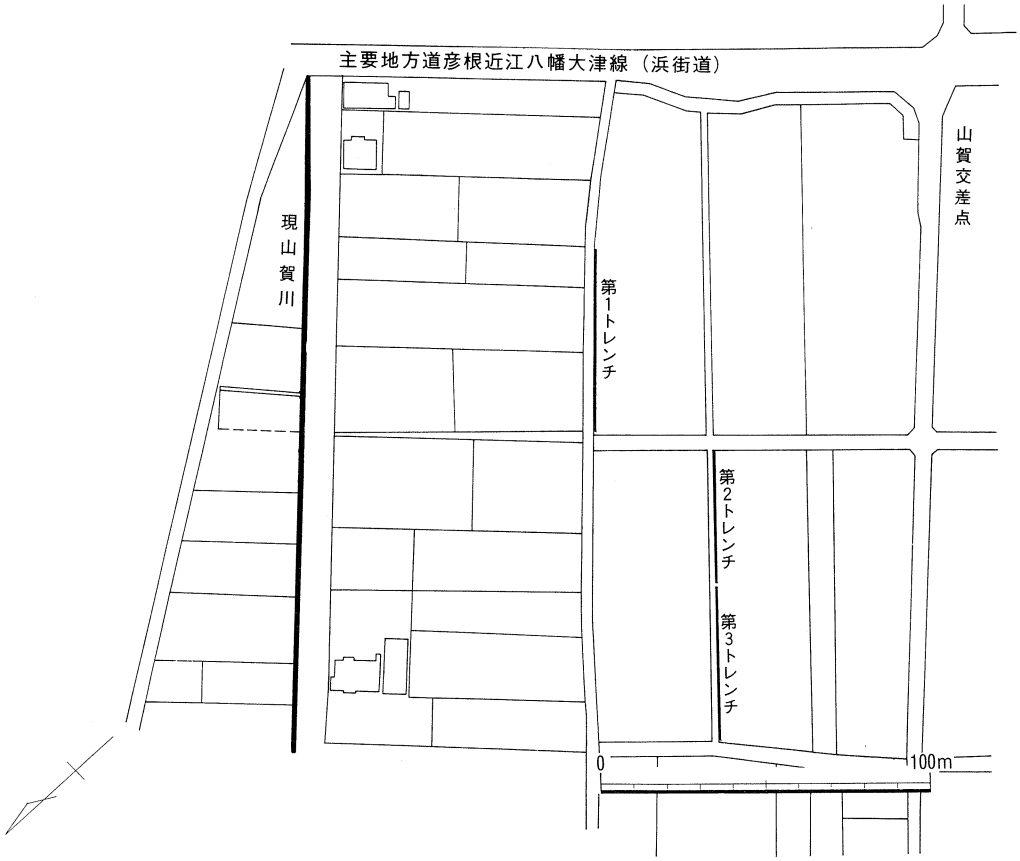
（草津市） 1 烏丸崎遺跡　2 下物遺跡　3 花摘寺廃寺遺跡　4 県史跡 観音寺館遺跡　5 県史跡 観音寺廃寺遺跡　6 上東遺跡　7 安国寺遺跡　8 津田江遺跡　9 皆出遺跡　10 観音堂廃寺遺跡　11 津田江湖底遺跡　12 桧皮堂遺跡　13 印岐志呂神社古墳群　14 長束遺跡　15 長束三坊遺跡　16 中堂遺跡　17 長束館遺跡　18 南溝畑遺跡　19 北太田遺跡　20 片岡遺跡　21 内畑遺跡　22 石子遺跡　23 志那中遺跡　24 大般若寺遺跡　25 浄雲寺廃寺遺跡　26 真光寺廃寺遺跡　27 穴村遺跡　28 吉田遺跡　29 橘堂廃寺遺跡　30 宝光寺遺跡　31 浄厳尼寺遺跡　32 西出遺跡　33 北大萱遺跡　34 宝田遺跡　35 大悲寺遺跡　36 新堂前遺跡　37 坊ノ城遺跡　38 西浦遺跡　39 下笠城跡　40 下之笠堂遺跡　41 馬場遺跡　42 上之笠堂遺跡　43 正覚寺遺跡　44 宮前遺跡　45 片岡東光寺遺跡　46 十天堂遺跡　47 大黒寺遺跡　48 片岡廃寺遺跡

（守山市） 49 横江遺跡　50 赤野井湾遺跡　51 小津浜遺跡　52 仁願寺遺跡　53 正楽寺遺跡　54 昌寿院遺跡　55 山賀西遺跡　56 弘前遺跡　57 赤野井浜遺跡　58 杉江北遺跡　59 小津神社遺跡　60 杉江遺跡　61 杉江東遺跡　62 観音寺遺跡　63 寺中遺跡　64 矢島御所遺跡　65 布施野城遺跡　66 狐塚遺跡　67 赤野井遺跡　68 川中遺跡　69 長塚遺跡　70 播磨田西遺跡　71 石田遺跡　72 森川原遺跡　73 欲賀遺跡　74 欲賀城跡　75 欲賀寺遺跡　76 欲賀南遺跡　77 冬塚遺跡　78 薬師堂遺跡　79 三宅北遺跡　80 三宅城跡　81 大門遺跡　82 金ケ森西遺跡　83 中島遺跡　84 金森城跡　85 金森遺跡　86 古高遺跡　87 下長遺跡　88 塚元越遺跡　89 焔魔堂遺跡　90 焔魔堂城跡　91 下之郷遺跡　92 吉身西遺跡　93 正福寺遺跡　94 石田三宅遺跡　95 金森東遺跡　96 三津川遺跡　97 阿弥陀寺遺跡　98 吉身中遺跡　99 養源庵遺跡　100 東門院遺跡　101 薬師堂遺跡　102 滋眼寺遺跡　103 本像寺遺跡　104 女天神古墳　105 勝部城跡　106 伊勢遺跡　107 阿村北遺跡　108 西長塚遺跡　109 山賀遺跡

（栗東町） 110 霊仙寺遺跡　111 北中小路遺跡　112 繕遺跡　113 十里遺跡　114 笠川屋敷跡　115 笠川城跡

第1図　周辺遺跡分布図

第２図　遺跡位置図（大日本帝国陸地測量部地図　明治27年）



第３図　遺跡位置図

ており上段は、遺構面からマイナス14cm、下段溝底レベルは、遺構面マイナス42cmである。埋土は暗灰色粘質土で近世染付磁器片が出土している。

その他の遺構としては、トレンチ南東端部分に、「シケヌキ跡」とピットが見られる。

(2)　第２、第３トレンチ

第２、第３トレンチは現況水田畔にそって同一線上に所在する。

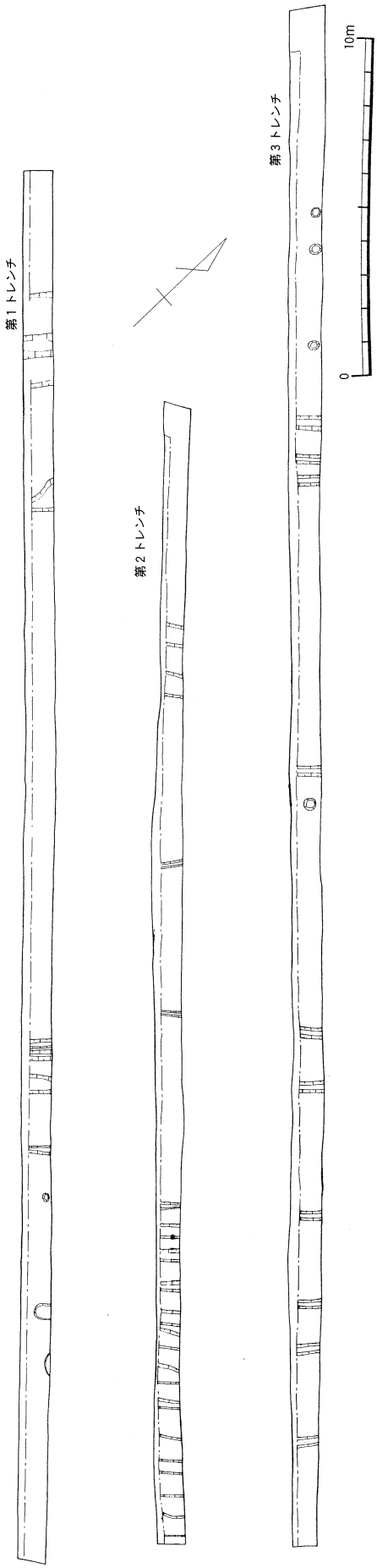
遺構は耕土下の床土の直下にあたり、遺構面のレベルは、第２トレンチ南東端で85.90ｍ、第３トレンチ北西端で85.70ｍである。

遺構は、第２トレンチ南東端に耕作痕が、トレンチ全域に「シケヌキ跡」がみられ、他にピットが散見される。これら遺構はいずれも深さ５～10cm程度のものである。

４．おわりに

今回の調査では、明確に遺物を伴う遺構としては、第１トレンチの溝があるのみである。シケヌキ跡については、掘方内に竹筒を残すものがあり、近世のものと考えられるが、トレンチの長軸と直角に交っており、耕作痕もそれに倣うことから、条里の一町の坪並の方向を知る資料となりえた。

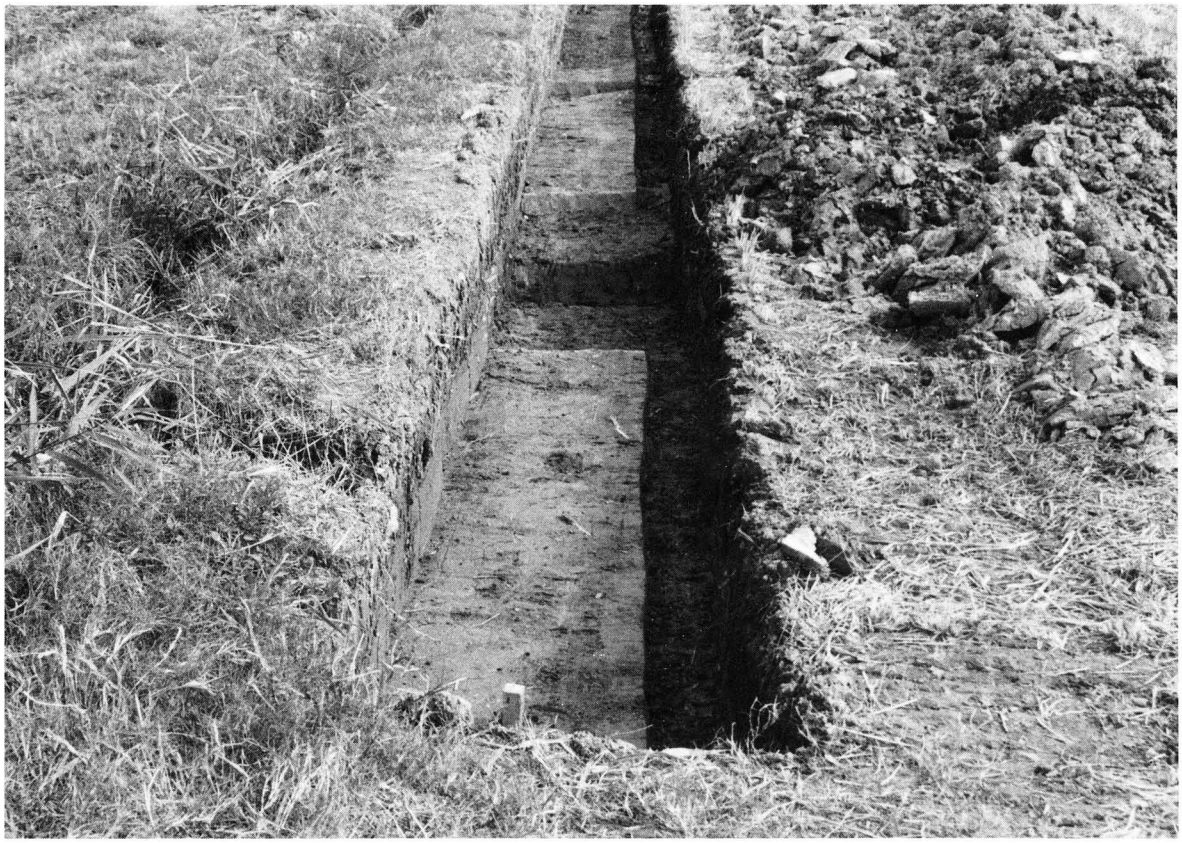
また、本調査トレンチでは確実な住居跡がみつからず、杉江遺跡の南西部にあたる本調査地点は、遺跡内の居住地区から離れた地点であることが分かった。



第4図　遺構全体図

註

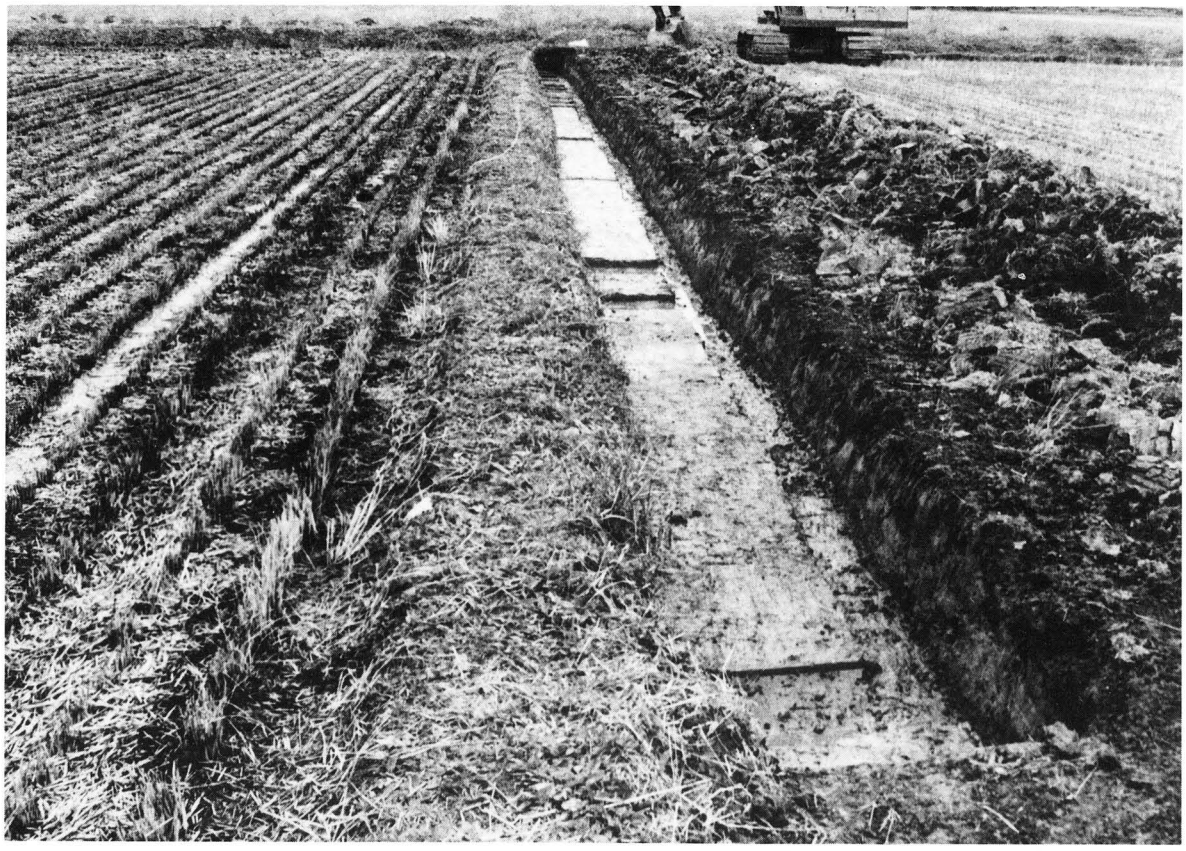
① 稲垣正宏　『守山市杉江遺跡―県営かんがい排水事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅲ－2』(滋賀県教育委員会、財団法人滋賀県文化財保護協会) 1987



第１トレンチ（西部ー西より）

第１トレンチ（東部ー西より）

第２トレンチ（東部ー東より）



第２トレンチ（東部ー西より）

第２トレンチ（中央部ー西より）

第２トレンチ（西部ー東より）

第２トレンチ（西部ー西より）

第２トレンチ（西部ー西より）

第３章　杉江東遺跡

1．はじめに

本報告は、県営ほ場整備事業守山南部地区にともなう杉江東遺跡の昭和61年度における発掘調査の成果を収めたものである。

杉江東遺跡は、守山市杉江町から南の欲賀町にまで範囲が及んでおり、今回のほ場整備事業では、切土事業にともなう調査と排水路敷設事業にともなう調査、あわせて1,400㎡の面積の調査をおこなった。

調査は、財団法人滋賀県文化財保護協会埋蔵文化財課調査三係技師稲垣正宏を担当者として、昭和61年10月15日から昭和62年１月７日まで現地調査をおこない、ひきつづき３月31日まで整理調査を実施した。

2．位置と環境

守山市域は、野洲川により運ばれた土砂の堆積土により形成された沖積平野上にひろがっている。

野洲川は、その流路を何回も替えているが、その中で最も有力な分流である境川は明治末期には32ｍもの川幅をもって①おり、この境川からさらに分岐した支流が本遺跡の南部を流れる山賀川である。

山賀川は、現況では小規模な河川であるが増水時には、土砂が多く流入し氾濫をよくおこしている。住時には土石流も生じたようで遺跡内の右岸には、周囲に比べて20～60㎝高い自然提防状の高まりが見られる。この高まりは、切土対象となり、全域を発掘調査した。

山賀川流域の自然提防は、流路の関係から右岸に多く形成されている。

杉江東遺跡の西側に立地する杉江遺跡においても、水田面より高い自然提防状の高まりがあり、その高まり上に鎌倉～室町の住居跡を含む遺構②がみられる。

自然提防の形成は、古代国家の成立以降、山林の開発がすすみ、土石流が発しやすい状況下でおこなわれるもので③、自然提防の形成以降、しばらくして、提防上に生活の場、墓地が設けられたことから、杉江遺跡でも杉江東遺跡でも自然提防上に中世遺構がみられるのである。

3．調査の経過と結果

当遺跡については、排水路敷設工事にともなう調査区（第１トレンチ、第２トレンチ）切土工事にともなう調査区（第３トレンチ）の３箇所において発掘調査をおこなった。

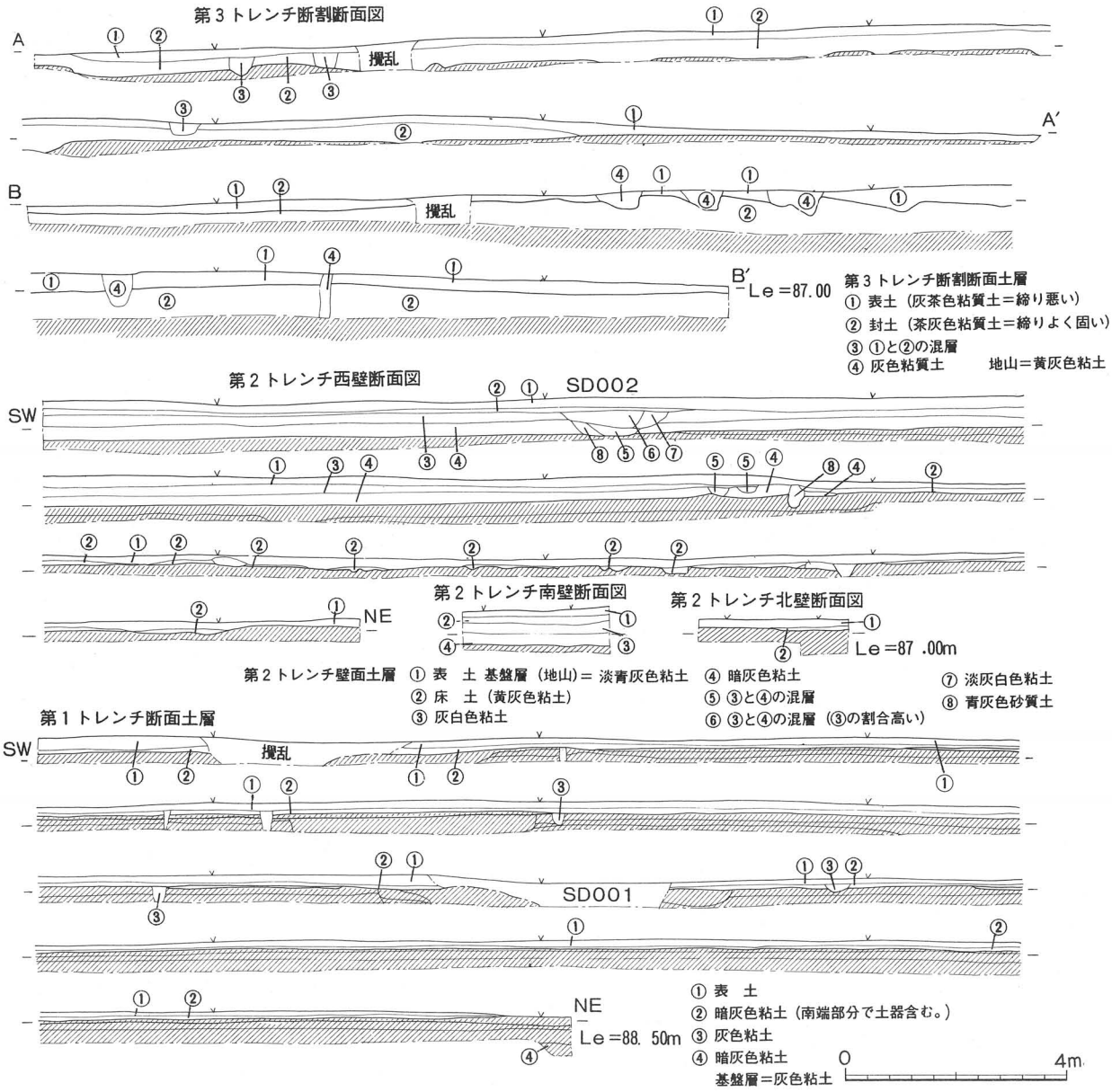
遺構検出面については、いずれの調査区においても、工事深度内では、１面しか確認されなかった。

(1) 第１トレンチ

第１トレンチは、遺跡内で最も南へ位置し幅1.5ｍ、長さ57.5ｍを測る。トレンチの南西端は、山賀川に近接している。

基盤層（地山）は灰色粘土であり、遺構面である基盤層上面は、トレンチ北東端では、標高88.60ｍで、南西端もほぼ同じレベルである。第１層は、基盤層直上に存在し、表土と基盤層にはさまれているが、厚さは、最も

第1図　遺跡位置図



第２図　土層断面図

厚い場所で10㎝程度であり、北東端で消滅する。

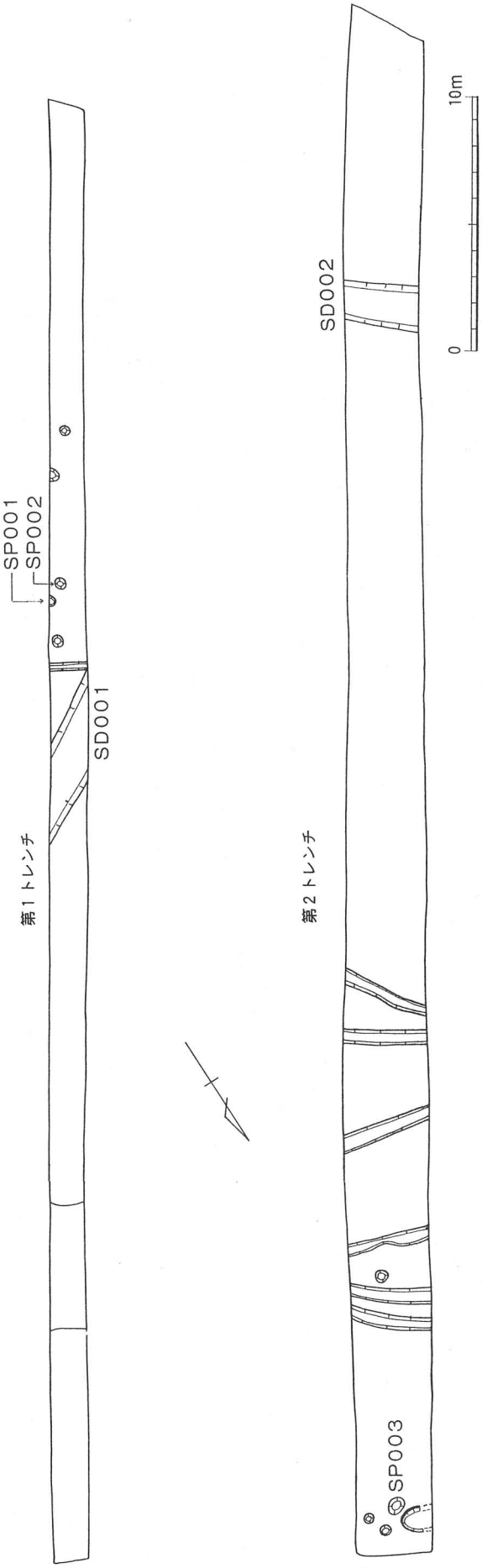
第２層はトレンチ南西端から北東へ５ｍ程まで存在し、土器を多く包含している。これらの土器は奈良時代から平安時代にかけての土師器と須恵器である。

遺物を検出した遺構については、トレンチの南西寄りに２箇所のピット（ＳＰ001・ＳＰ002）があり、ＳＰ001からは黒色土器椀と土師質小皿、ＳＰ002からは黒色土器椀が出土している。これら２箇所のピットを含むピット５箇所については、いずれも遺構面から掘込まれている。

ＳＤ001はトレンチを斜めに横切る溝であるが、現地表から掘込まれておりピット群より時代が下がるものである。溝内からは黒色土師椀と奈良時代の須恵器杯身が出土している。

(2) 第２トレンチ

第２トレンチは幅4.0ｍ、長さ61.25ｍを測る。トレンチの方向は第１トレンチと同じで山賀川からの距離は第



第3図　遺構全体図（第1トレンチ、第2トレンチ）

1トレンチと同じ程度である。基盤層は淡青灰色粘土であり、遺構面である基盤層上面の標高は、トレンチ北東端では87.10mで、南西端では86.80mで、山賀川に向ってゆるやかに遺構面が傾斜しているわけで、よって、遺構面直上の堆積層（第2層暗灰色粘土＝ゆっくりと長期間かけて堆積したと考えられる）も遺構面の傾きにあわせて傾斜している。

しかし、表土は、南西端に向って厚くなっており、さらに第2トレンチ中央よりやや北東部からは、第3層が出現し南西へ行くにつれて厚くなっている。

自然堆積である、基盤層と第4層と違い、表土、床土、第3層は明らかに人為的な土の積上げであり、山賀川に向って傾斜している面を嵩上げするために入れられた土の層である。

遺物の出土した遺構はトレンチ北東端のＳＤ002で黒色土師椀が出土している。

ＳＤ002はトレンチの南西部にある溝で、南東から北西へ流下しているが、第3層から掘込まれており、ＳＰ003に比べて時代の下るものであると考えられる。

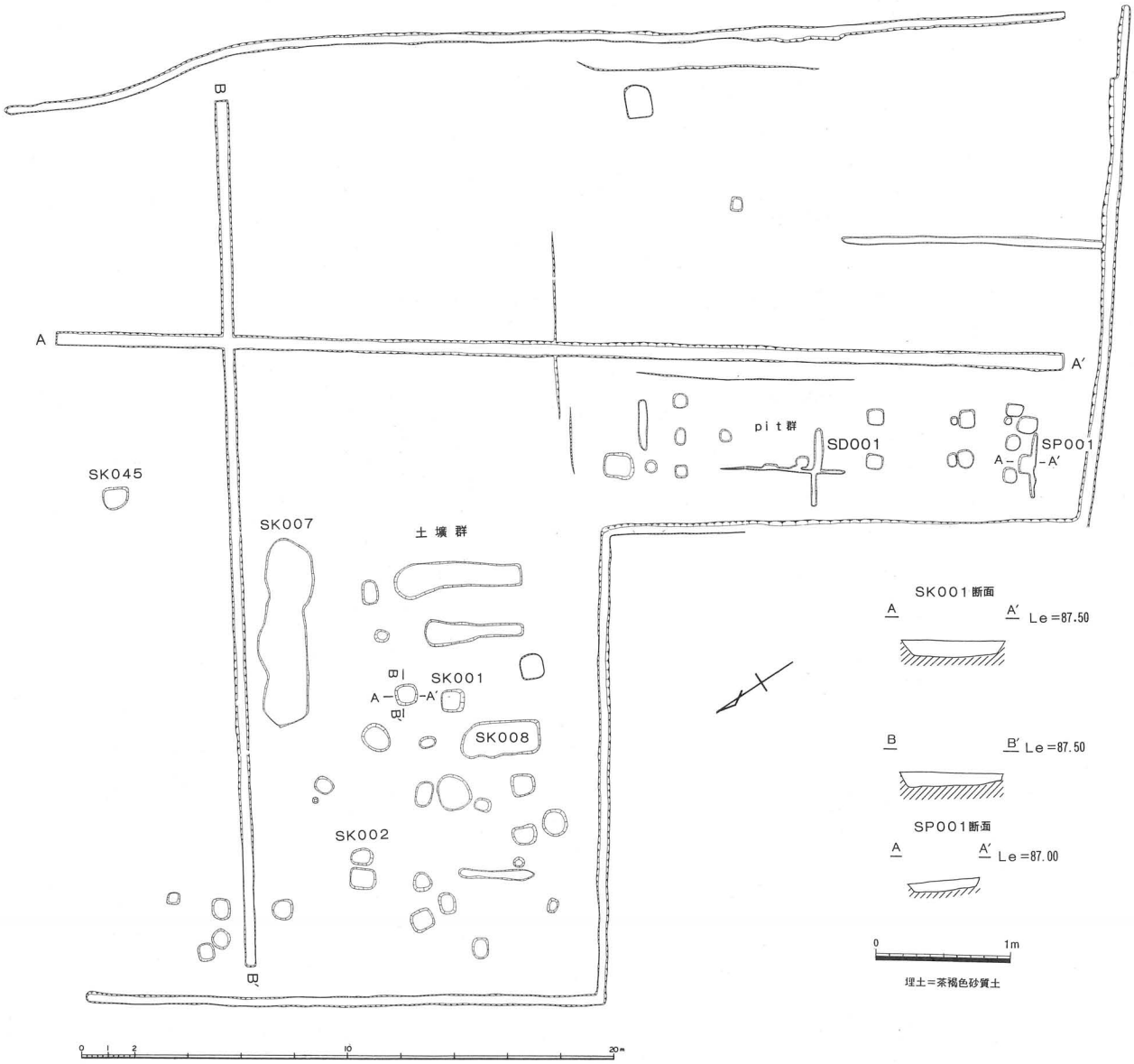
(3) 第3トレンチ

第3トレンチは、遺跡の最も北に位置し、カギの手状の形状で、周囲の田面に対して全体的に高まっている。

この高まりは南東部においては、田面と同じレベルからゆるやかな勾配をもって北西へ向って上ってゆき、南西辺では、大きな落差（40cm程度）をもって、田面に向って落込む。

第3トレンチ（高まり）の構成土は、第1層表土（灰茶色粘質土＝締り悪い）と第2層（茶灰色粘質土＝締りよく固い）からなっており、基盤層は、中世以前の田面と想定される黄灰色粘質土である。基盤層上面のレベルは周囲の田面のレベルとほぼ同じであり、全面積は1150㎡である。

遺構については、カギの手に曲る南西辺付近にPit群がある。Pit群は、深さが10cm程度の浅いもので、埋土は灰色砂質土である。またカギの手に北西に曲る部分に



第４図　遺構全体図（第３トレンチ）

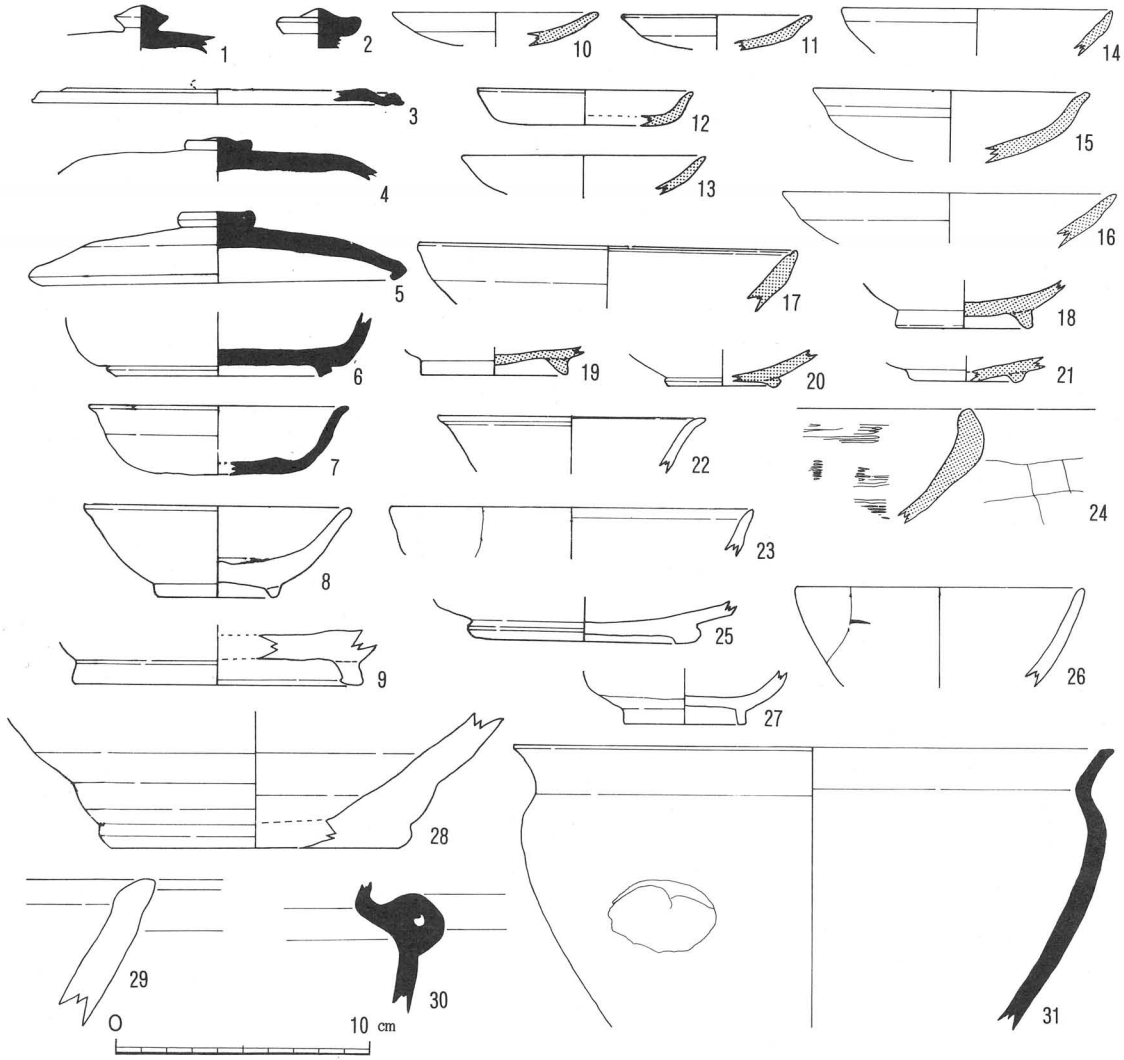
は、土壙群がある。長方形の土壙は、畑の耕作により生じたもので、また他の土壙も耕作時に堆肥を入れるために掘られたと思われるものが多く、１辺約70cmの方形プランを持ち35cmの深さをもつSK001のみが耕作用以外の目的で掘られたと想定される。ＳＫ001からは土師質小皿と白磁杯が出土している。

また、第３トレンチの高まりの土全体が、土師質小皿など中世陶磁器を多く含んでいることをあげておきたい。

４．おわりに

杉江東遺跡は、山賀川の左岸から守山川の右岸にかけて広がる遺跡であるが、61年度の調査トレンチは、第１トレンチから第３トレンチまでの３箇所のトレンチすべてが、山賀川の左岸にあり、山賀川に近接して設けられた。

最も東南に所在する第１トレンチは、遺構面は、ほぼ平担で、標高88.60ｍを測り、ピット５箇所、溝跡を検



第５図　出土遺物実測図

出している。

５箇所のピットのうち、ＳＰ001からは、黒色土師椀が、ＳＰ002からは土師質小皿が出土しているが、いずれも磨耗著しく年代判定の資料とはなりにくい。

トレンチ南西隅の包含層からは、８、９世紀の須恵器と11世紀後半の灰釉椀が出土していることから、包含層の堆積は11世紀後半以降であることが分かる。

第２トレンチは、東北端と南西端では遺構面のレベルに30㎝程度高低差がある。第２トレンチの遺構面が地表面であった時期に刻まれた明確な遺構がないため、第２トレンチが山賀川に向う下り勾配であった時期ははっきりしないが、遺構面より上層の第２層は、遺構面の傾斜にそってゆっくり堆積したと見られる。第２層の堆積が終った後に山賀川に近い低地を嵩上げしている。

第３トレンチは、山賀川の右岸に形成された自然提防と考えられる高まりであるが高まりの形、高さについては、自然提防形成後に人為的に変えられた可能性はある。

高まりの構成土及び遺構から出土している土師器は、13世紀から14世紀のものが大半であり、高まりの形成され

た時期は、13世紀頃かそれをあまり下らない頃であると考えられる。

註

① 『守山市史』上巻 （守山市史編纂委員会 昭和49年）

② 小竹森直子 『新守山川改修工事関連遺跡発掘調査概要Ⅲ―新守山川改修工事に伴う山賀遺跡の調査―』（滋賀県教育委員会、財団法人滋賀県文化財保護協会 昭和61年）

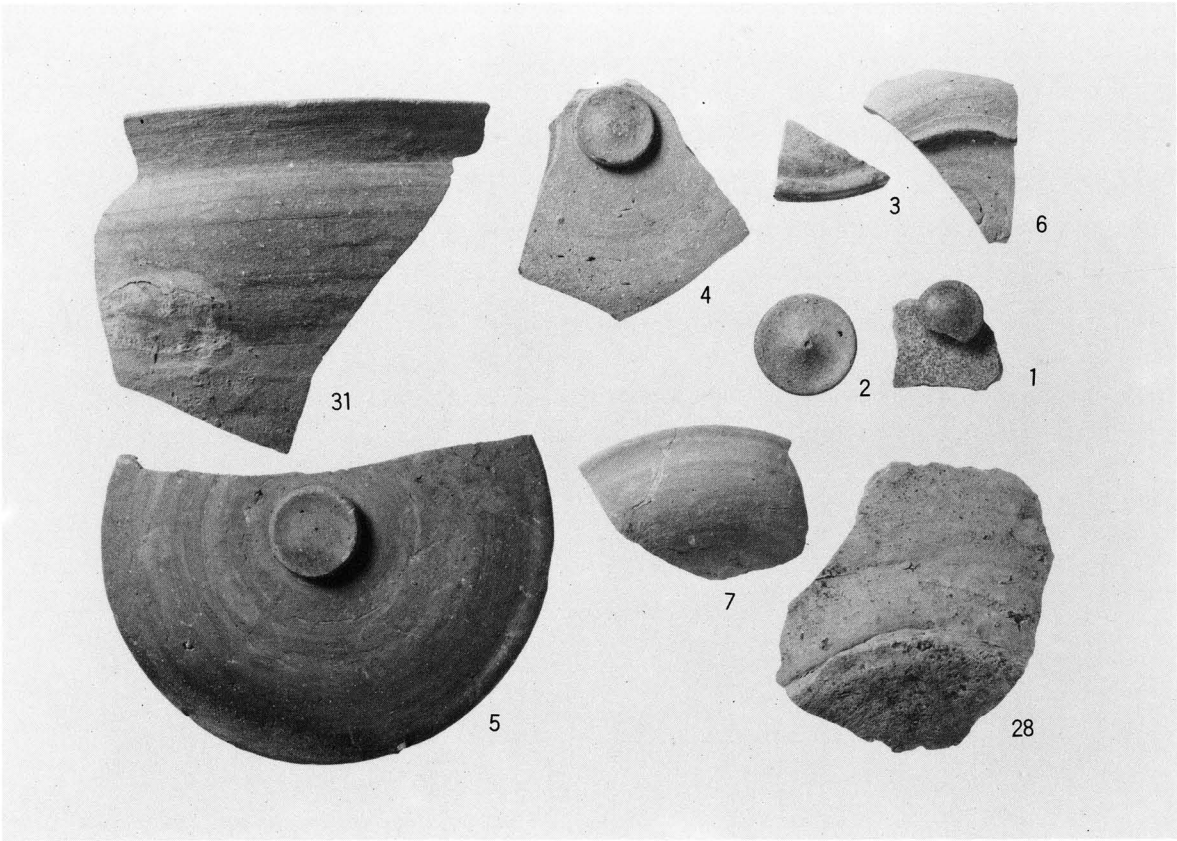
③ 井関弘太郎 『沖積平野』（大明堂 昭和58年）

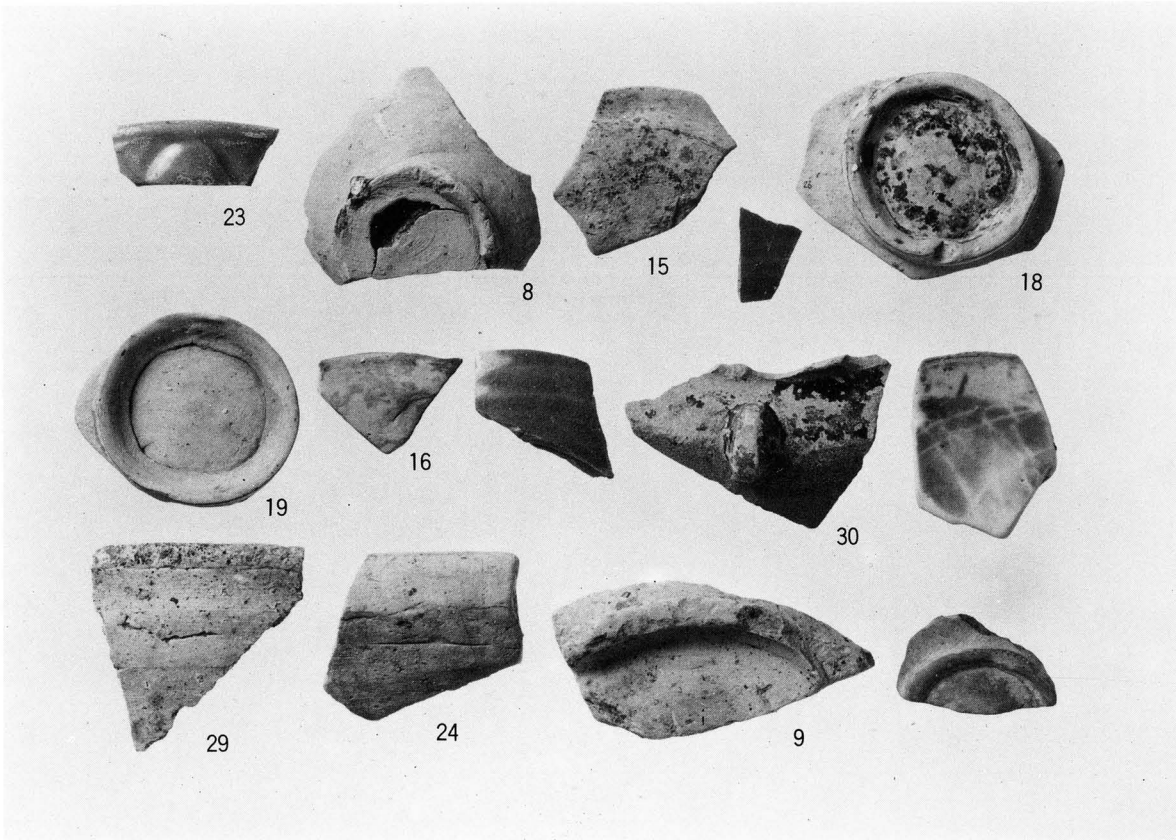
第１表　杉江東遺跡遺物観察表

器種 挿図 図版	法　　量	形態・技法の特徴	色　　調	胎土・焼成	備　　考
須恵器坏蓋 つまみ 第５図－１		天井部に宝珠つまみを有する。 外面に自然釉がかかっている。全面ヨコナデ	外面　黒味灰色 内面　淡灰色 内面一部鉄分付着のため茶褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む 硬質	第３トレンチ ＳＰ００１
須恵器坏蓋 つまみ ５－２		宝珠つまみ（へん平で中央部がやや隆起する） 全面ヨコナデ	青味灰色 端部は濃灰色	0.5～2.0㎜の砂粒を含む やや硬質	第１トレンチ 包含層
須恵器坏蓋 ５－３	口径 14.6㎝	口縁で折り曲げ、端部はつまみ出す 全面ヨコナデ	内面　灰色 内面一部外面鉄分付着のため茶褐色	1.0㎜以下の砂粒を若干含む 硬質	第３トレンチ 高まり構成土
須恵器坏蓋 ５－４		天井部に偏平なつまみを持ち天井部は下方へなだらかに伸びる。端部欠損。全面ヨコナデ	内外面共灰色 断面濃灰色と灰味茶色	0.5～2㎜位の砂粒を多く含む やや硬質	第１トレンチ 南西端包含層（第２層）
須恵器坏蓋 ５－５	口径 14.8㎝ 器高　2.8㎝	天井部外面に偏平なつまみ有り。天井部は下方へなだらかに伸びる。端部は外側を肥厚させて内傾し丸め込む。全面ヨコナデ	乳灰色 一部鉄分付着のため茶褐色	1.5㎜以下の砂粒と3～5㎜の小石を若干含む やや軟質	第１トレンチ南西端包含層（第２層）
須恵器坏身 ５－６	高台径　8㎝	底部は中央でほぼ平坦にのび、底部外周に高台を貼り付ける。内傾する凹面の内角で接地する。体部は内弯ぎみに伸びる。全面ヨコナデ	灰色	0.5～2㎜の砂粒を含む やや軟質	第１トレンチ南西端包含層（第２層）
須恵器坏身 ５－７	口径 10.2㎝	ほぼ平坦な底部から内面底部を肥厚させて外上方に立ち上がりつまみだす。端部は丸くおさめる。底部外面は未調整、他内外面ヨコナデ	内面は乳灰色 外面は灰色	0.5～2㎜の砂粒を含む やや硬質	第１トレンチ ＳＤ００１
灰釉椀 ５－８	口径 10.5㎝ 高台径 4.8㎝ 器高　3.6㎝	底部外周に台形の高台を貼付ける。体部は外上方に伸びる。口縁でやや外反し、端部は丸くおさめる。高台は貼付けで、内端部で接地する。高台内に糸切痕を有する。内面に自然釉がかかっている。ヨコナデ調整	釉　緑味灰色 素地　淡灰色	1.0㎜以下の砂粒を含む やや硬質	第１トレンチ西端包含層（第２層）
灰釉壺 ５－９	高台径 11.4㎝	底部外周に断面長方形の高台を持つ。高台は貼り付け	内面　茶味白色 底部外面　乳灰色　一部鉄分付着のため茶褐色	0.1～2.0㎜の砂粒を含む やや硬質	第３トレンチ 遺構面直上
土師器小皿 ５－10	口径　8.1㎝	口縁は外上方に伸び、端部は丸くおさめる 全面マメツ（内面及び口縁端部外面ナデ調整）	内面　乳茶白色 外面　灰白色	2.0～4.0㎜の小石を含む やや軟質	第１トレンチ ＳＰ００２
土師器小皿 ５－11	口径　7.5㎝	口縁はゆるやかに外上方に伸びる。端部は丸くおさめる。全体にマメツ（内面及び口縁外面ナデ調整）	全面　赤味乳白色	1.0㎜以下の砂粒を含む 軟質	第３トレンチ ＳＫ００１
小師器小皿 ５－12	口径　8.5㎝ 器高　1.4㎝	ほぼ水平な底部から口縁は屈曲して外上方に伸びる。端部は丸くおさめる。全面マメツ（内面及び口縁内外面ナデ調整）	茶味白色 鉄分付着のため一部茶褐色	2.0㎜以下の砂粒を多く含む 軟質	第３トレンチ ＳＫ００１
土師器小皿 ５－13	口径　9.6㎝	口縁は外上方にゆるやかに伸び、端部は丸くおさめる。全体にマメツ著しく調整不明	赤味乳白色	1.0㎜以下の砂粒を含む 軟質	第３トレンチ 高まり構成土
土師器皿 ５－14	口径 10.6㎝	底部欠損、ほぼまっすぐに外上方に伸び、つまみ上げる。端部は丸くおさめる。全面マメツ。口縁端部以外内外面に暗灰色物付着	口縁端部内外面はにぶい橙色 内外面褐色	1㎜以下の砂粒を含む やや軟質	第３トレンチ 高まり構成土
土師器皿 ５－15	口径 10.9㎝	内弯ぎみに伸びた口縁は、端部で強いヨコナデのため屈曲し外反する。端部は丸くおさめる。全面マメツ（内面及び口縁端部外面はヨコナデ、他は未調整）	内面　乳灰色 外面　乳褐色で一部鉄分付着のため茶褐色	3.0㎜位の小石と1.5㎜以下の砂粒を含む やや軟質	第３トレンチ ＳＤ００１
土師器皿 ５－16	口径 13.1㎝	底部欠損。口縁は外上方に伸び、端部はやや外反する。全面マメツ	内面と外面一部は鉄分付着のため茶褐色	1.5㎜以下の砂粒を含む	第１トレンチ南西端包含層（第２層）

器種 挿図 図版	法　　量	形態・技法の特徴	色　　調	胎土・焼成	備　　考
			外面　淡乳褐色	やや軟質	
土師器皿 5－17	口径　15㎝	底部欠損、やや肥厚ぎみに外上方に伸び、端部内面に沈線がめぐる。全面ヨコナデ	外面一部と内面鉄分付着のため茶褐色　他外面淡灰色	1.0㎜以下の砂粒を含む やや軟質	第3トレンチ SK003
黒色土器椀 5－18	高台径5.4㎝	底部は平坦にのび、外周に断面台形の高台を貼付ける。高台の底辺で接地する。内外面ナデ調整	内面　茶味黒色 外面　薄い橙色 高台内鉄分付着のため茶褐色	0.5～2.0㎜位の砂粒を多く含む 軟質	第1トレンチ SP001
黒色土器椀 5－19	高台径5.8㎝	底部外周に断面三角形の高台を貼付ける。内面に炭素が吸着している。内外面ナデ調整	内面　暗灰色 外面　淡黄灰色	1.5㎜以下の砂粒を多く含む やや硬質	第2トレンチ SP003
黒色土器椀 5－20	高台径4.4㎝	底部外周に台形の高台を持つ。高台は貼り付けで内端部で接地する。内面に炭素が吸着している。内外面ナデ調整	内面　暗灰色　一部灰味白色 外面　淡褐色	2.0㎜以下の砂粒を含む 軟質	第3トレンチ 遺構面直上
黒色土器 5－21	高台径4.5㎝	底部外周に断面台形の高台を貼り付ける。丸みを持った高台の底辺と底部中央で接地する。内面に炭素吸着している。全面ヨコナデ	内面　暗褐色 外面　淡褐色　一部外面鉄分付着のため茶褐色	1.5㎜以下の砂粒を含む やや軟質	第1トレンチ SD002
白磁坏 5－22	口径10.5㎝	底部欠損、内弯ぎみに伸びた口縁は端部で大きく外反する。端部は露胎になっているヨコナデ調整	釉　緑味茶白色 素地　淡茶色	1.0㎜以下の砂粒を若干含む 硬質	第3トレンチ SK001
青磁椀 5－23	口径14.2㎝	口縁は外に開き、端部は丸くおさめる。外面に蓮弁文有り、内外面共施釉（発色悪い）	釉　灰味緑色 素地　灰色	0.5㎜以下の砂粒を若干含む 硬質	第3トレンチ SK001
土師器鉢 5－24		口縁で肥厚し内弯する。端部は丸くおさめる。内面はハケ目、外面へラケズリの跡残る	うすい橙色	0.5㎜～1.5㎜位の砂粒と赤色砂粒を含む 軟質	第3トレンチ SK004
鉄釉鉢 5－25	高台径8.8㎝	底部は平坦に伸び、底部外周に台形の高台を持つ。高台削り出し。高台の内傾ぎみの底辺で接地する。ヨコナデ、内面施釉	内面　濃鉄茶色 外面　灰色	3.5㎜位の小石と1㎜以下の砂粒を含む 硬質	第3トレンチ 遺構面直上
波佐見系 磁器椀 5－26	口径11.4㎝	底部欠損、体部はなだらかに外上方に伸び端部は丸くおさめる	青味白色 絵部分　紺色　口縁の圏線の外面は緑青灰色　内面　淡青色	0.5㎜以下の砂粒を若干含む 硬質	第3トレンチ 高まり構成土
京焼風椀 5－27	高台径4.7㎝	底部は平坦に伸び、底部外周に断面長方形の高台をもち、底辺で接地する。体部は内弯ぎみに伸びる、高台削り出し。高台内中心に円圏有り。ヨコナデ、底部を除く外面と内面に釉がかかっている	乳茶白色 素地　黄白色	0.5㎜以下の砂粒を若干含む やや硬質	第3トレンチ 高まり構成土
信楽　鉢 5－28	高台径 11.3㎝	底部は平底 内面は使用のためマメツ、外面ナデ	外面　乳橙色 内面　淡灰褐色	3.0㎜～5.0㎜位の小石と2.0㎜以下の砂粒を多く含む やや硬質	第3トレンチ 高まり構成土
信楽すり鉢 5－29		端部は内傾する面を持ち丸くおさめる。全面ヨコナデ	内面　淡褐色 外面　乳褐色	3.0～3.5㎜位の小石と2.0㎜以下の砂粒を多く含む やや軟質	第3トレンチ 高まり構成土
須恵器短頸壷 5－30		肩部につまみを有する。穴は貫通していない。肩部より上に自然釉がかかっているヨコナデ	外面　肩部より上と内面口縁緑味茶色　他灰色	2.5㎜位の小石と1.5㎜以下の砂粒を含む やや硬質	第1トレンチ南西端包含層（第2層）
須恵器短頸壷 5－31	口径23.6㎝	外上方に伸びた体部から口縁は短く屈曲外反する。端部は軽く内傾する面をもち丸くおさめる。全面ヨコナデ、外面体部に取手の取り付け痕がある	内面　灰色 外面　淡灰色	0.5～2.0㎜位の砂粒を含む やや軟質	第1トレンチ南西端包含層（第2層）

図版一　杉江東遺跡出土遺物



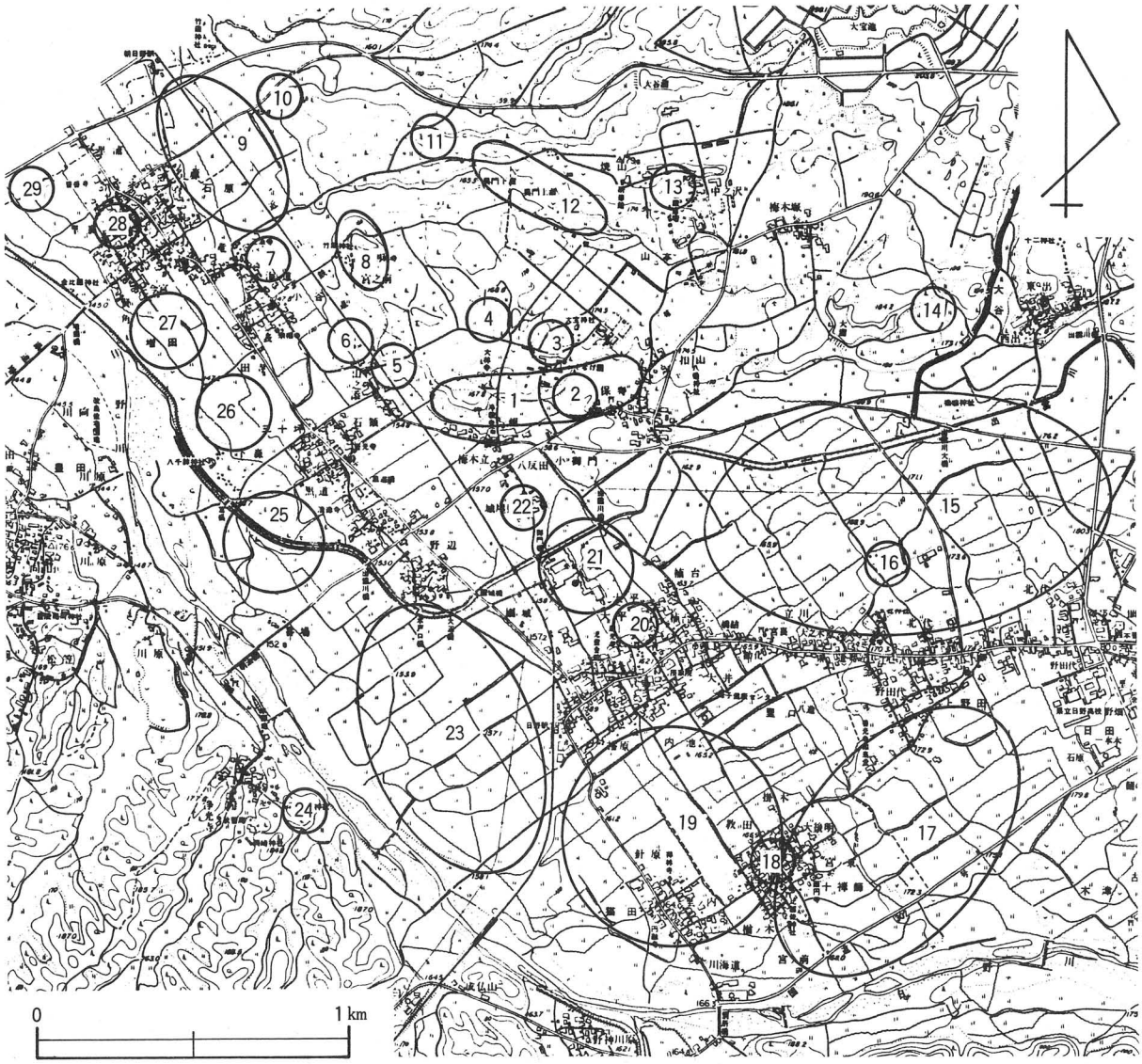


第４章　小御門古墳群
（事業名　小御門Ｂ遺跡）

1．はじめに

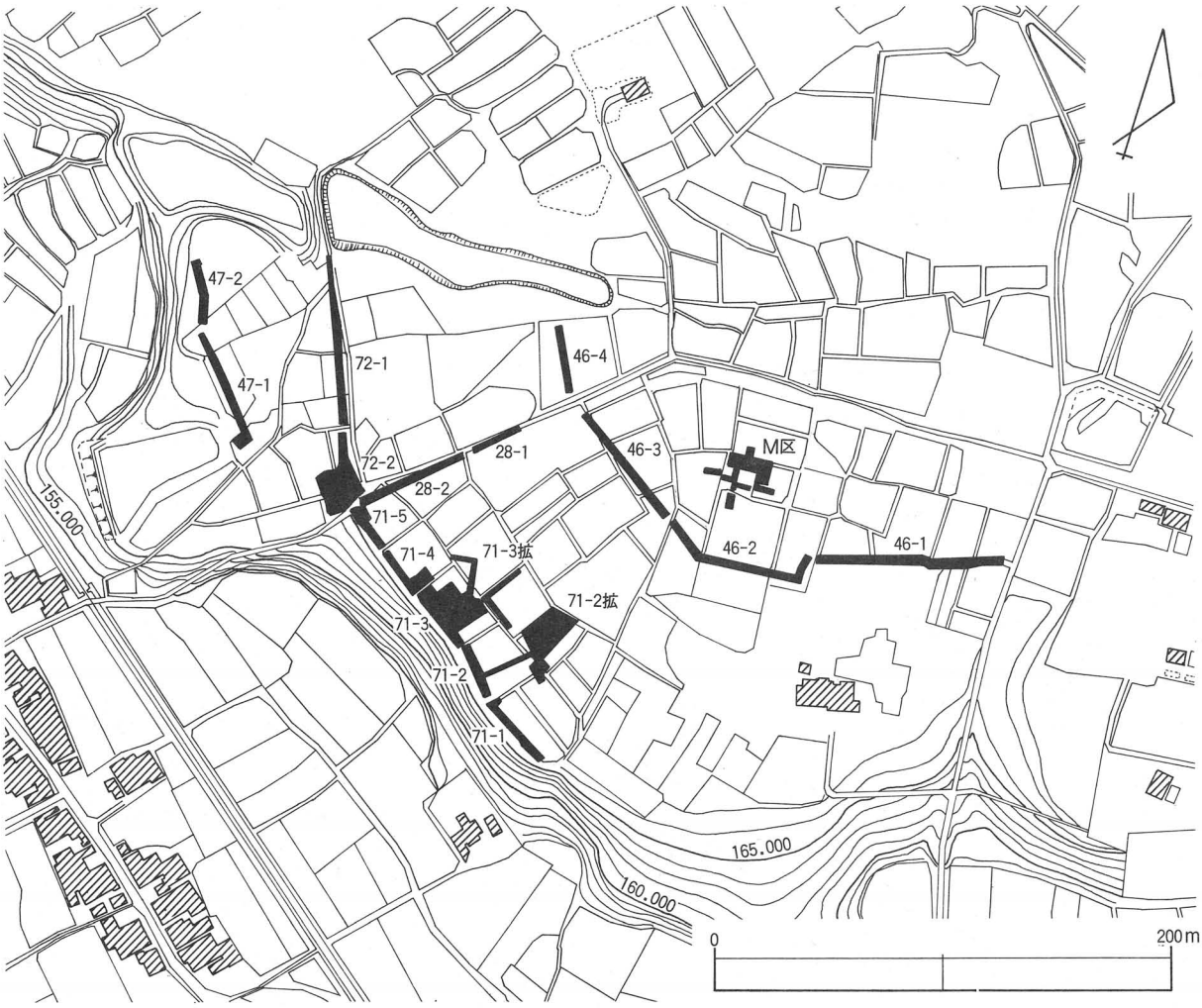
本調査は、滋賀県が実施する昭和58年度県営ほ場整備事業（必佐地区小御門工区第２工事）に伴い実施したものである。当該地は昭和40年度に滋賀県教育委員会により実施された調査と同一丘陵上で、その西方に位置するものである。

調査は、排水路予定地及び切土設計部分を対象とし、遺構と検出状況により部分的に拡張した。設定したトレンチは16個所に及んだが、明確な遺構が検出されたのは数個所のみであった。最終的な調査面積は約1700㎡であ



1．小御門古墳群（小御門B 遺跡）
2．小御門中世墳墓群（小御門C 遺跡）
3．口山東遺跡
4．口山遺跡（小御門A 遺跡）
5．山之添遺跡
6．小谷古墳
7．野瀬遺跡
8．小谷城跡
9．宮ノ前遺跡
10．山畑遺跡
11．野神平遺跡
12．焼山遺跡
13．月ケ岡遺跡
14．正明山遺跡
15．北代遺跡
16．上野田館遺跡
17．十禅師遺跡
18．下周坊遺跡
19．猫田遺跡
20．内池館遺跡
21．内池遺跡
22．小御門城跡
23．播沢遺跡
24．徳谷遺跡
25．番場遺跡
26．下森遺跡
27．田寺遺跡
28．明性寺遺跡
29．里裏遺跡

第１図　遺跡周辺図



第２図　調査区域図

る。

発掘調査の期間は昭和58年７月から昭和59年３月までとし、現地調査は昭和58年９月に完了した。

２．位置と環境

滋賀県の南東部に位置する日野町をほぼ縦断するような状態で通過する国道307号線は、北接する八日市市より南下し、町中央部で南西に屈曲して水口町へとぬける。そして、この国道は湖東平野をへて鈴鹿山系より派生する低丘陵を横断しているが、日野町が平野部から丘陵部への変換点とも言える。日野町は鈴鹿山系より派生する３つの丘陵で大半が占められ、北より布引丘陵・日野丘陵・水口丘陵と呼ばれている。これらの丘陵の谷あいには日野川とその支流である佐久良川と出雲川が北西流して琵琶湖へ注いでいる。また、湖東内陸部を結ぶ唯一の鉄道である近江鉄道は、北西に位置する蒲生町より日野丘陵先端の南西裾野を日野川にほぼ平行に走りながら日野町に入り、町中央部で屈曲した後国道にほぼ沿うようにして水口町へと連絡している。

本遺跡は、国道及び鉄道が屈曲するやや北方の双方に挟まれた、小御門丘陵と呼ばれる日野丘陵より派生した微高地上に立地する。この丘陵は標高約165～180ｍで、南方の水田面との比高は約10～20ｍとなっている。今回調査の対象とした地域は小御門丘陵の南縁で、行政区画では大字小御門字口山及び大字三十坪字山之添にあたる。

本遺跡周辺は、琵琶湖に流入する大河川の１つである日野川とその支流出雲川が合流する地点で、蒲生郡条里が施行されている地域であることから湖東平野の最奥部と言える。このことは日野町内への文化の波及がこの地域を起点として行われたことを示している。すなわち、日野川流域のこの付近には日野町内最古の数少ない弥生時代の遺跡である内池・宮ノ前の両遺跡が位置しているからである。特に内池遺跡では弥生時代から鎌倉時代にわたる遺構の中で方形周溝墓５基が検出されている①。また、宮ノ前遺跡はほぼ完形に近い弥生土器が６点一括出土した他、古式土師器を伴って祭祀用木製品が出土した沼跡が発見されている②。

古墳時代の集落跡としては、前述の内池遺跡や下森遺跡③をはじめとして小御門城跡④・十禅師遺跡⑤等で竪穴住居跡が検出されている。これらの竪穴住居跡とほぼ同時期にあたるのが本遺跡である。過去の調査例によると本遺跡は、墳丘径14ｍ前後、墳丘復元高１ｍ以内の円墳10基により構成される古墳群であることが判明している⑥。そしてこれらは３～４基構成の３小群から成り、占地により大きく２支群に区別されている。実際に発掘調査が実施され主体部が明らかにされているのは２基だけであるが、いずれも５～６基の木棺直葬による主体部が検出されている。このような古墳群の構成や主体部の状態は飯道塚古墳群⑦と共通するところがあり、当地域の古墳の変遷を知る上で欠かせないものである。また、第Ⅱ－２号古墳第１号遺構で検出された火化施設は、火葬墳墓とは異なる系譜を引く特異な葬制であると指摘されている。

奈良時代から平安時代にかけての遺跡は比較的少なく、和銅開珎や円面硯が出土して注目を浴びた宮ノ前遺跡⑧や小規模ながらも残存状態が良好で近江産緑紬陶器窯跡としては初の調査例となった作谷窯跡⑨などが見られるだけである。

古代末から中世以降の遺跡で発掘調査が行われているのは小御門城跡⑩や十禅師遺跡⑪などであるが、この時期は蒲生氏に関係すると思われる城郭・居館・墳墓等が多くみられる。特に、瀬戸・常滑をはじめ信楽・越前・青磁などを蔵骨器とした大火葬墳墓群である大谷古墓⑫は、蒲生氏に関わるものではないかと考えられている⑬。

以上のように本遺跡をとりまく歴史的環境は非常に変化に富んでおり、当地域は古代における日野町の中枢部とも言えるであろう。

３．遺　　構

調査対象地域の排水路敷を中心に設定した16個所のトレンチは、丘陵内部の46系統、丘陵南縁の71系統、南西に張出す部分の47系統の３群に大別できる。各々のトレンチについて以下に述べることにする。

Ｍ区は丘陵内部にあり、約14×10ｍの方形に残る墳丘状の高まり及びその周辺である。周囲は水田で水田面との高低差は約2.5ｍである。老人ホームさつき荘の敷地内に保存されている古墳は径約20ｍ、高さ約３ｍで、このような円墳の残骸である可能性があるため調査の対象とした。まず、墳丘状高まりの周囲に周濠が存在するか否かをみるために、ＮＴ・ＥＴ・ＳＴ・ＷＴ・Ｎ'Ｔのトレンチを設定した。ＮＴでは溝跡（ＳＤ-1）が7.4ｍ以上検出されたが、周濠とは考えられないものであった。墳丘状高まりには、長辺と短辺の中軸線を通るような状態でＬ字状のトレンチを２本設定した。人力により表土下約0.5ｍまで掘下げたが、黄褐色粘質土層と灰褐色粘質土層の互層となっており人工的なものではないことが判明した。念のため、重機により断割りを行ってみたが、約1.8ｍの地点で地山（赤褐色砂礫層）が検出された。

同じく丘陵内部の46系統では長さ約30～82ｍのトレンチを４本（46-1～4）を設定したが、厚さ約20～30㎝の

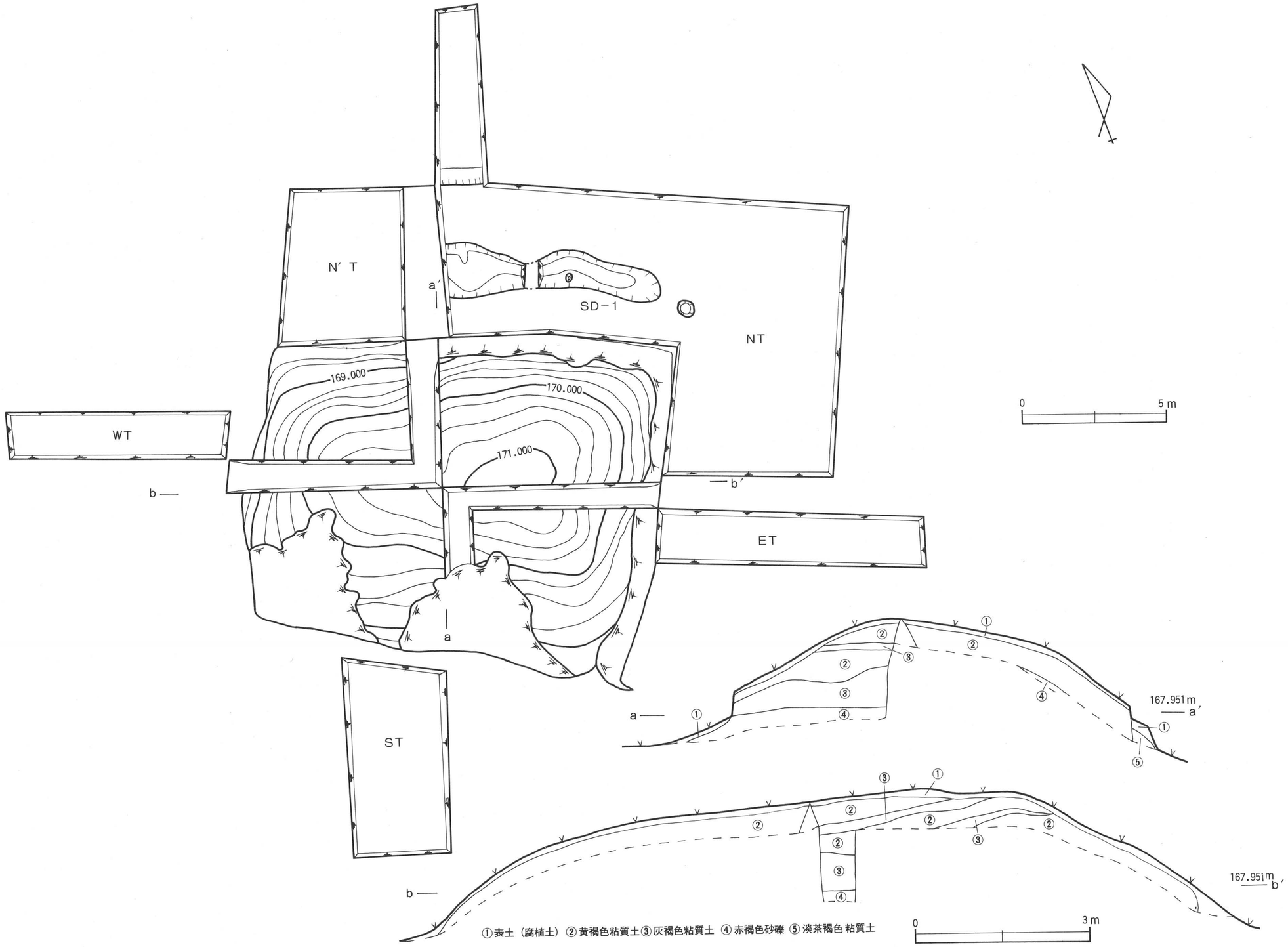
耕土直下で黄褐色粘質土の地山が検出され、遺構・遺物は皆無であった。

南西に張出す部分に設定した47系統は、長さ約28～52ｍの２本のトレンチ（47-1・2）からなる。耕土下約20～40㎝で黄白色粘土を中心とする地山が表われ、46系統同様遺構・遺物は皆無であった。

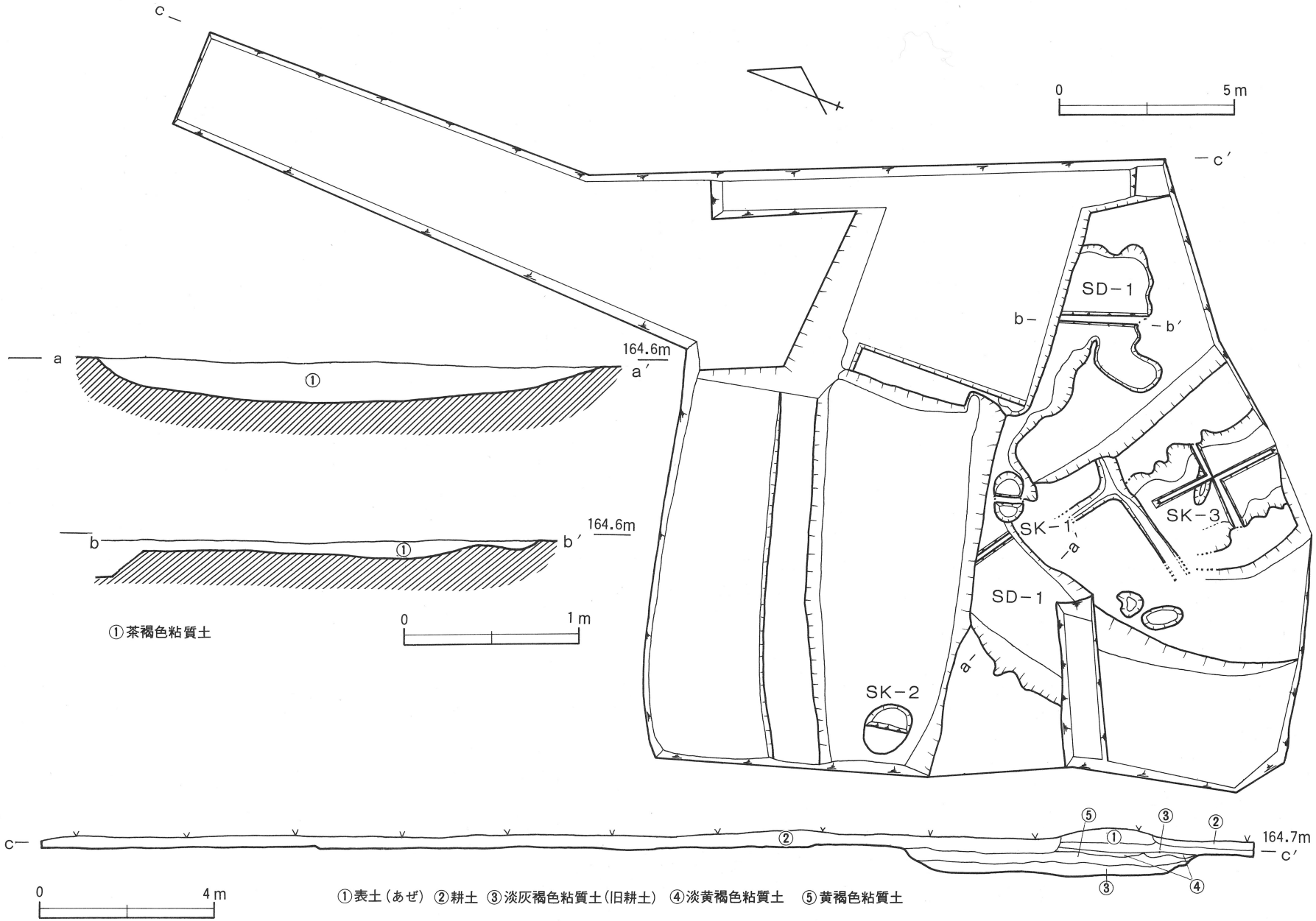
72系統は南西に張出す部分の基底部を丘陵南縁から内部にわたって直線的に延びるトレンチである。72-1は長さ約75ｍであるが、厚さ約20～30㎝の耕土の直下または耕土下約20㎝の灰褐色粘質土層の直下で地山が検出されただけであった。72-2では遺構が認められたため西方に拡張して遺構の広がりを確認した。トレンチの南端付近では、幅約3.0ｍ、深さ約23㎝の溝跡（ＳＤ-1）が、やや不整形ながら約14ｍの弧状に検出された。埋土は茶褐色粘質土の単純層であった。その他には土壙が３基検出された。そのうちの１基（ＳＫ-1）は約1.3×0.9ｍの不整楕円形で、深さ約75㎝の基底部には握り拳大の礫が集積していた。また、トレンチ中央部では東壁土層図（Ｃ-Ｃ′）に淡灰褐色粘質土層（旧耕土）が２層見られることから、マチダオシ（小区画の水田数枚を大区画の水田にする行為）が２度行われていることがわかる。

28系統は72-2の南東位置にあり、丘陵南縁より内部に向って一直線に延びるトレンチである。長さ約23ｍの28-1は水田面下約30～75㎝で黄灰白色粘土の地山が表われ、遺構・遺物は皆無であった。28-2は長さ約50ｍのトレンチで、水田面下約80㎝で遺構面が検出された。遺構はトレンチの中央付近でＳＤ-1が、東端付近でＳＤ-2が認められた。ＳＤ-1は北西より南東へ延びた後北東へ屈曲しており、検出された長さは約22ｍを測る。埋土は灰白褐色粘質土で約15㎝の堆積である。ＳＤ-2は幅約0.9～2.6ｍで約2.4ｍ検出されたにすぎない。埋土は上層が灰白褐色粘質土、下層が黄灰白褐色粘質土で、それぞれ約15～20㎝の厚さである。28系統に属するこれらのトレンチは72-2と同様マチダオシが１度行われている。

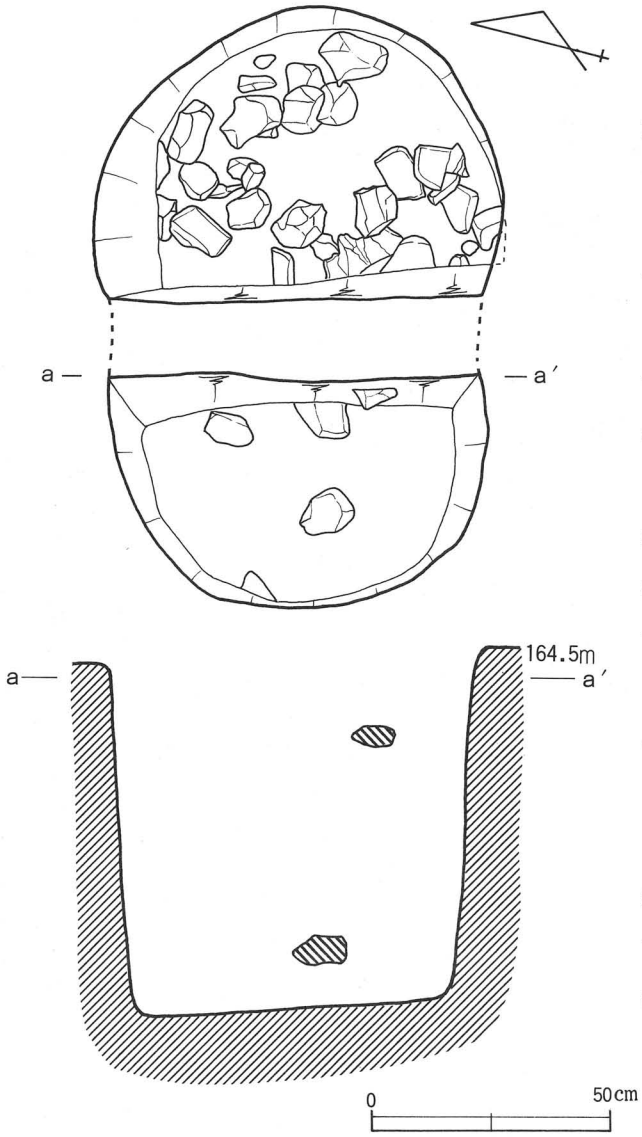
71系統は丘陵の南縁に設定した５つのトレンチからなり、それぞれ71-1～5とした。71-1は最も南東に位置するトレンチで、長さは約35ｍである。トレンチの西側は約70㎝落込んでおり、耕土及び床土の下層は搬入土の黄褐色粘質土層と旧耕土と思われる灰褐色粘質土層が堆積しているだけで、農道の拡張工事に伴うものであることがわかる。71-2は長さ約24ｍで遺構面までの堆積状況は71-1と同様である。遺構は３条の溝跡（ＳＤ-1～3）と土壙である。溝跡はいずれもトレンチとほぼ平行に検出され、その幅は約１ｍ前後と小規模なものである。埋土はＳＤ-1が暗灰褐色粘質土、ＳＤ-2が灰褐色粘質土、黄褐色粘質土、ＳＤ-3が黄色の強い黄灰褐色粘質土となっており、深さも約3～18㎝と浅いものである。切合い関係によりＳＤ-1がＳＤ-2に先行することが判明している。トレンチの北端付近では土壙が重複して検出されている。71-2拡は後述する71-3で検出された溝跡を追求する目的で設定したものである。しかし、検出されたものは71-3のものとは異なる溝跡３条（ＳＤ-1～3）と近世のものと思われる円形及び方形の土壙２基であった。ＳＤ-1は最大幅約3.9ｍ、深さ約18㎝で約16.3ｍ確認できた。埋土は黄灰褐色粘質土・黒褐色粘質土・黄褐色粘質土である。ＳＤ-2は幅約90㎝、深さ約12㎝で長さは12.6ｍ以上である。埋土は茶褐色粘質土である。ＳＤ-3はＳＤ-1に切られており、幅約1.8ｍ、長さ約12.7ｍを測る。71-3においては南半部分では意味不明の土壙や溝跡とマチダオシの痕跡が認められただけであるが、北半部分では古墳に関係すると思われる溝跡１条（ＳＤ-1）と土壙１基（ＳＫ-1）が検出された。ＳＤ-1は最大幅約6.9ｍ、深さ約20㎝の規模で、長さは両端が水田による削平のため約24ｍしか残存していなかった。埋土は複数の黄褐色ないしは茶褐色系の粘質土層により構成されているが、ｂ-ｂ′に見られるような堆積状況から北方からの流入によりこの溝は埋没していったようである。遺物は主として暗黄褐色粘質土層または茶褐色粘質土層から出土しているが、復元過程で異なる土層より出土した破片どうしが接合できることが判明し、埋土間には時間的経過がほ


N′ T
a′
SD−1
NT
169.000
170.000
171.000
WT
b
b′
ET
a
ST
a
167.951 m
a′
b
167.951 m
b′
①表土（腐植土）②黄褐色粘質土③灰褐色粘質土 ④赤褐色砂礫 ⑤淡茶褐色 粘質土
0
5 m
0
3 m

第３図　Ｍ区実測図


c
c′
0
5m
SD−1
b−
−b′
a
a′
164.6m
①
b
b′
164.6m
①
①茶褐色粘質土
0
1m
SK−1
SK−3
SD−1
SK−2
a′
c
c′
164.7m
①
②
③
④
⑤
0
4m
①表土（あぜ） ②耕土 ③淡灰褐色粘質土（旧耕土） ④淡黄褐色粘質土 ⑤黄褐色粘質土

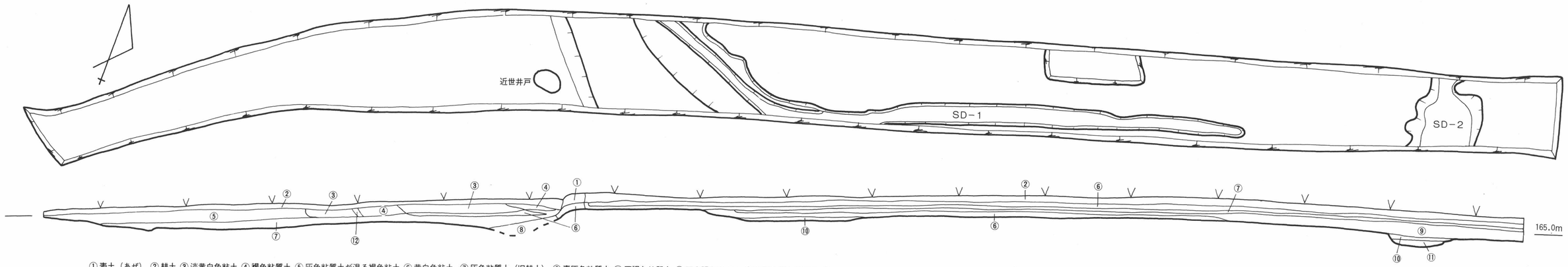
第４図　72-2実測図



第５図　72-2ＳＫ-1実測図

とんどないようである。また、ＳＤ-1の東端付近にはこれを切る状態でＳＫ-1が検出された。規模は長軸約1.5ｍ、短軸約1.0ｍの扁平な楕円形で深さは約0.5ｍを測る。埋土は３層で、上方より淡茶褐色粘質土・黄白色粘質土・黄褐色粘質土が混る茶褐色粘質土となっている。約1.4×0.7ｍの土壙基底部には副葬品が認められた。まず、北東中央寄りには東西南北にほぼ対応するような状態で土師器の小皿が５枚（西方のみは２枚重ね）配置され、その上方中央に青磁椀が１点のせられていた。そして、長軸中央やや東より位置には漆製品１点が置かれていた。骨片や朱のたぐいは認められなかった。71-3拡も71-3で検出されたＳＤ-1を確認する目的で設定したが、遺構は皆無であった。71-4では、意味不明の土壙とマチダオシと思われる痕跡が認められたにとどまった。71-5でも、溝跡や土壙が検出されただけである。

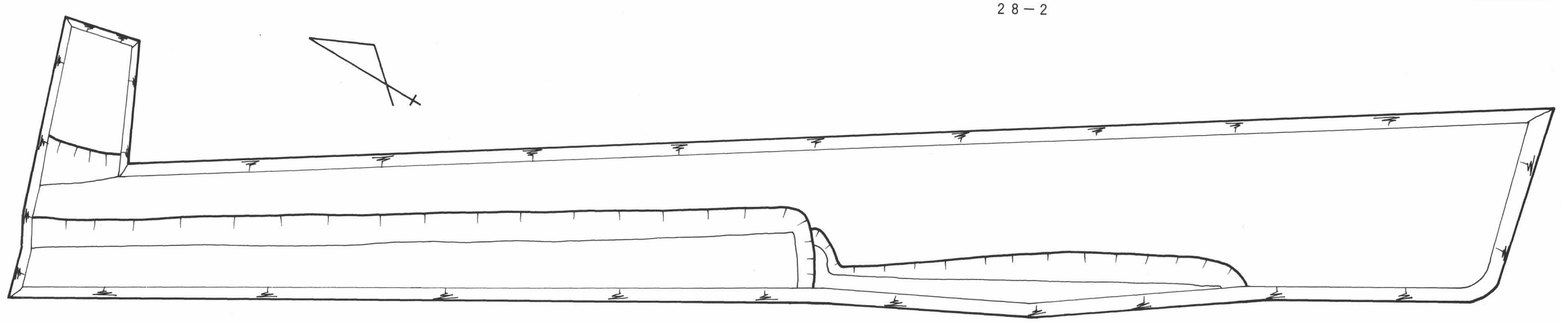
以上が今回の調査で確認された遺構であるが、当初想定された古墳は検出することはできなかった。71-3で検出したＳＤ-1も古墳に何んらかの関連性は認められるものの残存状態が良好でなく、現時点で断言することは非常に困難である。



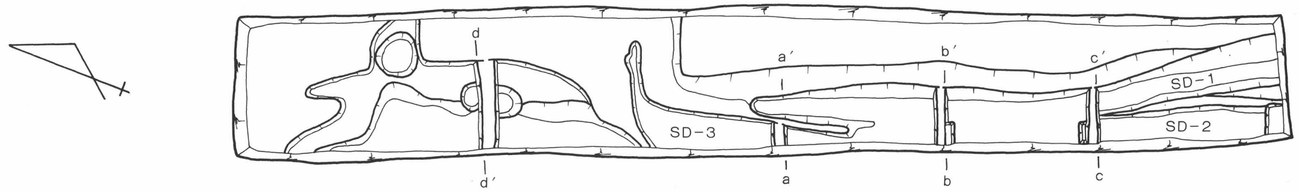
① 表土（あぜ） ② 耕土 ③ 淡黄白色粘土 ④ 褐色粘質土 ⑤ 灰色粘質土が混る褐色粘土 ⑥ 黄白色粘土 ⑦ 灰色粘質土（旧耕土） ⑧ 青灰色粘質土 ⑨ 灰褐色粘質土 ⑩ 灰白褐色粘質土 ⑪ 黄灰白褐色粘質土 ⑫ 黄色粘土が混る灰色粘質土

0 5 m

28－2

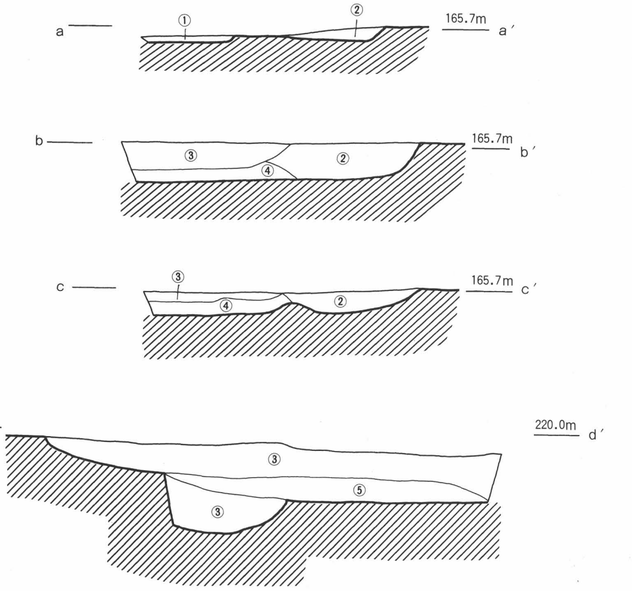


71－1



71－2

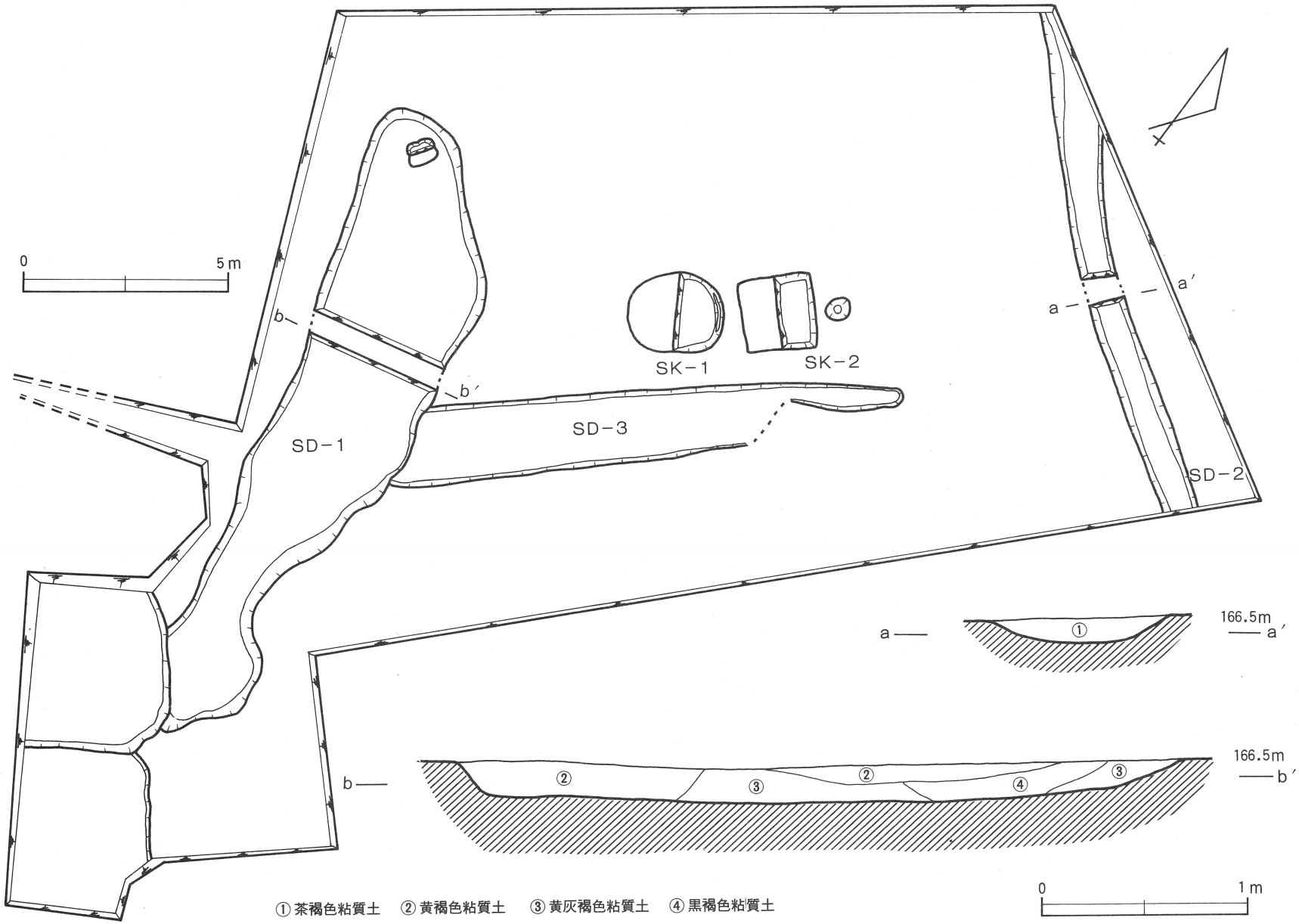
0 5 m



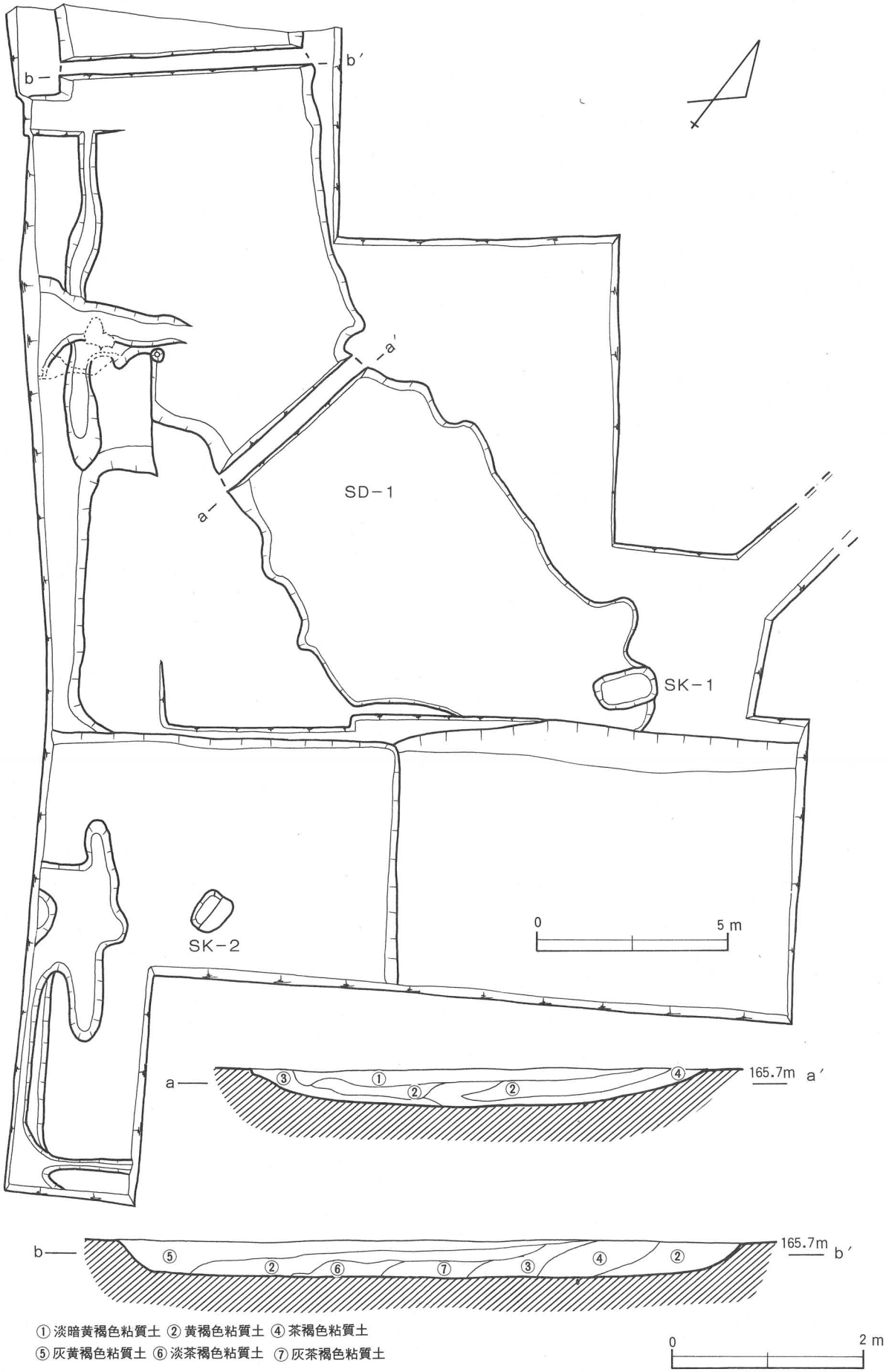
① 黄色の強い黄灰褐色粘質土 ② 暗灰褐色粘質土
③ 灰褐色粘質土 ④ 黄褐色粘質土 ⑤ 暗黄褐色粘質土

0 1 m

第6図 28-2・71-1・71-2実測図

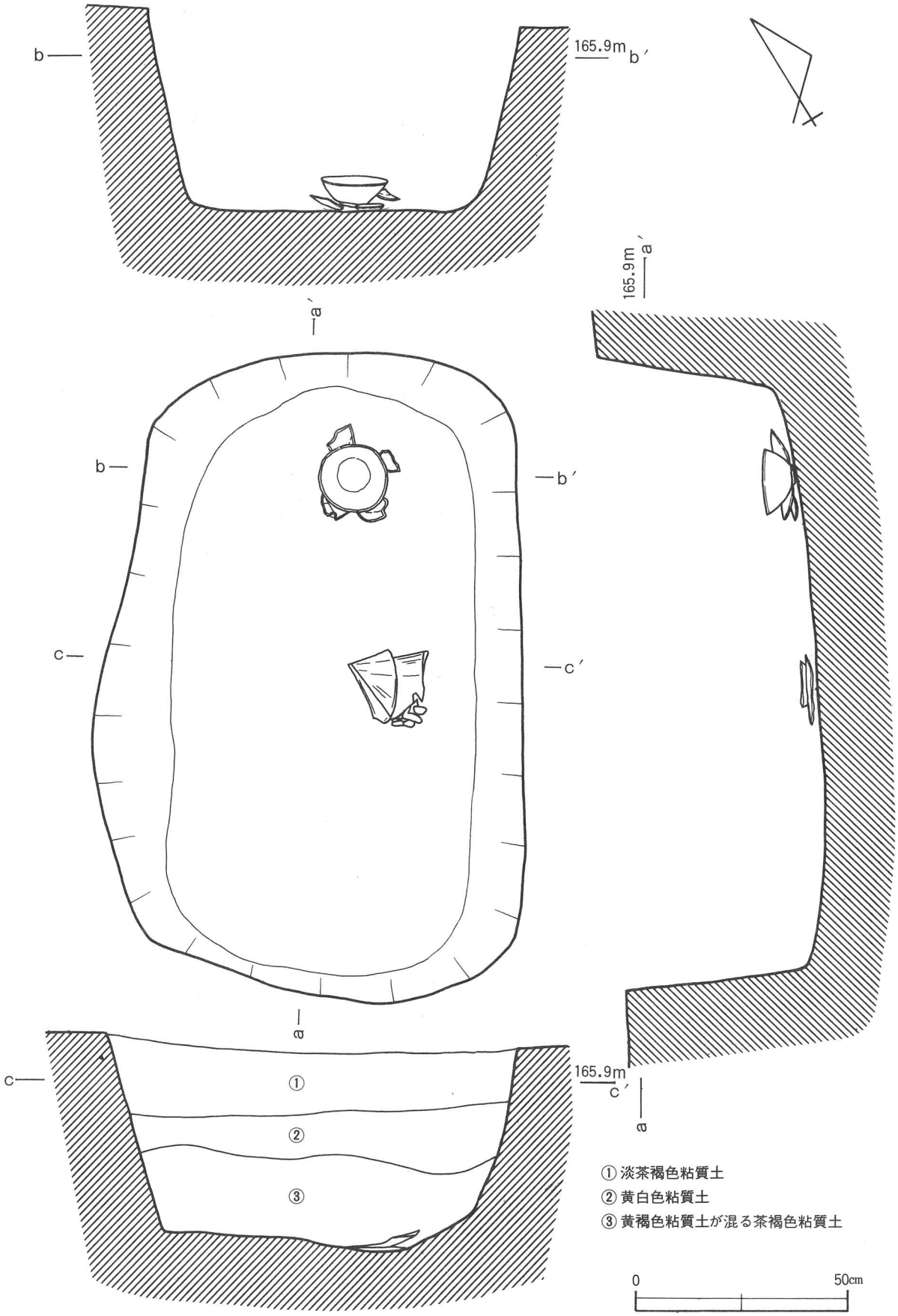

0
5m
SK-1
SK-2
SD-1
SD-2
SD-3
a
a′
b
b′
166.5m
①
②
③
④
0
1m
① 茶褐色粘質土　② 黄褐色粘質土　③ 黄灰褐色粘質土　④ 黒褐色粘質土

第7図　71-2拡実測図

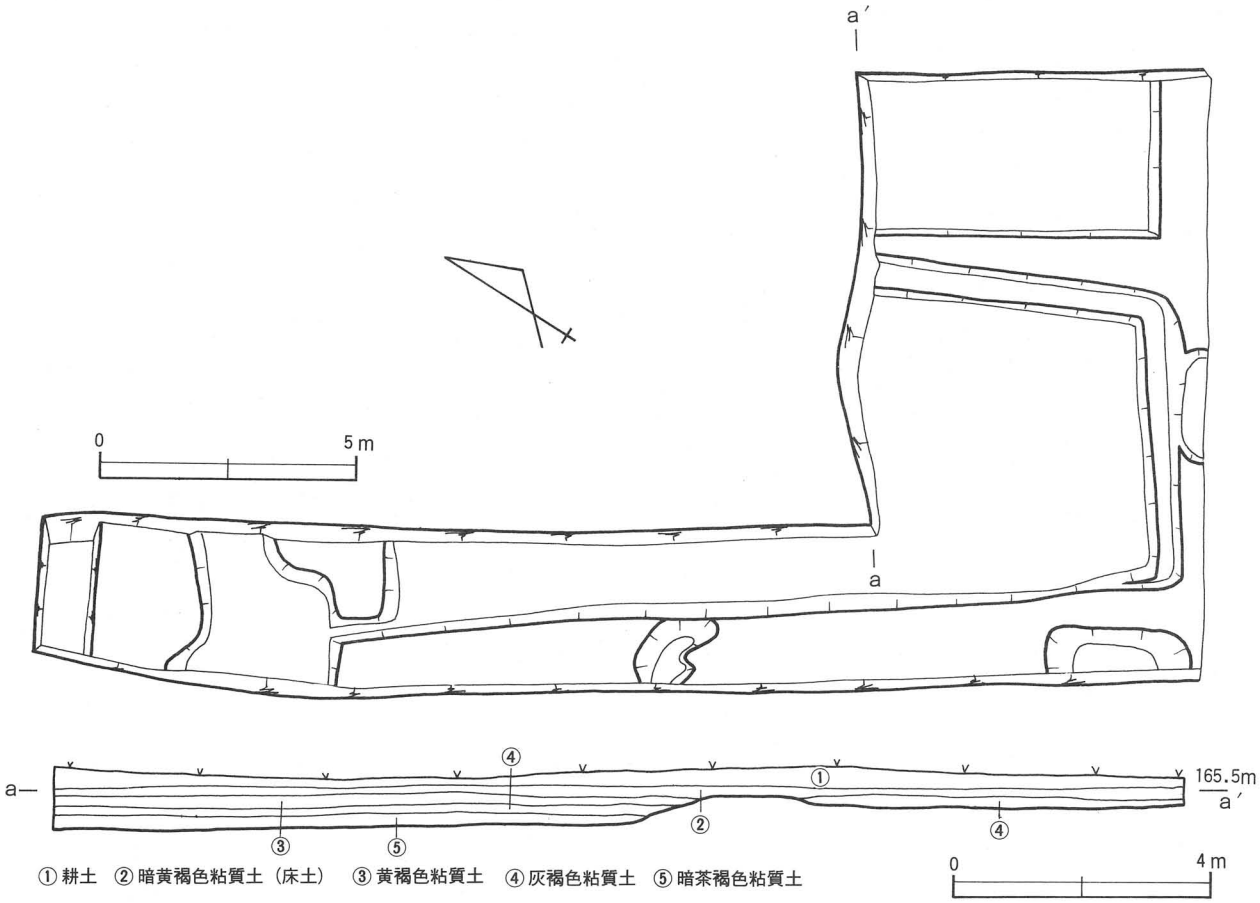


① 淡暗黄褐色粘質土 ② 黄褐色粘質土 ④ 茶褐色粘質土
⑤ 灰黄褐色粘質土 ⑥ 淡茶褐色粘質土 ⑦ 灰茶褐色粘質土

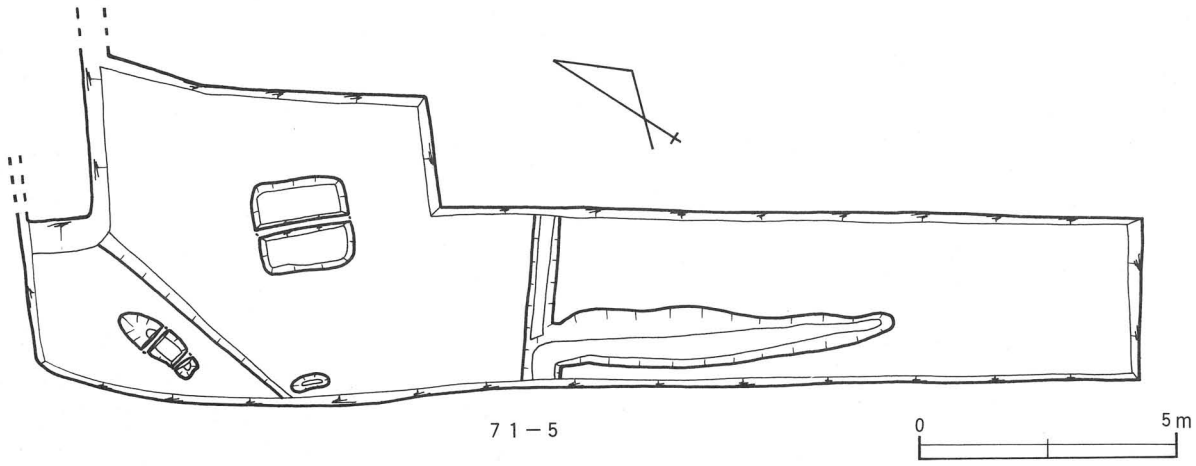
第8図　71-3実測図



第９図　71-3ＳＫ-1実測図



７１－４



７１－５

第10図　71-4・71-5実測図

4．遺　　物

出土した遺物はほとんどが須恵器で、これ以外に図示できるものは、土師器・青磁があるだけである。また、この他に漆製品がある。これらの遺物の大半は71-3で検出されたＳＤ-1からの出土である。以下、主に実測可能なものについて述べることにする。

須恵器

29点あり、杯身・杯蓋・瑳・横瓶・壺・甕・高杯・皿などが挙げられる。

杯身は７点で、底部周縁に断面方形の貼付け高台を有するＣ28以外は、内傾するやや高い立上りを有するものばかりである。後者は口径11.0～14.2cmを測り器高はＣ６によると5.2cmで、口径に対して器高の低い形態である。

杯蓋は４点の出土である。いづれも天井部は丸く口縁部まで大きな屈曲は認められない。天井部と口縁部との境は、前段階までの稜がかなり退化し、その名残りをとどめる程度のものや強いナデによりかつて稜を付しただろう部分であることが想像できる程度となっている。口縁端部はいづれも内傾する面となっているが、段がわずかに認められるものや外方に肥厚するものがある。天井部外面のヘラ削りは全く認められず、回転ヘラ切り痕が残るだけである。

瑳は大小の各１点のみである。大型のものは口径18.9cm、器高26.4cmを測る。頸基部は径8.2cmと比較的細く、体部はほとんど球形でその最大径は口径と同一である。口頸部中位に２条の沈線がめぐり、それより上半から口縁部にかけては櫛描波状文が施される。体部上半の文様帯は櫛描刺突文・沈線・櫛描刺突文・沈線となっており、その下半に径2.1cmの円孔が下方向へ穿たれている。体部下半はカキ目調整されている。小型のものは口径12.2cmを測り、頸基部はやや太い。文様は全く施されない。

横瓶も２点のみの出土で、俵形の体部上面中央に強く屈曲する口縁部が取付けられるものである。口縁端部は外方へ玉縁状に肥厚する。体部外面は平行叩き後部分的にカキ目が施される。内面は同心円文のあて板圧痕が明瞭に残る。

壺は４点認められるが、それぞれバラエティーに富んでいる。Ｃ２・Ｃ７は体部最大径が7.2～10.4cmの小型のもので、体部はかなり扁平な球形である。Ｃ２にはカキ目が施される。Ｃ21はやや扁平な砲弾形に近い体部と比較的細い頸部をもつ形態である。頸部と体部上位に櫛描波状文が施され、体部のそれの上下には各１条の沈線がめぐる。体部下半はカキ目調整である。Ｃ22はごくわずかに肩部の認められる球形に近い体部と丸味の残る底部をもつものである。体部中位にカキ目と底部にヘラ削りが施される。

甕は６点あり、今回出土した須恵器の中では多量に属する方である。法量により大中小の３タイプに分類可能である。Ｃ23は小型で、口径17.7cm、器高28.4cmを測る。わずかに肩の張る体部に比較して長く広い口頸部がつく。口縁端部は断面が方形で、外面に突帯がめぐる。口頸部は２～３条の鈍い沈線により２分され、上下それぞれに櫛描波状文が施される。中型のものは４点と最も多く、口径は21.0～23.6cm、器高は46.0～53.0cmを測る。体部の最大径は43.3～47.5cmでいづれも上位1/3以上の位置にある。口縁端部は玉縁状に外方へ肥厚し、上方へつまみ上げられる。口頸部はＣ24のカキ目調整を除くとロクロナデである。大型のものはＣ27の１点のみで、口径32.8cm、器高70.2cmを測る。口頸部は小・中型のものに比較してかなり鋭角的に立上る。口縁端部は小さな玉

縁状で、やや窪む内傾面となる。体部はあまり肩の張るものでなく、しまりのない形態である。最大径は58.3cmを測る。これら甕の体部外面の調整はC24・C27の格子叩きを除くと平行叩き後カキ目が施されるのが一般的で、内面は同心円文のあて板圧痕が明瞭に残る。

高杯はC29の1点だけである。杯部は比較的浅く全体的に丸味のある形態である。口縁部外面は強いナデにより凹線状に窪んでいる。脚部は八字状に開くと思われる。

皿もC4の1点のみである。平坦な底部より鋭角的に口縁部が立上り、口縁端部は断面方形で外傾面となる。

土師器

71-3のSK-1より5点の皿が出土したが、風化が著しく図面化できたのは2点のみである。口縁部は丸味のある底部から屈曲することなく内弯しつつ開く。口縁端部はそのまま丸くおさめられている。調整等については摩滅のため不明であるが、E1の口縁部外面にヨコナデがわずかに残る。口径は8.2～8.4cm、器高は1.2～1.3cmを測る。

磁　器

土師器と共に71-3のSK-1より出土したもので、龍泉窯系青磁椀のⅠ-4の型式⑭である。体部内面には片彫りによる2重線で5分割された区画の中に飛雲文が描かれている。また、見込みには同様にキノコ状文様が描かれる。高台は断面方形で削出されている。釉は淡緑灰色に発色し、高台畳付部から底部外面を除く全面に施されている。口径16.5cm、器高6.9cmを測る。

漆製品

これも71-3のSK-1より出土したものである。黒漆の被膜のみ残存しているが、布目痕が認められることから漆布と思われる。形状は直径30cm前後の円形？のものを不規則に四ツ折したような状態である。

5．まとめ

今回の調査は、丘陵全域を対象としたものであったが、遺構が検出された地域は71系統のトレンチを設定した丘陵南縁部分を中心とする地域であった。しかし、その大半は遺物の出土が無いため時期不明の溝跡や土壙であった。

その中である程度年代がおさえられる遺物が比較的まとまって出土した遺構としては、71-3のSD-1のみであった。この溝跡は約24m検出されており北方へ若干弯曲しているもののほぼ直線的と言える。これがはたして古墳の周濠のように円形にめぐっていたかどうかは、周辺が削平されているという理由もあって現時点では確認できなかった。ただし、ここより出土した須恵器20点のうち9点の杯身・杯蓋を除くと甕5点、壺2点、瓿・横瓶各2点で占められ、一般集落跡等での出土状況とは大きく異なっている。したがって、古墳の周濠と断定はできないものの、古墳に関連する何んらかの祭祀に関わるものではないかと思われる。このトレンチの南方丘陵斜面において数年前に管玉が採集されたという事実もあり、この推定を裏付けるものであろう。

この溝跡の年代を出土遺物よりみれば、多少前後するものがあるものの6世紀前半～中頃におさまるものと思われる。すなわち、杯蓋において外面の稜はすでに消失しており、わずかC9にその痕跡が認められる程度である。杯身において立上りは比較的高いもののかなり内傾している。瓿においては外面文様の施され方や口径・頸基部径・体部最大径の割合からすると、彦根市葛籠北遺跡1号墳主体部出土遺物⑮より先行するものと思われる。

甕や横瓶においては口頸部等の特徴が陶邑ＴＧ44-Ⅰ号窯出土遺物に類似している⑯。ただし、甕Ｃ27のみはその口頸部の形態や外面調整により他のものより先行するものである。壺も前述の葛籠北遺跡や陶邑に類例がみられる。

以上のように、今回の調査で当初に予想された古墳を確認することはできなかった。しかし、古墳の一部である周濠の残骸である可能性が捨てきれない溝跡が検出されており、今回の調査地域が小御門古墳群の西限ではないかと思われる。本古墳群は県立成人薄弱者厚生指導施設しゃくなげ園建設に伴う昭和40年度の事前調査により発見されたもので、今回の調査地の東方約400ｍで円墳10基が確認されその中の２基が調査されている⑰。そしてその後の踏査等により、しゃくなげ園の北方約100ｍの位置にも古墳の残骸が発見されており、この地域が本古墳群の東限と現在のところ考えられている。さらに、今回の調査地東側に隣接する地域で、昭和55年度に老人ホームさつき荘が建設される際、その敷地内に円墳１基（現在築山として保存されている。）と取付道路敷に円墳らしき墳丘２基が確認されている⑱。前者１基は保存されているということで本格的な調査は実施されていないが、墳丘外縁部に葺石が認められたということである。後者の２基は調査が実施され、それぞれ大林寺西Ａ遺跡・Ｂ遺跡と仮称された。Ａ遺跡は削平が著しいものの墳丘径８ｍ前後、墳丘復元高１ｍ前後である。埋葬施設や出土遺物は無く、表層部に葺石がみられたがその状態から中世墳墓の可能性も指摘されている。また、Ｂ遺跡は墳丘径9.5ｍ前後、墳丘高1.5ｍ前後に復元され、周濠・葺石はみられなかったということである。埋葬施設は検出されなかったが、基底部より約40㎝の位置で厚さ５㎝前後の黒色土による被覆が認められたという。出土遺物は極めて小さな陶質性破片（器種不明）と極少量の骨類似物だけである。この遺跡についてはその概要を知り得るのみで、本当に古墳と呼べるものであるかは疑問であるが一応古墳と考えておくことにする。以上のように過去の調査例等から本古墳群は、大宝神社南方からさつき荘西側にかけての丘陵南縁約500ｍの範囲を持つことがわかった。

そして、今回の調査では本古墳群を構成する古墳の年代観について、新たな事実も判明した。昭和40年度に調査が実施された２基は、６世紀末から７世紀初頭に比定されている。そして、正確な出土地は不明ながら小御門古墳群出土として日野町教育委員会に保管されていた須恵器数点の中に、５世紀代まで遡る円孔透しが穿かれた短脚の高杯があった。この両者には少なくとも約１世紀の時間的な隔たりがあるが、今回の調査で出土した遺物は、これを完全ではないがその一部を補うものである。したがって、本古墳群はある程度継続的に構築されていたものと言えるのではなかろうか。ただし、従来本古墳群は家族のような血縁的つながりの強い集団を被葬者として、木棺直葬という一般的には通有でない葬法による古墳群とされているため、はたして前述のように同一の系譜を引く集団により連綿と古墳群が構築されていったものであるかは疑問の残るところである。

次に今回の調査で注目すべきものは、同じく71-3でＳＤ-1を切る状態で検出されたＳＫ-1である。これは、長軸約1.5ｍ、短軸約1.0ｍの平面プランが扁平な楕円形の土壙で、深さは約0.5ｍと非常に残存状態の良好なものである。遺構の節でも記述したように、基底部には正位の土師器皿５点、青磁椀１点と漆布１点が配置されている。なお、この漆布について円形？のものを四ツ折したような状態であるが、その折目の様子からすると漆を塗った後に折られており、どのような方法により作成されたのか不明である。そして、このような形状の漆布の出土例は無く、その用途や意味も全く不明である。基底部を精査してみたが木棺等の痕跡や人骨等は検出されなかったものの、これらの人為的に配置された土器は副葬品と考えられるためこれは明らかに土壙墓であることが知られる。遺体の埋葬方法としては伸展葬が一般的であるが、被葬者が成人とすれば土壙の規模からすると、むし

ろ屈葬によるものと考える方が妥当である。棺の存在を裏付ける根拠は確認できなかったが、棺の位置を想定することは可能である。土壙の北東辺に配置された土器はその出土状況により、原位置を保っていると思われる。漆布については、棺の内底または蓋の上に置かれたものが、棺が腐るとともに土壙基底部に位置するようになったと考えられることもできる。したがって、土壙内において土器が位置する部分を除いた約60×100㎝のスペースが棺の位置であるとすることが可能である。過去の調査例からすれば、屈葬による棺を埋葬するにはこれだけの空間があれば充分である⑲。この土壙墓の年代は出土した青磁椀により13世紀代のものであることがわかる。周辺に設定したトレンチを見る限りでは、これと同様に副葬品があり明らかな土壙墓と判明するものは認められず、この１基のみ単独で存在するようである。小御門古墳群が昭和40年度に調査された際にも、埋葬施設を土製蔵骨器とする６基を含むもののその大半は木製曲物と思われる火葬墳墓群が発見されている⑳。これより出土した遺物は瀬戸灰釉壺をはじめとする13世紀末から15世紀にかけてのものである㉑。したがって、本調査で検出された土壙墓は小御門中世墳墓群より年代的には若干先行するものであることがわかる。ただし、これが火葬墳墓群と系譜を一にする先駆的なものとするには疑問である。すなわち、両者間には集石の有無及び土葬と火葬という大きな差違が認められるからである。集石をもつ火葬墓という後者の例は調査地の北東約4.5㎞に位置する大谷古墓にもあり、12世紀末から14世紀前半という年代が与えられているため、この葬法の差違が単に時間的な差によるものでないことは明白である。この問題については今後の調査例の増加を待ち、あらためて充分な検討を要するものであるため、ここで論究することはひかえることにする。

以上今回の調査結果を簡単にまとめてみた。過去の調査では知ることのできなかった新知見がいくつか判明したことは本調査の成果と言えるであろうが、それによりまた新たな問題点が生じたことも事実である。これらの問題点については今後の調査結果により再度検討できることを願いまとめとする。

註

① 日永伊久男「内池遺跡」(『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅹ-5-2』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会　1982)

② 昭和60年度県営ほ場整備事業に伴い日野町教育委員会が調査を実施した。

③ 昭和60年度県営ほ場整備事業に伴い滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会が調査を実施した。

④ 日永伊久男「小御門城遺跡」(『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅹ-5-2』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会　1982)

⑤ 日永伊久男「十禅師遺跡」(『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅹ-5-2』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会　1982)

⑥ 水野正好『蒲生郡日野町小御門古墳群調査概要』滋賀県教育委員会　1929

⑦ 水野正好「滋賀県蒲生郡飯道塚古墳群発掘調査概要」(『滋賀文化財研究所月報1968年度』滋賀文化財研究所　1968)

⑧ 日永伊久男「宮ノ前遺跡」(『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書XII-4』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会　1986)

⑨ 昭和61年度団体営ほ場整備事業に伴い日野町教育委員会が調査を実施した。

⑩　前掲註④

⑪　前掲註⑤

⑫　『日野町大谷古墓出土「蔵骨器」展』滋賀県立近江風土記の丘資料館　1974

⑬　松澤　修「滋賀県・大谷中世墳墓群」(『歴史手帖14巻11号』1986)

⑭　横田賢次郎・森田　勉「大宰府出土の輸入陶磁器について――型式分類と編年を中心として――」(『九州歴史資料館研究論集4』1978)

⑮　本田修平『葛籠北遺跡』(彦根市埋蔵文化財調査報告第9集　彦根市教育委員会　1983)

⑯　中村　浩『陶邑Ⅱ』(大阪府文化財調査報告書第29輯　財団法人大阪文化財センター　1978)

⑰　前掲註⑥

⑱　竹山靖玄氏の御教示による。

⑲　兼康保明・宮崎幹也「高島郡今津町井ノ口中川原遺跡」(『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅹ-3』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会　1983)

⑳　前掲註⑥

㉑　秋田裕毅氏(滋賀県立近江風土記の丘資料館学芸員)の御教示による。

小御門古墳群出土遺物観察表

出土地	器種	器形	番号	形態上の特徴	手法上の特徴	法量(cm)	備考
72－2 SD－1 茶褐色粘質土層	須恵器	杯蓋	C1	○天井部は丸味をおび、口径に対して器高が高い ○口縁端部内面に内傾する段を有する。端部は外方へ軽くつまみ出される	○ロクロナデ ○天井部外面½程度は粗い回転ヘラ削り ○ロクロの回転方向は左	口径：14.5 残存高：4.5	色調：淡灰色 焼成：良好 胎土：砂粒を含み3㎜以下の礫を少量含む ○内面及び体部外面に緑褐色の自然釉がかかる ○残存⅙反転復元
		壷	C2	○体部は扁平な球形で最大径は½以上にある ○底部は丸く、安定性に欠ける ○口頸部は欠損する	○ロクロナデ ○頸部及び体部最大径付近の外面はカキ目 ○底部外面は、回転ヘラ切り後ヘラ削り ○ロクロの回転方向は右	最大径：10.4 残存高：6.2	色調：淡青黒灰色 焼成：良好 胎土：1.5㎜以下の砂粒を含む ○残存¾反転復元
		甕	C3	○口頸部はゆるやかに外反する。端部は外方に肥厚し、稜のある玉縁状となる ○体部は肩があまり張らず、最大径は不明確である	○口頸部はロクロナデ ○体部外面は平行叩き後カキ目 ○体部内面に同心円文のあて板圧痕	口径：21.0 最大径：47.5 器高：53.0	色調：淡青灰色 焼成：良好 胎土：微砂粒及び砂粒を含み、2.5㎜以下の礫をごく少量含む ○残存½反転復元
72－2 表採	須恵器	皿	C4	○体部は平坦な底部より鋭角的に屈曲して開く ○口縁部は直線的で、端部は外傾する平坦面である	○ロクロナデ ○底部内面はナデ ○底部外面に回転ヘラ切り痕 ○ロクロの回転方向は右	口径：15.3 器高：2.1	色調：淡灰色 焼成：良好 胎土：微砂粒を多量に含み、2.5㎜以下の礫をごく少量含む ○残存¼反転復元
28－2 SD－1 灰白褐色 粘質土層	須恵器	瓶	C5	○高台は貼付けで、断面方形を呈する	○ロクロナデ ○高台底部に木目圧痕	底径：9.8 残存高：4.5	色調：淡灰色 焼成：良好 胎土：微砂粒を含む 残存⅙反転復元
71－2 地山直上	須恵器	杯身	C6	○底部は丸味をおび不安定である ○体部は内弯しつつ立上る ○受部はほぼ水平につまみ出される ○立上りは比較的高く、外弯しつつ内傾する。端部は丸い	○ロクロナデ ○底部外面に回転ヘラ切り痕 ○ロクロの回転方向は左	口径：14.2 器高：5.2	色調：灰白色 焼成：普通 胎土：微砂粒を多量に含み、6㎜以下の礫を含む ○底部外面に自然釉がかかる ○残存½反転復元
71－2拡 SD－2 茶褐色粘質土層	須恵器	壷	C7	○底部は平坦である ○体部は上位に最大径をもつ	○ロクロナデ ○底部外面はナデ	最大径：7.2 底径：4.4 残存高：3.0	色調：淡灰白色 焼成：良好 胎土：微砂粒を含む ○残存½反転復元
71－3 SD－1 暗黄褐色 粘質土層	須恵器	杯蓋	C8	○口縁部は内弯しつつ下る。端部はわずかな段をもち内傾する	○ロクロナデ	口径：13.0 残存高：2.1	色調：淡灰色 焼成：良好 胎土：微砂粒を多量に含み、3㎜以下の礫をごく少量含む ○残存 1/14 反転復元
			C9	○天井部は丸く高い。天井端部には形骸化した稜が残る ○口縁部はわずかに内弯する端部はわずかな段をもち内傾する	○ロクロナデ ○天井部外面に回転ヘラ切り痕 ○ロクロの回転方向は左	口径：13.4 残存高：4.4	色調：淡灰白色 焼成：良好 胎土：微砂粒及び砂粒を含み、6㎜以下の礫を少量含む ○残存⅙反転復元
			C10	○天井部は丸く高い。稜は完全に消失している ○口縁部はわずかに内弯する端部は丸くおわる	○ロクロナデ ○天井部外面に粘土紐巻上げ痕が明瞭に残る ○天井部内面はナデ ○ロクロの回転方向は右	口径：12.9 器高：4.6	色調：淡灰白色 焼成：良好 胎土：微砂粒を含み3㎜以下の礫を少量含む ○残存⅔反転復元
				○つまみは断面台形の輪状で貼付けられる	○ロクロナデ ○ロクロの回転方向は右	つまみ径：3.8 残存高：1.6	色調：淡灰白色 焼成：良好 胎土：金雲母及び微砂粒を含み

出土地	器種	器形	番号	形態上の特徴	手法上の特徴	法量(cm)	備考
71－3 SD－1 暗黄褐色 粘質土層	須恵器	杯蓋	C11				2.5㎜以下の礫をごく少量含む ○反転復元
		杯身	C12	○受部はやや上方につまみ出される ○立上りは外弯しつつ内傾する。端部は丸くおわる	○ロクロナデ	口径　：13.8 残存高：　2.9	色調：淡灰色 焼成：良好 胎土：微砂粒を多量に含み、3.5㎜以下の礫を含む ○残存¼反転復元
			C13	○受部はやや上方につまみ出される ○立上りはほぼ直線的に内傾する。端部は丸い	○ロクロナデ	口径　：13.7 残存高：　3.1	色調：淡灰色 焼成：良好 胎土：微砂粒を多量に含み、3㎜以下の礫をごく少量含む ○残存⅓反転復元
			C14	○受部はやや上方につまみ出される ○立上りはほぼ直線的に内傾する。端部は丸い	○ロクロナデ	口径　：11.0 残存高：　2.8	色調：淡灰色 焼成：良好 胎土：微砂粒を多量に含み、2.5㎜以下の礫をごく少量含む ○残存⅒反転復元
			C15	○受部はやや上方につまみ出される ○立上りはほぼ直線的に内傾する。端部は丸い	○ロクロナデ	口径　：13.5 残存高：　3.0	色調：淡灰色 焼成：良好 胎土：微砂粒を多量に含み、3㎜以下の礫をごく少量含む ○残存⅓反転復元
			C16	○受部はやや上方につまみ出される ○立上りはほぼ直線的に内傾する。端部は丸い	○ロクロナデ	口径　：13.0 残存高：　3.0	色調：淡灰色 焼成：良好 胎土：微砂粒を多量に含み、砂粒を含む ○残存 1/26 反転復元
71－3 SD－1	須恵器	瓶	C17	○口頸部はゆるやかに外反し一旦屈曲して段をなす ○頸基部は比較的細い ○口縁部はほぼ直線的に開く端部内面は沈線状の段をなす内傾面となる ○体部は球形で、最大径は½にある。肩のはりは全く無い ○底部は丸底で不安定である ○口径と体部最大径は同一である	○ロクロナデ ○口頸部の中位に1条、屈曲部に1条の沈線がめぐり、中位の沈線から口縁部にかけて櫛描波状文が施される ○体部は上半に2条の沈線がめぐり櫛描刺突文が施される ○文様帯の下半で下方に円孔が穿たれる ○体部下半はカキ目 ○底部は円板状の粘土により閉塞	口径　：18.9 頸基部径：　8.2 最大径　：18.9 円孔径　：　2.1 器高　：26.4	色調：灰白色 焼成：良好 胎土：砂粒を含み、4㎜以下の礫を含む ○口縁部外面に自然釉 ○ほぼ完形に復元
			C18	○口頸部はほぼ直線的で、一旦屈曲して段をなす。頸基部は太い ○口縁部は内弯気味に開き、端部内面は内傾面となる ○体部はほぼ球形と思われる	○ロクロナデ ○口頸部の屈曲部に1条の沈線（突帯）がめぐる ○体部最大径のわずか上方で下方へ円孔が穿たれる	口径　：12.2 頸基部径：　4.9 最大径　：10.1 円孔径　：　1.6 残存高　：11.3	色調：内面は淡青灰白色 口頸部外面は淡黒灰色 体部外面は淡青灰白色 焼成：良好 胎土：砂粒を含む ○口縁部は焼きひずみが著しい ○体部下半欠損 ○反転復元
		横瓶	C19	○口縁部は強く外反しつつ短く立上る。端部は丸く外方へ肥厚する ○体部は俵形である	○ロクロナデ ○体部外面は平行叩きで、わずかにカキ目が見られる ○体部内面に同心円文のあて板圧痕	口径　：11.0 体部長軸：36.1 体部短軸：18.8 残存高　：23.0	色調：口縁部内面は暗青灰色 体部内面は淡青灰色 外面は暗青灰色または淡黄灰色 焼成：良好 胎土：2.5㎜以下の礫を含む ○体部外面に若干の自然釉 ○体部と口縁部の境に粘土継ぎ目 ○反転復元
			C20	○口縁部は強く外反しつつ短く立上る。端部は外方へ玉縁状に肥厚し、わずかに上	○ロクロナデ ○体部外面は平行叩きでわずかにカキ目が見られる	口径　：14.0 器高　：27.2 体部長軸：37.5	色調：内面は灰白色 外面は灰白褐色 焼成：良好

出土地	器種	器形	番号	形態上の特徴	手法上の特徴	法量(cm)	備考
71－3 SD－1	須恵器	横瓶	C20	方へつまみ上げられる ○体部は俵形である	○体部内面に同心円文のあて板圧痕	体部短軸：21.9	胎土：砂粒を含む ○体部外面に黄灰緑色の自然釉 ○ほぼ完形に復元
		壷	C21	○口頸部は直立した後、ゆるやかに外反すると思われる頸基部は細い ○体部は全く肩が張らず、ゆるやかに内弯する ○底部はわずかに丸味が残る平底である	○ロクロナデ ○口頸部に櫛描波状文 ○体部上半に2条の沈線と櫛描波状文 ○体部下半はカキ目 ○底部内外面はナデられ、指頭圧痕が残る	頸基部径：5.4 最大径：13.1 底径：11.6 残存高：16.0	色調：淡灰青褐色 焼成：良好 胎土：砂粒を含む ○体部外面に黄灰緑色の自然釉 ○口縁部欠損 ○反転復元
			C22	○体部は上半が丸く下半が直線的に内弯する ○底部はわずかに丸味が残る平底である	○ロクロナデ ○体部中位はカキ目 ○体部下端から底部にかけてはヘラ削り ○底部外面にはわずかに指頭圧痕が残る	最大径：17.6 底径：12.3 残存高：15.3	色調：灰白色 焼成：良好 胎土：微砂粒を含み2.5㎜以下の礫を少量含む ○体部上半に黄灰緑色の自然釉 ○口頸部欠損
		甕	C23	○口頸部は外弯しつつ立上る ○口縁部はほぼ直線的に開く。端部は断面が丸味を帯びた方形である ○体部はわずかに肩が張るがほぼ球形である ○底部は丸底である	○ロクロナデ ○口縁端部外面に1条の突帯がめぐる ○口頸部中位に2～3本の沈線がめぐり、その上下に櫛描波状文が施される ○体部外面は平行叩き後カキ目 ○体部内面に同心円文のあて板圧痕 ○底部内面に指頭圧痕が顕著に残る	口径：17.7 器高：28.4	色調：暗青灰色 焼成：良好 胎土：微砂粒を少量含む ○口縁部に自然釉 ○頸基部に叩き板が当った痕跡が認められる
			C24	○口頸部は強く屈曲して立上る ○口縁部は外弯しつつ開く。端部は断面台形に外方へ肥厚し、上方へつまみ上げられる ○体部の最大径は上位約1/3にある ○全体的に薄手である	○ロクロナデ ○口縁端部外面に稜の鈍い突帯 ○口頸部外面はカキ目 ○体部外面は格子叩き後カキ目 ○体部内面に同心円文のあて板圧痕	口径：23.6 最大径：46.7 器高：51.9	色調：淡青灰色 焼成：良好 胎土：砂粒を少量含む ○ほぼ完形に復元
			C25	○口頸部は強く屈曲して立上る ○口縁部は外弯しつつ開く。端部は外方へ肥厚し、下方へわずかに垂下し、上方へはつまみ上げられる ○体部の最大径は上位約1/3にある	○ロクロナデ ○体部外面は平行叩き後カキ目 ○体部内面に同心円文のあて板圧痕	口径：21.1 最大径：43.3 器高：46.0	色調：淡灰色 焼成：良好 胎土：砂粒を含む ○ほぼ完形に復元
			C26	○体部の最大径は上位約1/3にある	○体部外面は平行叩き後カキ目 ○体部内面に同心円文のあて板圧痕	最大径：46.4 残存高：39.5	色調：灰色 焼成：良好 胎土：微砂粒を含む ○残存1/2反転復元
			C27	○口頸部は鋭角的に屈曲してほぼ直線的に立上る ○口縁部は外弯しつつ開く。端部は玉縁状に外方へ肥厚し、内方はやや窪む ○体部の最大径は上位約1/3にあるが、底部が広く全体としてはずんぐりしている	○ロクロナデ ○口縁部外面には、鋭角的な沈線による2条1単位の段が2単位あり、その間に櫛描波状文と、下位にカキ目が施される ○体部外面は格子叩き ○体部内面に同心円文のあて板圧痕	口径：32.8 最大径：58.3 器高：70.2	色調：内面は淡灰褐色または淡灰色 外面は淡灰褐色または淡黒灰色 焼成：良好 胎土：砂粒を含み、5㎜以下の礫をごく少量含む ○口縁部内外面と体部の一部に自然釉 ○ほぼ完形に復元
71－3 SK－1 黄褐色粘質土混りの茶褐色粘質土層	土師器	皿	E1	○丸味のある底部から、内弯しつつ口縁部が開く	○磨滅のため不明 ○口縁部外面はヨコナデ	口径：8.2 器高：1.2	色調：淡橙灰色 焼成：不良 胎土：微砂粒をごく少量含む ○残存1/4反転復元
			E2	○丸味のある底部から内弯しつつ口縁部が開く ○底部はかなり薄肉である	○磨滅のため不明	口径：8.4 器高：1.3	色調：淡灰褐色 焼成：不良 胎土：微砂粒をごく少量含む

出　土　地	器　種	器形	番号	形態上の特徴	手法上の特徴	法　量（cm）	備　考
71－3 SK－1 黄褐色粘質土混りの茶褐色粘質土層	土師器	皿	E2				○残存¼反転復元
	磁　器	椀	O1	○底部は約1.5cmと厚肉である ○高台は削出しで断面は方形である ○体部はゆるやかに立上る ○口縁部は直線的に外上方に開く。端部はそのまま丸くおわる	○ロクロナデ ○底部外面に回転ヘラ切り痕 ○ロクロの回転方向は左 ○体部内面は2条の沈線により5分割され、飛雲文が片彫りされる ○見込みは1条の沈線により区画され、キノコ状文様が片彫りされる	口径　：16.5 器高　：　6.9 高台径：　6.7	色調：淡灰褐色 焼成：良好 胎土：精選された磁胎 ○釉は淡緑灰色に発色する ○高台畳付部から底部外面にかけては露胎 ○青磁 ○完形
71－4 暗茶褐色 粘質土層	須恵器	杯身	C28	○底部は平底で、断面方形の高台が貼付けられる	○ロクロナデ	高台径：11.9 残存高：　1.9	色調：淡灰色 焼成：良好 胎土：微砂粒を多量に含み、4mm以下の礫を少量含む ○残存¼反転復元
		高杯	C29	○坏部は丸味のある底部より内弯しつつ体部が立上り、そのまま口縁部は丸くおわる ○脚部はわずかに内弯しつつハ字状に開く	○ロクロナデ ○口縁部内面に1条の沈線 ○杯部の底部外面は回転ヘラ削り ○ロクロの回転方向は右	口径　：11.6 残存高：　7.3	色調：淡灰白色 焼成：やや不良 胎土：微砂粒と砂粒を含み、3.5mm以下の礫を少量含む ○杯部の¼と脚部の一部のみ残存 ○反転復元

1.　調査前遠景（北東より）

2.　調査前遠景（東より）

1.　調査前のM区（右）とさつき荘内の古墳（北より）

2.　M区調査完了後（北東より）

1.　M区NT　SD－1（東より）

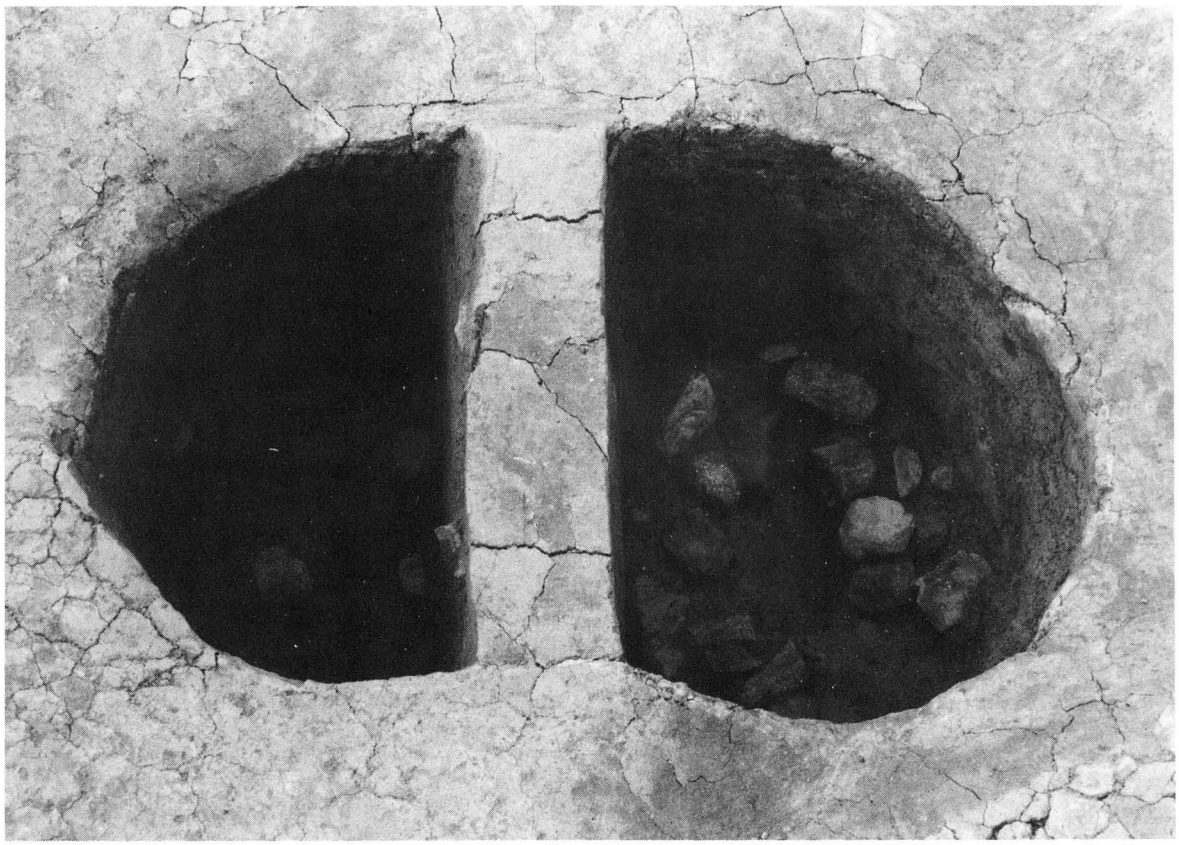
2.　M区たちわり後（南東より）

1.　46－1調査完了後（西より）

2.　47－1調査完了後（南東より）

1.　72－2調査完了後（北西より）

2.　72－2　C－C′断面（西より）

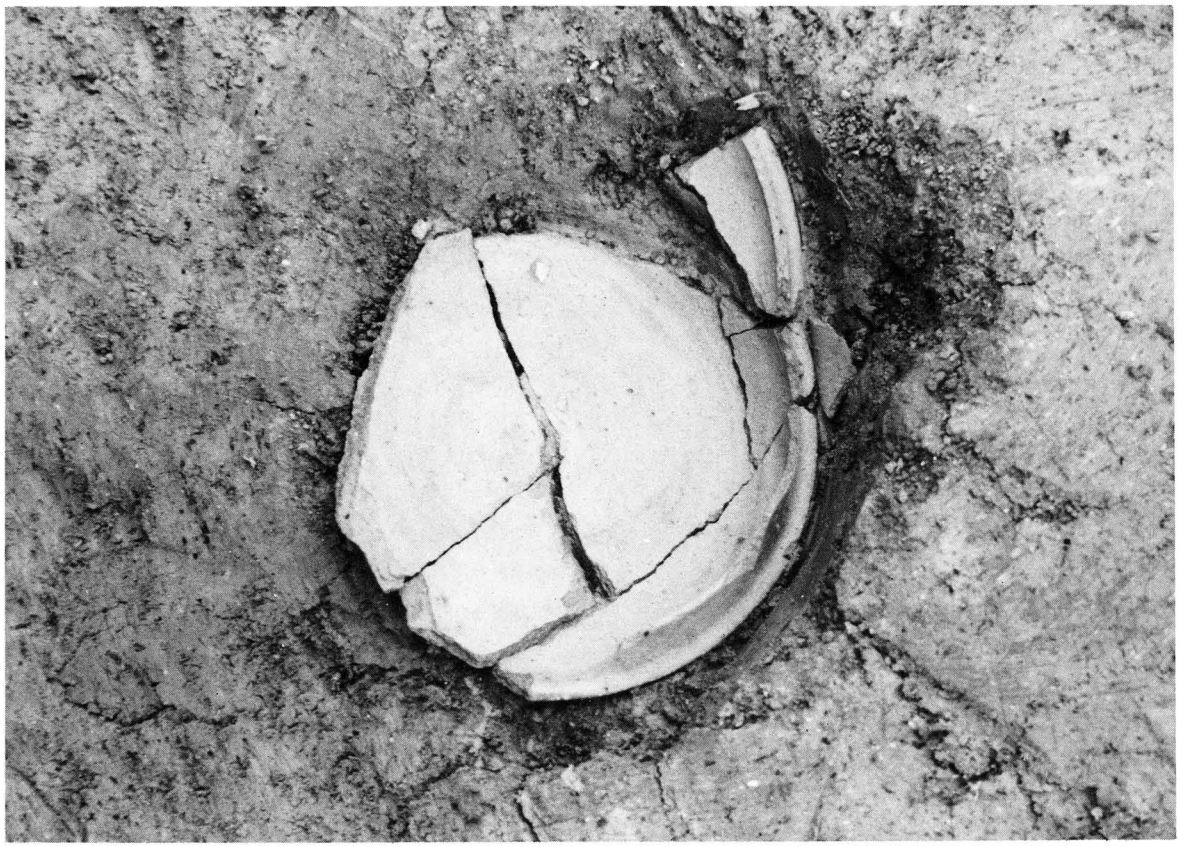


1.　72－2　ＳＫ１（南より）

2.　28－2　調査完了後（北東より）

1.　71－1調査完了後（南東より）

2.　71－2調査完了後（南東より）



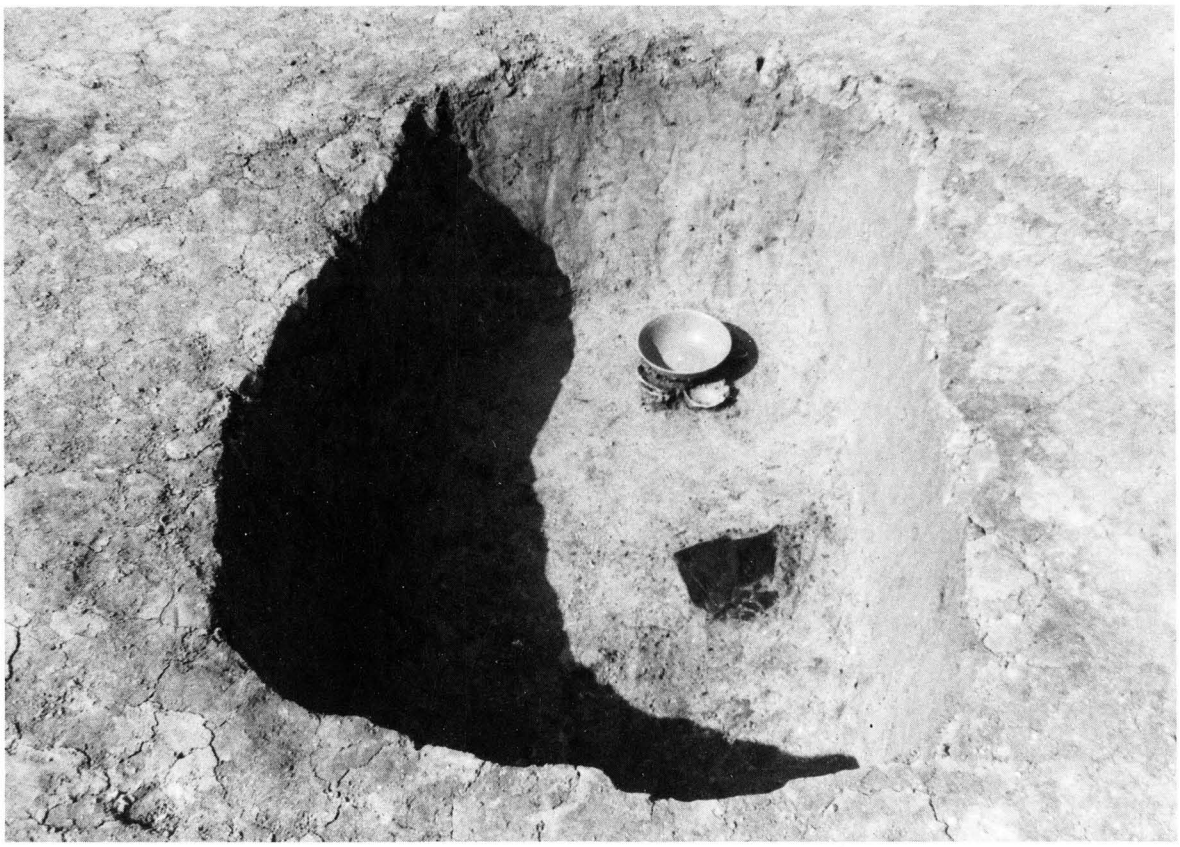
1.　71－2遺物出土状況

2.　71－2拡調査完了後（南より）

1.　71－3調査完了後（南東より）

2.　71－3　SD－1（北より）

1.　71－3　ＳＤ－１遺物出土状況

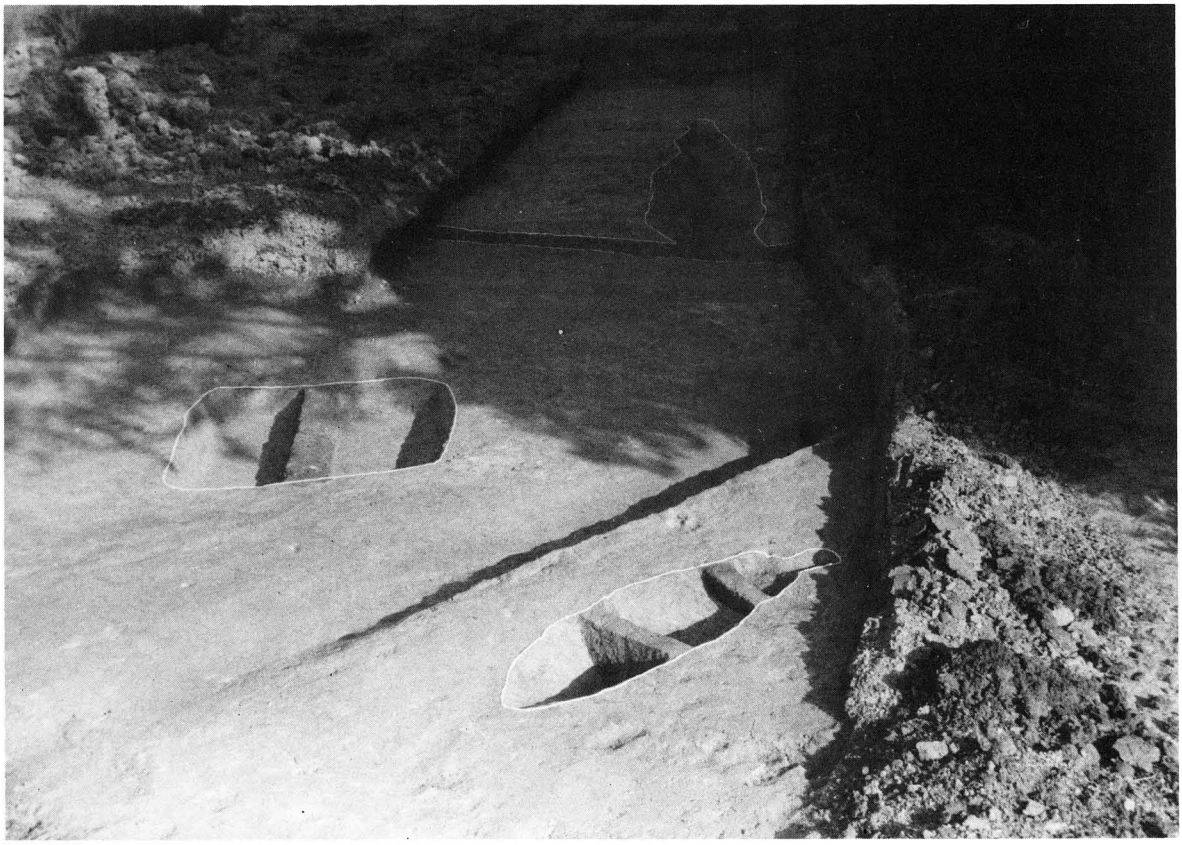


2.　71－3　ＳＫ－１（南西より）

1.　71－3　ＳＫ－１土器出土状況

2.　71－3　ＳＫ－１漆布出土状況

1.　71－4調査完了後（南東より）

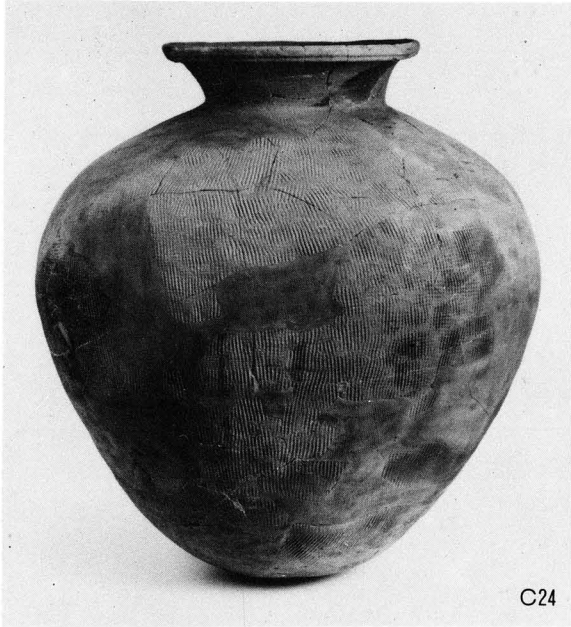


2.　71－5調査完了後（北西より）

出土遺物　72－2　ＳＤ－１茶褐色粘質土層：Ｃ２・Ｃ３　　72－２表採：Ｃ４
71－２　地山直上：Ｃ６　　71－２拡ＳＤ－２茶褐色粘質土層：Ｃ７
71－３　ＳＤ－１暗黄褐色粘質土層：Ｃ９・C10・C12

C19

C20

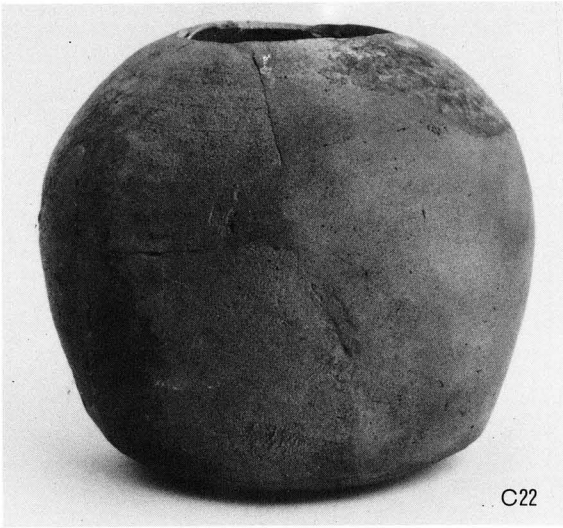

C24

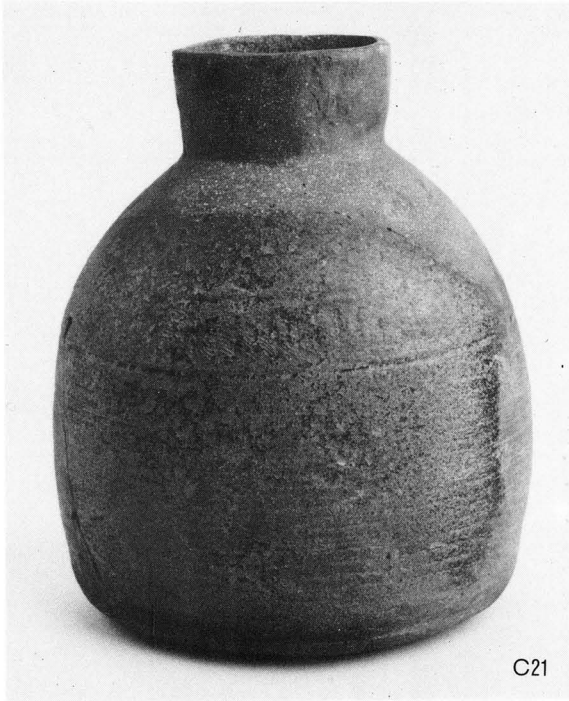
C26

C25

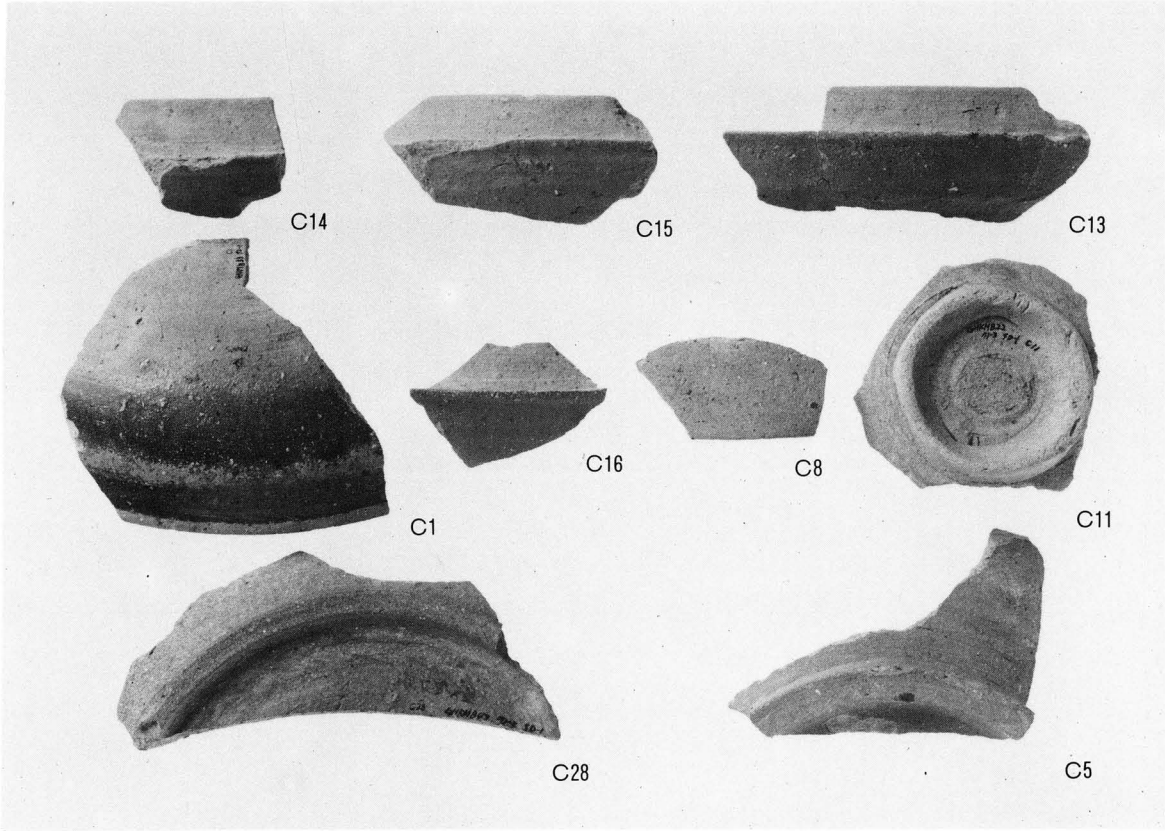
C27

出土遺物　71－3　SD－1：C19・C20・C24～C27



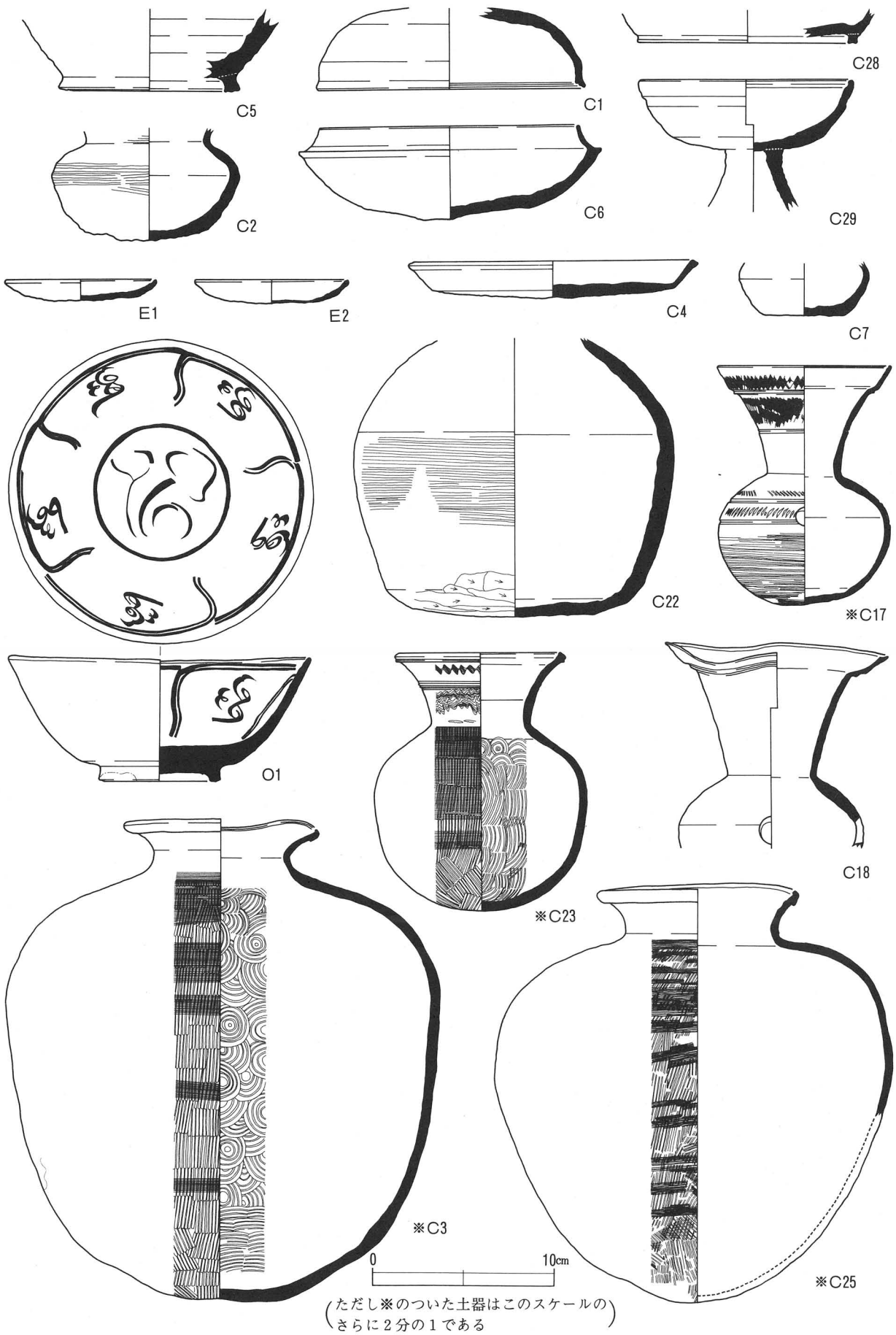


出土遺物　71－3　SD－1：C17・C18・C21～C23
71－4　暗茶褐色粘質土層：C29



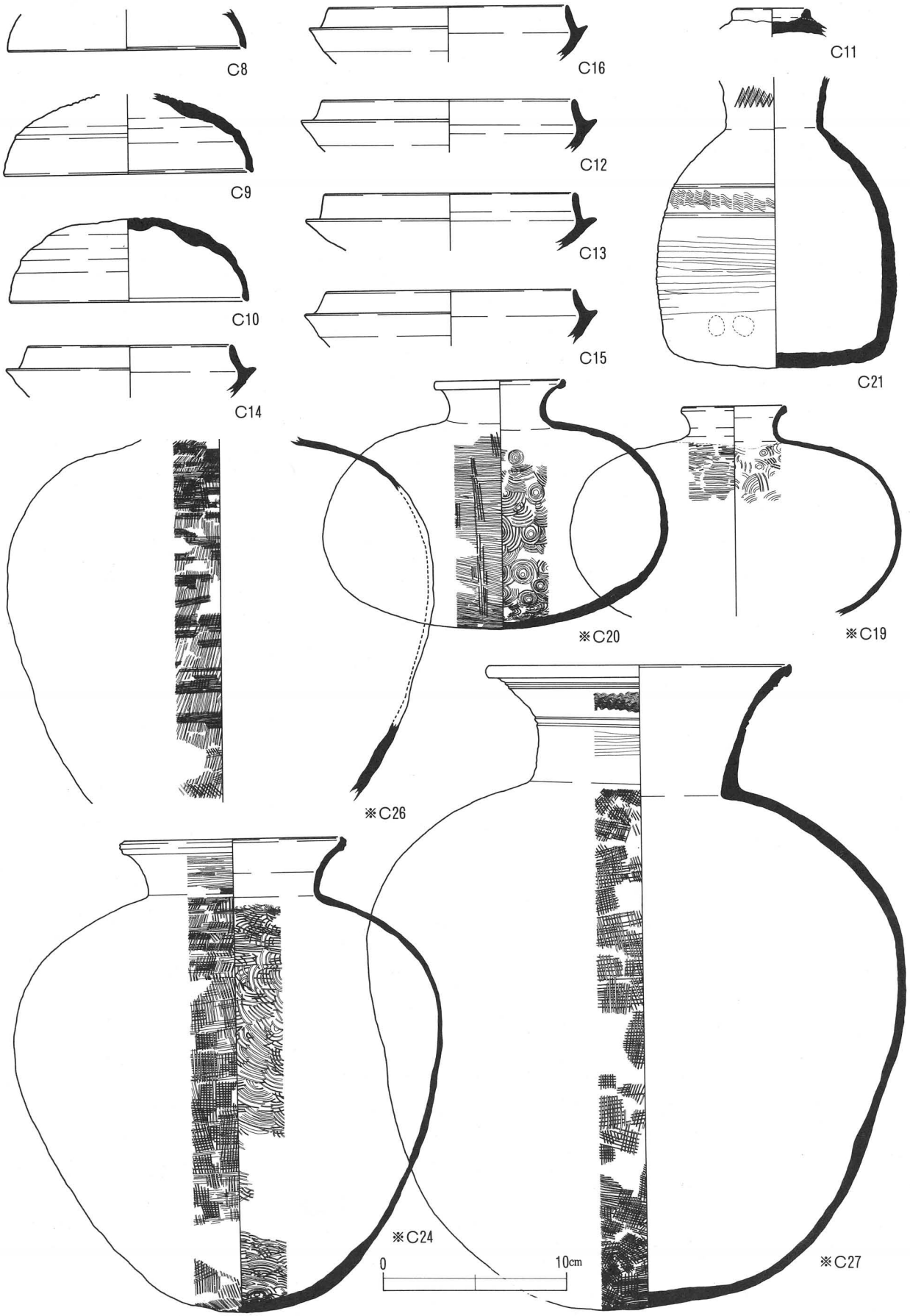
出土遺物　72－2 ＳＤ－１茶褐色粘質土層：Ｃ１　71－3 ＳＤ－１暗黄褐色粘質土層：Ｃ８・C11・C13～C16　28－2 ＳＤ－１灰白褐色粘質土層：Ｃ５　71－４暗茶褐色粘質土層：C28

出土遺物　71－3　ＳＫ－１黄褐色粘質土が混る茶褐色粘質土層：Ｏ１・Ｅ１・Ｅ２．漆布



（ただし※のついた土器はこのスケールのさらに２分の１である）

71-2　ＳＤ－１茶褐色粘質土層：Ｃ１～Ｃ３　72-2表採：Ｃ.4　28-2　ＳＤ－１灰白褐色粘質土層：Ｃ５
71-2地山直上：Ｃ６　71-2拡 ＳＤ－２ 茶褐色粘質土層：Ｃ７　71-3 ＳＤ－１：Ｃ17・Ｃ18・Ｃ22・Ｃ23・Ｃ25
71-3 ＳＫ－１ 黄褐色粘質土が混る茶褐色粘質土層：Ｅ１・Ｅ２・Ｏ１ 71-4 暗茶褐色粘質土層：Ｃ28・Ｃ29



（ただし※のついた土器はこのスケールのさらに２分の１である）

71-3 ＳＤ－１暗黄褐色粘質土層：Ｃ８～Ｃ16　71-3 ＳＤ－１：Ｃ19～Ｃ21・Ｃ24・Ｃ26・Ｃ27

昭和６２年３月

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告XIV－6

編　集　滋賀県教育委員会

発　行　滋賀県教育委員会

財団法人　滋賀県文化財保護協会

印　刷　富士出版印刷株式会社

大津市札の辻４番２０号
TEL（0775）23－２５８０